
IS ～社長、鼻血出てます～

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 社長、鼻血出てます

【Nコード】

N3914V

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

IS学園一年一組に唯一ISを扱える男、織斑 一夏が転入した時、一年二組にも男の姿があった。彼こそは天鞍久秋。印象の悪さと裏腹にIS開発最大手の天鞍社、その社長子息である。双子の妹と共に現れた彼は一夏とはまた違った学園にただ一人の存在だった。そう、彼はISを動かす事など出来なかったのである。そんな感じで、目指せ夏中に完結！でやらせて頂きます。オリキャラ多めというかメインで、原作崩壊系。専用機が沢山出たり、ちょっぴり色々設定変わってたり、まあそんな感じ。主人公は一応転生オリ主

様々。

一話：その男、金とコネ（前書き）

【注意書きとか】

・オリキャラ多めというか、複数のオリキャラ達が原作キャラに絡みながらストーリーを独自展開する形で進みます。オリキャラに対する許容範囲が広い方でないと辛いですがかも

・大まかな流れは途中まで原作沿いですが、色々と変化します。完全な原作沿いじゃありません

・作者はアニメはほぼ見ていなくて執筆開始時点で原作四巻まで既読。でもアニメ準拠で三巻に当たる時間軸で終了予定。「原作読んでません」の逆を行くアウトロ！。

・2chネタつばいのもよく使ってます。スルー出来る範囲で。

・キャラ崩壊多め。世界観魔改造多め。原作と矛盾する記述があった場合、「ああ、この二次ではそうなんだ」とスルーして頂きたい……ッ！

・作者は飽き性。今度こそ完結目指して頑張るけど投げたら超ごめん

・自分で上の文読むとむせ返るほどの地雷臭を感じたけど、それでも萎えない方はお進みください。さあ叩けよ、皆俺を批判しろよハアア！

一話：その男、金とコネ

入学式の日、IS学園は例年にはない賑わいを見せていた。

世界でたった一人の男操縦者、織斑一夏。その存在は世界各国に衝撃を与え、勿論彼の入学が決まったここ、学園でも専ら話題となっている。ぶっちゃけると女子校状態だったIS学園的に男が来ることできーきゃー騒いでいる。

しかしここ二組では、一夏がいる一組とはまた違ったざわめきに包まれている。それは好意的なものではない、むしろ悪感情が渦巻くような。嫌悪の視線が、一人に集まっている。

ねえ、あれがアマクラの……

ねじ込んできたんでしょ？ 意味わかんない

妹さん、可哀想だよ。あんなの……

視線に晒されているのは男だった。さらに言うならば彼はISを操縦する事が出来ない。

彼はこの学園二人目の男にして、唯一の『ISを操縦できない生徒』だ。

「あ、あの……君、自己紹介、してもらって、いいかな？」

教師の戸惑い気味の視線を受け、男はすっと立ち上がった。

ちっさ！

……クラス中の心が一つになった。男子の平均身長と比べると、

確かに彼の体は小柄である。小柄である。いや、もうオブラートに包まず言ってしまうえばチビである。その顔もどこか童顔気味、内に跳ねた癖毛が愛嬌すら醸し出している。クラス中の悪意の視線をビシバシ受けているのに、その顔には笑顔を浮かべていた。

「あまぐら ひざあき
天鞍 久秋だ」

威圧的な響きすら持っている。はずの言葉だが、なんか可愛い声音のせいで微妙に憎み切れない感じだった。高音の歌とかむっちや歌えそう。

ああ、これならちよつとは大丈夫？

和み要素の権化のような自己紹介に、女子たちの視線も緩む。

「皆さん知っていると思うが、俺は金とコネを使ってわざわざこの学園に入学させてもらった。知識だけはあるので、座学は参加させてもらうが実技は無理だ。果たして座学で俺に敵う奴がいるかな、ふはははは」

ん？

女子の表情がピシッと固まる。なんか、おかしい。

「まあ、お察しの通りこの学園に来たのは将来最強の戦力になるであろう皆さんとお知り合いになるためだ。そこところ、よろしく好きな食べ物は醤油、嫌いなものは特にないな」

あ、つれえ？

「そして将来の夢は……世界征服だ」

こうして初日、主人公と女子の間には埋め難い溝が生まれた。

天鞍 久秋。彼は前世を自覚する曰く転生者としてこの世に生を受けた。

だがそうして生まれてみても、結局前世は前世。今生きるリアルの前では実感としてイマイチ薄い。他の人間がどうかは知らないが、久秋にとって前世はそれほど気になるものでもなかった。まあ、前世の自分の「素敵な女の子たちと出会いまくってハーレムしてやるぜええええひゃーっはっはっは！」という思想は現実的でなくてなんか嫌だった。胃に穴が開きそう、そんな環境。

しかし前世の影響かなんだか知らないが、彼には特別な事が二つあった。

一つは、集中力である。物事に取り組むとき、彼には「だれる」というような事はない。これが逸脱^{チート}した能力って奴なんだろう。集中さえ出来れば勉強だってなんだって楽しいものだ。ISについて学ぶのも彼にとってはそう難しい事ではなかった。

そしてもう一つは、彼が『天鞍』という世界有数の企業の御曹司だった事だ。しかもとんとん拍子にISに関わる会社になった。というか、その中でもかなり特殊な位置を獲得することになった。これによって久秋は沢山の女の子に関わる事になるのだが、これも前世の希望なんだろうか。

そんな訳で童顔チビ、天鞍 久秋は、この物語の主人公であるのだ。

一話・その男、金とコネ（後書き）

やっちゃったぜ

そんな訳で二次創作は初めてみたいなもんですが、ゆるーくやっ
ていこうと思います

二話：そして妹（前書き）

・あらすじ

タイトルの意味？　ぷ、プリーズウェイト！

二話：そして妹

インフィニット・ストラトス ISの情報が世に出回った時、
兄は目を輝かせていた。

ISとはパワード・スーツだ。とある天才科学者の手によって造られたこれは、既存の兵器から大きく逸脱する性能を持っていた。本来は宇宙空間での活動を目的としていたようだが、世の常としてこれほどの技術が戦いに転化されないはずがない。今はどうにかこれを纏い戦う『スポーツ』として落ち着いているが、その機能はあくまで兵器としてのものだった。

しかしこの兵器にはたった一つ、しかし大きな欠陥があった。女性しか使えないのだ。

この事から兄の視線の理由が分からず、私は特にそれを気にかけていなかった。今なら思う、止めておけばよかったと。あそこで兄を引き戻していれば、こんな事にならなかったのではなからうか。

だれかたすけてー

「どつりやあああああああ！」

「ぐへえ!？」

いざ戦の時だと椅子を吹き飛ばす勢いで立ち上がり、空へと舞いあがる女性 残念ながらそれは私である。そのまま真後ろに居る男に回し蹴り。慣れた自分が怖い。

「あ、っ、あっ、兄を足蹴にするとは何事だ！」

「うるっさいよ!? 久秋は存在自体が恥ずかしいんだから黙って!」

瞳をうるうるさせている兄はまあ顔は可愛いのだが、まったく反省していないと分かる。なんせ、兄だ。ずっと一緒に暮らしてきた私の双子の兄なのだ。この頭の残念な生命体は。

「あ、あの天鞍……さん？」

教師に呼びかけで、自分に視線が集まっている事を悟った。顔がかつと熱くなるのが自分でわかる。大惨事だ、これ。

「あの、とりあえず座ってくださいね、天鞍……」

「……はい。えっと、ちかはる近春。天鞍 近春です」

「で、では近春さん。お願いしますね、もう本っ当に……!」

教師、涙目。ああ私が何でこんな問題あるクラスを受け持っているんだろ隣クラスのクラスに行って男の子を愛でたいよう、と顔に書いてある。ごめんなさい、先生。

「で、では、自己紹介続けてください」

気を取り直したらしい教師が促し、やっと教室はまともに戻った。兄も沈んでいる事だし、少し教室を見渡してみる。やっぱり、私に対する好奇の視線は少しあるみたいだ。兄ほどじゃあないけれど。

天鞍社は、ISが開発される前からパワード・スーツの開発に力を入れていた。戦争がミサイルなどを駆使した駆け引きが中心になっていくにつれ、天鞍社長はパワード・スーツこそが前線に必要なものだという結論に至ったのだ。兵士自身を強化すればわざわざ兵器を持ち込まなくてもいい分、進軍や撤退がスムーズになるのは道理である。それに戦争ビジネスだけでなく、このようなものは娯楽としても人々に受け入れられる。飛行可能なパワード・スーツというのは天鞍の悲願ですらあったのだ。

しかし十年前、予想外の出来事が起こった。飛行可能なパワード・スーツどころか、ハッキングにより日本を狙うミサイル全てを迎撃し、さらにはそれそのものを狙った現行兵器を倒し尽くした最強のパワード・スーツ、つまりはISが現れたのである。世間に衝撃を与えたこの『白騎士事件』であるが、この世界で最も驚いたのは天鞍社長だろう。

こうしてISは世界でも必須の兵器となり天鞍社もその開発に本腰を入れようとしたのだが、ここで一つ問題があった。ISの軍事利用の禁止などを定めた『アラスカ条約』であるが、ここにはISの要となるコアの取引を制限する旨も記されているのだ。開発者しか作れない、しかもその開発者は行方をくらませていて一向に次のモノが出来上がる気配のないコア 467という全世界で運用するのには少なすぎる数。IS発祥の地日本では政府が開発に力を入れており、天鞍社が独占して使用できるコアはほとんどない。パワード・スーツについて世界最高峰のノウハウを持ちながら、天鞍社の未来は暗かった。

そんな状況を変えたのは社長の決断だった。彼は潔く日本での開発を諦め、世界に目を向けたのだ。様々な建前からあらゆる国家に分配されたコアではあるが、全ての国にISを開発できる技術力や

資金力があるとは限らない。そこで天鞍社は一部の国に技術提供・共同開発を呼びかけたのだ。勿論この強引な手法はあらゆる組織・機関からの非難を受けることになる。しかし社長は世界に向けてこう言い放った。

「貴方がたに私どものようなノウハウ、積極性がありますか？ あらうならば黙って引きましょ、貴方がたでISを開発できない、しない国に援助をすればよろしい。しかしないならば、こちらに任せたい。何より今大切なのは、ISについての研究開発を進める事でしょう」

結局他の企業や機関は足の引つ張り合いを恐れ、手を引いた。ISについては情報開示の義務が『アラスカ条約』で定められているならば確かに天鞍ほどの技術を持つ所に譲るのもまた一手、という考えもあつたのだろう。

こうしてISについての最大手となつた天鞍だが、あの強引な手法は未だに世界で反感を受けている。さらに各国に注目される中、常に新しいもの、珍しいものを作り続けなければいけない宿命を背負つたのだ。

今、世界中の人々が天鞍社に抱く最もベタな印象は『国の弱みに付け込むキワモノ企業』である。

こりゃ、注目されても仕方ない。

「はい、ではこのまま授業になります。皆さん、席についてくださいね。もう、お願いしますよ？ 本当、ちゃんと授業受けてくださいね！？」

自己紹介も終わり、そして授業。でもまだまだ私と兄への視線は止まるところを知らない。好奇心と嫌悪感を混ぜ合わせたようなねつとりと視線は、正直気持ち悪い。

もー、ただでさえ目立つんだから黙つとればいいのに久秋はー。

『決めたぞ、チ力。俺はISで世界征服をする』

そんな事を言ったのは無邪気な子供のころ、なんかじゃなく。もうちゃんと判断もつくはずの去年の事だった。当時14歳、中学生真つ盛りである。まあ中学二年生だったからその年頃特有の「く……っ俺の腕が……！」「ふっ、奴らか」「ちイ、逃げる！ 力が暴走するぞ！」みたいな感じだと思っていたが、中三になっても引きずって、その結果がこれだった。

頭もいいし運動も出来るし、男としてはどうかと思うが顔もまあ悪くない。ガワだけなら尊敬できるいい兄なのに、中身は残念極まりなかった。

『俺が世界征服をしようとするのは、何も私利私欲のためだけではない。知っているか、チ力。発達した政治形態と思われがちな民主主義だが、これはお互いを監視し合うので最悪の状態にならないだけなのだ。名君による独裁政権こそがこの世で最も優れた政治だ。ふっ、その名君とは誰かつて？ もちろん、この俺さ。なあに、今はISしか戦力に数えられない時代、人数さえ揃えれば十分世界に喧嘩を売れる』

こんなウザいのが兄だと思いたくはないが、兄なのだ。まぎれもなく兄なのだ。

まあ、こんな兄でも感謝はしている。IS自体は嫌いではないし

「あ」

思わず、声を上げてしまった。少し振り向いた教師に、何でもありませんと首を横に振る。

『見られている』。

好奇の曖昧な視線ではなく、確実に私個人を。何せ生まれが生まれ、三ヶタに達しようかという誘拐未遂回数は伊達ではないのだ。視線には結構敏感になっている。ちらと、そちらを見ている。

IS学園は世界で唯一のIS操縦者養成学校、つまりは全世界から人が集まっているのだが、こちらを見ていた女は黄色人種だ。日本人ではない、あの切れ長の瞳は中国人か韓国人か、まあそこいらだろう。手入れされていないざんばら髪にあの鋭い視線、どこか野生の獣をすら思わせる女。はたと気づく、この女は視線を隠そうとすら思っていない。こちらに気付かせようと思っている……？

口の端を持ち上げにやりと笑うその様はまさに獣。それで満足したのか、次は兄の方へと視線を移した。……兄の方？ やはりあれは、私個人でなく私の苗字へあてた視線なんだろうか。

よく分からない。とりあえずすぐに何があるわけでもなさそうだし、真面目にノートを写すことにした。……やべ、もうだいたい書いてる。

その後、授業はつつがなく進み、そして二時間目。間の休憩中に一度兄にボディーブローを決めたが平常運転。二時間目も全く問題ない。

三時間目。事件は起きた。

「あ、あの皆、クラス代表を決めていいかな？ えっと、ちゃんと選んでくれるよね？ ほんっと、お願いね！」

「せんせー、クラス代表ってなんですかー？」

「あ、そうだね、説明しなきゃね。えっと、委員会とかあるとお仕事お願いする時があるの。クラスの中で一番の代表さんだね。あ、それと入学時の実力を測るためにもクラス代表同士でISバトルする行事がそろそろあるからね。慣れてる人がいいかも」

クラス代表、つまりは委員長決め。なりたい人が居たら居たで揉めて、居なければ居ないで押し付け合いが始まる地獄の行事だ。過去が走馬灯のように蘇る、私はそれで三年連続受賞してしまった押し弱さだ。兄以外には弱いのだ、意外と。

「自薦でも他薦でも構わないからね！」

そう言った瞬間　もはや雄々しいとも言えるほどの泰然と手を挙げたのは兄だった。低いけど。

いやいやいやいやいやいや！

クラスの心と私の心はきつと一つになった。いや、お前、IS動かせないだろ。

しか兄はそのプリティフェイスに不敵な笑顔を浮かべたまま

「先生、天鞍　近春を推薦する」

そう言っ　ああ！？

自薦ではなく、他薦だった。いやまあ自薦してしまうよりいいが、これは一体どういう事だろう。

以下、兄妹会議。

「久秋、どーいうつもり？ 私、あんまりやりたくないんだけど」

「いやいや、ここはやっておくべきだろう。クラス代表になる 友達が増える 俺の手駒が増えるよやったねヒサちゃん！ マーヴ エラス……っ」

「お前の都合かよ！」

「ばしいつと裏拳を放つ、が受け止められる。ぬう、この兄腕を上げている！」

「兄より優れた妹などいない……はおいとして、 実際専用機持ちがクラス代表になった方がいいだろう？ お前の専用機、そろそろ仕上がるぞ」

確かに、学園所有の量産機を使うより個人の持つ専用機の方が強いのは当たり前だ。専用機を持てるのは国家の代表ぐらいだが、私は私でISを開発している企業の娘なので専用機ぐらいある。……まあ、余所の開発の尻馬に乗っていた天鞍社として初めての第三世代型なので入学に間に合わなかったのだが。

専用機、という言葉が聞こえたのだろうか。周りも私への微妙な視線はあるが、「専用機持ちなら仕方ない」と言っただけだ。

「あ、先生もね、やっぱり専用機持ちの子がいいと思うの」

おずおずと発言する教師。趨勢は決した、もういいか私が代表でも……そう思った時、さっきの兄と同じかそれ以上に自信満々に拳がる手。

あの、私を睨んでいた子だ。

「あいつは……」

兄が驚いたような、しかし納得したように目を見開いた。知り合
い？

「今さらでしゃばんなよー」みたいな空気もなんのその、女は立
ち上がり、その乱れた髪をかきあげた。片方に、黄のイヤリングが
見える。

「専用機なら、ヨンファも持つてるよ。で、天鞍の娘さんはアタシ
より強いのか？」

そのイヤリングがきつと専用機なんだろう。啞然とするクラスの
中で、兄がポツリと口を開いた。

「天鞍社の技術提供を受けた韓国の代表候補……朴・瑛華……」

二話・そして妹（後書き）

「あらすじ」は毎回ネタにしか使わない

そんな訳で今日はここまで。書き溜め出来てる所までは毎日投稿させて頂きます。書き溜め使い切ったらペース落ちます

三話：お部屋の問題、社長の問題（前書き）

・あらすじ

代表決定戦は様式美

とりあえず繋ぎ回にして主人公ヨイシヨ回です。これが最低系というものだ

三話：お部屋の問題、社長の問題

ここ十年で、ISは急速に進化している。

まず初めに生み出されたISは第一世代と呼ばれている。これでも既存の兵器を凌駕した性能を誇っているが、しばらく第二世代と呼ばれるISが登場する。後付武装^{イコライザー}によって様々な状況に対応できるようになり、ISの常識は変わった。今では後付武装を駆使して戦うのが一般的だ。

そして近年、それをさらに超えた第三世代が開発された。遠隔誘導兵器などの他に類を見ない特殊兵装の搭載を前提としたISがそれだ。今各国はこの第三世代へと移行しようと、データを集めている最中なのである。

そしてその発展の為に開発される一点物、それが専用機だ。誰でも扱える量産機とは違い、一人一つ、他人には扱えないようになっている文字通り専用の機体。国家や企業が認めた人間に渡され、通常のISとは違いアクセサリとして持ち運べる待機状態がある。何より、予算度外視の実験機でもあるので量産機とは比較にならないほどの性能差がある。これを持っているという事は、IS学園ではかなりのステータスとなるのだ。

朴・瑛華は専用機持ちであり、国家の代表である。しかし彼女の人生は決して裕福なものではなかった。

『今日からお前の名は瑛華、ヨンファだ』

自分の名前なんて、あったかどうかも忘れていた。だから、朴家

に引き取られて初めて聞いたその言葉が、自分の名前だった。

自分と『共犯』だった二人は本当の父母かどうか知らない。ただ12歳まで父らしき男、母らしき女と一緒に盗みや脅しを繰り返していた。罪悪感なんてまったくない、言うなればあれは『的』だ。目標物・金を持ち運ぶ雑魚キャラ。クリアすれば明日のごはんになりますよ、というだけ。

だから両親が捕まって私がその家に引き取られた時も、あまり何かを感じるという事はなかった。というか、永遠に続くと思っていた日々が急におかしくなって、よく分からなかった。

インフィニット・ストラトス　その名前ぐらいは街頭のテレビで知っていた。しかし自分が乗るなんて考えてもいなかった。

初めに与えられたのは『打金』という日本製量産機。どうやら私は上達が早かったようで、次々と様々な事を教え込まれた。

私は様々な技能を教え込まれた。しかし逆に言えば、それだけだ。私にはそれ以外、何も与えられたものがない。

世間の人は、友達とか恋人だとか隣人だとかをよく話す

でも私には分からない。本当に、何も誇張ではなく、私には『私』と『他人』しかないのだ。

いや、私が特にそういう認識が出来ない障害を抱えているとか、そういう訳ではない。実際、「ああ、この人は　という人でという役割があるんだな」というのは理解できる。さっき担任の顔も覚えた。

だが、分からない。AさんもBさんもCさんも私にとっては同じにしか見えない。他人という群体だ。　さんだからどういう風でしょうだとか、どういう風になるのかなとか、全然わからない。

私には普通が与えられていない。でも、力は与えられている。

強くなるう。強くなるう。誰よりも。強くなって、強くなって、そこから先はどうしようなんてない。ただ、昔の盗みと同じ。ルーチンワークだ。強くなるために強くなってそれにより強くなり最後には強くなる。ずっとずっとずっと強くなる。

だからクラス代表にならないと。
それぞれのクラスの最強を倒して、私が最強にならないと。

『勝負だよ、天鞍の娘。ヨンファが勝ったらクラス代表、負けたらアンタがクラス代表。おーけい？』

一方的にそう言い捨てて、ヨンファはさつさと座ってしまった。
呆然とするクラスの中で、久秋だけがただほそ笑んでいる。ちっちゃいけど

そして放課後

「意味わかんない、何あの子！？ クラス代表したいなら譲るのに！」

椅子に反対に座り久秋と向かい合う形で、近春は喚いていた。ずっとイライラしたまま授業時間を過ごしていたようで、疲れたような怒りが顔に浮かんでいる。

「珍しいじゃないか、チカ。お前は他人には弱いのにな」

「弱いじゃなく優しいとか言いなさい、もーこの兄貴はー。ていうか私の意志とか関係ないじゃん、なにこれ！」

ぶんぶん頭を振るたび、後ろで縛つてあるポニーテールが跳ねる。兄の久秋と同じく癖毛で髪が纏まりにくいのでいつも髪は縛っているが、毛先が気になるお年頃である。身長はまったく違つし、顔立ちもどちらかと言えば凡庸だが。双子は双子でも、二卵性なのだ。

「ていうかさ、久秋。あの子の事知ってたんでしょ？ 何であの子をクラス代表に選ばなかったの？ 私、専用機まだ出来てないし……」

「……ま、ちよつとな。お兄様の秘密だ」

ふつ、と気障に笑う兄。うぜえーとため息をつく妹。

「あ、あの……」

一旦会話が落ち着いた時、非常に遠慮がちな女性生徒の声が聞こえた。近春の後ろから声をかけてきたので久秋には顔が見えた、クラスメイトの一人だ。

「えっと、天鞍さん……私たち、寮の部屋が一緒みたいんだけど……」

ぼそぼそと喋る少女の様子は、明らかに天鞍という名前への不審があつた。悪名高きゲテモノ企業、少し浮くのは覚悟してたけどここまでとは 近春はこっそりと目を伏せる。

「……ここに来たのは、お前の意志だろ。頑張れよ」

誰にもわからないようにしたつもりだった近春は、正面の兄の言

葉に驚き顔をあげる。いつも通りの久秋の顔がそこにはある。聞き間違いかと考える前に、両手で顔を挟まれた。そしてそのまま、横に。

そこにあつたのは、不安げな表情の少女。

こ、ここは私から歩み寄らないといけないよね。うん。

意を決し、近春は立ち上がった。

「あ、あの！ ありがとう、と……それと、近春とか、チカって呼んで。前の友達、そう呼んでたし」

精いっぱい笑顔。少女の顔から不安が消える。

その様子を見届けて、久秋は満足げに微笑み　そして椅子を蹴ってダッシュした。

「ははは！ 解決したようで何よりだ。ではな皆の衆！」

どうしたんだろう、と思う間もなくクラスから走り去る久秋。教室にはただポカンとした表情の女生徒達だけが残った。

思ってたより、遥かに、やばいー！　うわー！　うわ、うわ、うわ、恥ずかしいー！

……内心こんなことを思っているのは、絶賛廊下を走り抜け中の久秋である。

久秋は前世の記憶をおぼろげながらも持つ者として、前世の「世界のオンナは俺のモノおおおお！」思想を鬱陶しく思っていた。

しかし、今は思う。女性に対する耐性だけでも受け継げばよかった。

久秋は、幼いころの方がより前世の記憶を多く持っていた。それはつまり、情緒が芽生えていない時期に「女性に対する関心がある自分」が存在することを意味する。

正直、彼にとってかなりの地獄だった。男だ女だとあまり意識しない筈の時期から色々考えて悶々としてしまうのだ。最低の気分だった。一時期、小学生の頃は勉強しながらもそのせいで不登校になったほどだ。とりあえず中学は男子校へと進学し、ふうこれで一安心と思っただのも束の間、そこではさらなる問題が。

男子校、中学生男子の集まりである。これが何を意味するのかというと、若き性の爆発である。流石に男同士などのアブノーマルな体験はなかったが、エロ本エロDVD持ち込み当たり前、会話は猥談、行動は覗き。勿論そんな事ばかりではない、それは一部だ。しかし一部でもそんなものが存在しては、彼にとって健全な学生生活は送れない。

前世があまり褒められた人格でなかった事も問題の一つだ。久秋は前世の行動を汚らわしいものとして、反面教師として質実剛健、正しい人間として生きようと思っただけだったのだ。反面教師に、し過ぎたのだ。

しかし、性根はそう簡単に変わらない。抑え込まれた性的欲求、女性への興味は抑え込まれただけで消えてはいなかったのだ。いくら彼がストイックに生きていても、男のエロスはバースト寸前である。

結果、彼は高校生にもなって思春期がMAXのような悲しい事になっていった。

うわあああああん畜生おおおお！ 俺のバカ！ 俺のバカ！
力！ いいいいいやあああ！

妹にすら見せない醜態を心の内側で晒しながら、久秋はどことも
知れず走り続けていた。『昇華』である。性的欲求は運動で解消す
るに限るのだ。誰かIS持って来い今なら俺は飛べる、とか思いな
がら走り続けて 首根っこを掴まれた。

「え？」

そのままずるずると引きずられていき

「え？ え？」

そしてどことも知れぬ扉の向こうへ

「え、ええー？」

「チカちゃん、どうしたの？」

「ん……いや、今兄の魂の叫びが聞こえたような……」

兄妹シンパシーなんてないから、気のせいだろうけど。まさかあ
の兄に限って人に助けを求める訳がない。「助けてー」ではなく「
お前に俺を助けさせてやる」というタイプだ、あれは。

とりあえず、私とさっきの女の子イオリちゃんは部屋で荷物を整
理していた。私が窓際のベッドをいただき、その周りに生活用品を

並べている。

「お兄さん……ちょっと、変な人だよな」

イオリちゃんは優しい子のようだが、ちょっと顔が引きつっていた。まあ、仕方ない。どうやら天鞍社についてあまり偏見がない方のようだが、あの男はそれ以前の問題である。

金とコネで強引にIS学園に入った男。最悪極まりない。

「……ま、でも女に生まれてれば私よりずっとずっと、ここに入るべきなんだけどね」

兄の人生は、凄まじいの一言に限る。昔から成績はトップだし、小さいナリで結構喧嘩も強い。公式にはなっていないが、IS学園入学の際の筆記試験でも上位十位に入っているという。

そもそも、父に「他国との共同開発」を提案したのは当時まだ小さかった兄なのだ。しかもあくまで一意見としてだが、共同開発した国の代表候補性の選出にも関わっていたらしい。

今ならISの整備なんかも知識としては持っているし、一から自力での開発は無理でもアイデアを出せる程度には構造を把握している。身内の買い被りかもしれないが、女なら学年で首席となっても驚かない。

だから、私はアレに追いつきたい

それに比べて、私は普通だ。それなのに専用機を任せられる事になっている。なんだか、複雑。

「あの、失礼な事かもしれないけど……」

イオリちゃんの声。急に現実に取り戻される。どうやらもう並べ終わってしまったらしい。

「うん、いいよ。何でも聞いて」

「あの、あのお兄さんって今、天鞍社の重役の一人なんだよね？」

「……まあ、一応」

先代社長、つまり私たちの父は行方不明となっている。出張中の出来事なのでもう生きている望みは私も兄も持っていない。初めは泣いたが、五年も前の事だ。もう悲しみは癒えている。

兄が会社を受け継ぐことは決まっていた、その能力には誰もが納得し縁故だけではないと皆が思っている。しかしいくらなんでも若すぎた。当時は小学生で、今でもまだ高校生なのだ。『若が二十歳になるまで会社は守ります』と言ってくれた重役が社長に収まり、高校に上がった時から兄は会社の仕事の一部を引き受けて勉強している。

「で、それがどうしたの？」

「いや、ちょっと玉の輿かな、って……えへへ」

照れたような表情のイオリちゃん。まあ冗談なんだろうけど……あれが普通に女の子と付き合ってる所なんか想像できないなあ。

「おうい、誰か若に連絡しとけ。あと十日ぐらいで出来るってよ」

「馬鹿何言つてんだ、ただでさえ遅れてんだぞ。一週間で仕上げるぞ」

「うへえ……ま、お嬢の晴れ着だ。さっさとやってしまおか

私達だけで作り上げる初の第三世代、『遊影^{ゆうえい}』をよ」

三話：お部屋の問題、社長の問題（後書き）

書き溜め分読み返してて気づきました。

僕、ISで少年漫画風味なのがやりたかったんだ。

四話：惨劇のお部屋（前書き）

・あらすじ

早速オリキャラの不幸自慢

四話：惨劇のお部屋

久秋の前に座っているのはヨンファだった。

現在、久秋はヨンファの部屋でベッドに座っている。初めは逆だったが、「ふ、この俺を地につけるとは立場が分かっていないようだな貧民」というと快く代わってくれた。今、ヨンファは真剣な表情で胡坐をかいている。何で代わってくれたのか久秋にもわかんない。

沈黙すること数分、動いたのはヨンファだった。

まず見えたのは頭頂部。彼女は緩やかに体を前に倒した。そのまま、重々しく掌を設置。体を支え、ぐぐつと首を垂れるその姿はまさに DOGEZA。ジャパニーズが好んで使う究極の必殺技である。主に進退窮まった時に使って自分を必殺する恐ろしい技だ。

「ヨンファのISを強くして！」

驚いた、いろんな意味で。そして久秋は停止した。

「あー、あのな、朴・瑛華」

気まずそうに頬をかきながら一言。

「ISは一度作ると、技術者からはどうにもならんぞ？」

インフィニット・ストラトスは自己進化する。それこそが従来の兵器との一番の差ともいえる。

勿論後付武装による強化は出来る。パッケージと呼ばれる追加装備もある。しかしISの根本的な部分に関しては初めの段階で決まるのだ。解体してコアを初期化すればまた別の機体を作れるが、そんな事をするならば自己進化による経験の蓄積を取るのが賢明である。

乗り手に合わせた自己進化。これこそがISの特徴であり、稼働時間が物を言う真理である。

「なるほど、なるほど。勘違いしていたよ」

「……これはかなり基礎的な部分のはずなんだが。一般的な生徒ならともかく、お前は代表候補生だろう」

あくまで真剣にうなずくヨンファと、疲れたように天井を仰ぐ久秋。

「でもね、普通にISに乗りたい人はもともと子供のところから勉強するんでしょ？ ヨンファはふつーの勉強始めたのも13歳からだし、よく分からないな。本を読むためにも日本語の勉強が先だったし。やっぱり学校あるし、日本の本の方が詳しいね」

そういえば、と思い至る。普通ならば小学生時分からISについての学習を始める生徒も多い中で、ヨンファはその年になるまで一般的な学習すら受けていないのだ。

久秋は知っている。なにせ、彼女を選んだのは天鞍社でもあるのだ。同じ年の専用機持ちで自社に関係ある人間の経歴ぐらい把握している。

しかしそれだけに、部屋を見渡して胸が締め付けられた。

「……お前、荷物は？」

何もない。

そこには何もなかった。備え付けられたベッドだけ。もう片方のベッドの周りには生活用品らしきものが広げられている。しかしまさか、他人のベッドまで自分の荷物を寄せている訳がないだろう。

「ここにあるものだけで十分に暮らせるよ。シャワーだってご飯だってあるなんて、豪華だね」

その言葉には何の疑問もない。年頃の少女らしい言葉ではない。仕方ないと言えば仕方ない。彼女はまともな暮らしを知らぬまま13歳まで育ち、その後は天鞍社の変則的な機体への適性があるということで詰め込み教育でISについて学んだのだ。その事で得もしただろうが、未だに彼女は世間というものを知らない。

「なら、ご飯を食べに行くぞ！ 奢りだ！ 大金持ちのこの俺が奢ってやる！ さあ、スイーツだろうがなんだろうが貪りくらいその体重に戦慄するがいいはあーっはっはっは！」

立ち上がり、ならば自分が贅沢の味を覚えさせてやろうと久秋は大声を上げた。ちなみに台詞は照れ隠しでなく平常運転である。

それに驚くでもなく、ヨンファの顔が輝く。

「お腹いっぱい食べていいの？ それは嬉しいな」

「おっと、量だけではなく質も考えろよ？ なにせこの俺が奢るのだから！ せめて5ケタの食事でないと払いがいがないわッ！」

「う、うん？ 分かった、頑張るよ」

そして久秋はこの先について思いを馳せる。彼には代表候補生たちに関わり続ける理由があるのだ。

さて今度は妹と一緒に服でも見てやるか、それともどこかに連れて行ってやるか、友達でも出来ればそっちに任せようなどと色々と考えていて油断した。まったく無造作に、床に座り込むヨンファに手を差し出したのだ。

そしてヨンファも反射的にその手を取り

その時、久秋に電流走る

女子に対する過剰な意識はある程度克服していたつもりだった。

沢山の女の子に囲まれているならいざ知らず、一人と向かい合って話すぐらいなら造作もない。そう思っていた。

決して柔らかい手とは言えない。幼い頃から厳しい環境に身を置き、名を得てからもISに限らず鍛錬に励んだのだろう。皮が剥けてマメができたその手だが、それでも女の子ならではの繊細さがあった。

一度意識してしまうと後はもう坂道を転げ落ちるように様々な発見をしてしまう。気にしてもいなかったが、ヨンファは今タンクトップにジャージのズボンだけの姿なのだ。そのラフな格好はまた、シャワーを浴びた後であるという事でもある。濡れた髪から漂うのは女の子の香り、流石IS学園備え付けのシャンプーもいいもん使ってやがる。

そしてこの見下ろし視点で気づいてしまった。制服を着ているときには気付かなかった事実。ヨンファは着やせする隠れ巨乳だったのだ！ どうしても首元から覗く肌色から目をそらすと、そこにはただの壁。否、ただの壁であろうとそれは今密室を意味する記号となる。「女の子と一つの部屋で二人つきり」である。

上の文を読むのがたるい人向けに言うと握手×濡れ髪セクシー×
着やせっぱい〓破壊力

久秋は鼻血を噴いた。

「え？ あれ？ ねえ、なに？ どーしたの？」

呼びかけは遠く、意識は闇の淵へと落ちていく。ショックと出血
多量で。

翌朝、食堂に向かう一組の男女の姿があつた。

IS学園には久秋のほかにもう一人、男がいる。久秋は自ら捻じ
込んだのだが彼、織斑 一夏は違う、世界で唯一の男IS操縦者な
のだ。その特異性から各方面に狙われ、どの国の思惑にも影響され
ない安全地帯であるIS学園に入学する事になったのだが

箒の機嫌が悪い

彼の隣には一人、女性がいる。ポニーテールと刃のような雰囲気
が特徴的な幼馴染、篠ノ之 箒だ。むすつと顔をしかめたまま、一
言も話さない。本人は元からこんな顔だ、なんていうかもしれない
が違う。いつもの箒はもつと可愛い。

さて何が原因なんだろう。突如決まった部屋割りで同じ部屋にな
ってしまったことだろうか。その時、不注意で裸を見てしまったこ
とだろうか。それともこれまた不注意でブラジャーを見つけてしま
い、不用意な発言をしてしまったことだろうか。

心当たりがあり過ぎる……ッ！

一夏は悪い事をしてしまったと自分を恥じた。こちらから見れば女だらけの息が詰まる学園内で見つけた心許せる幼馴染だが、なにせ何年も会っていないかったのだ。女の子なんだから、向こうも色々あるのだろう、色々。

ちなみに箒は一夏に昔から恋心を抱いているのだが、ここでそんな事を微塵も考えないのが一夏という男である。

「なあ、箒……」

「名前で呼ぶな」

「し、篠ノ之、さん……はい」

二人の間に流れる微妙な空気。篠ノ之という苗字はこの時代では曰くつきなのだが、そんな事は最早どうでもいい感じた。

そうこうしている内に食堂についたのだが、何やら騒がしい。人をかき分け、騒ぎの中心を覗いてみると

げ

朝食にしては凄まじい量を食べる女がいた。そのアジア系の女子は、クールな外見を完璧に放り出した握りスプーン（子供の持ち方）でチャーハンを食べていた。他はラーメンとから揚げと、横にはスイートポテト。中国人？ というどうでもいい疑問が一夏の頭に浮かぶ。中国と言えばもう一人の幼馴染は元気だろうか？ それもどうでもいい。

隣に座っているのもこれまた珍しい。顔を茹でダコみたいにしてぶつぶつ呟いてる男だった。そしてチビだった。もう一人男がいる

と噂で聞いていたのだが、あれがそうなのだろうか。
立ち尽くしていると、女の方がこちらを見た。

「あ、しのののの!」

「わ、私は篠ノ之だ! のが多い!」

どうやら彼女の目に留まったのは箒の方だったらしい。

「知り合いか、箒?」

「寮の部屋が分からなくて迷っていたから、少し世話を焼いただけだ。私の方は名前も知らん……」

疲れたようにため息をつく箒。どうやら疲れさせるような性格の子らしい。

だがしかし 一夏は考える。それでも箒は彼女と関わっておくべきだろう。頑固な性格の箒はあまり他人と反りが合いやすい方ではない、あのように何も気にしない性格の方が仲良くなりそうだ。こうして、箒の「一夏と二人で食べたいな」的乙女妄想を打ち砕く言葉が発せられる。

「まあ、知り合いだったら一緒に食べたらいんじゃないか? 俺が箒の分もとってくるから、あいつらの前の席取つといてくれよ」

「な、ちょ、ちょっとまって一夏! 一夏ー!」

乙女の叫び空しく、男は食堂のおばちゃんへと歩を進める。ふ、いいことしたな俺……とか思いながら。

「よ、箒。お前も和食でよかったよな？」

「ああ、問題ない」

結局相席することになった箒の元に、二つトレイを持った一夏が現れる。どうやら向こうはラストスパートのようでラーメンを食っている。隣の男はそもそもと不味そうにパンを食べていた。

「とりあえず自己紹介でもしとこうか。俺は織斑 一夏。一応、ここじゃ有名みたいなんだが……」

「知ってるよ、織斑。ねえ、織斑ってしののののこイビト？」

「な ツー!?」

箒が絶句。しかし一夏はまったく動じた様子もなく。

「いや、久しぶりに会った幼馴染なんだ」

超冷静だった。箒の「少しは慌てる……っ!」という決死の呟きは彼には決して聞こえない。

ヨンファも全く気にした様子なく、「そっか」と言い最後の麺を掻き込む。

「ごちそうさまでした! ……で、私は朴・瑛華。それでこの人が天鞍 久秋!」

「よろしく……」

顔を伏せたままぼそりと挨拶するチビ改め久秋。調子でも悪いのかな、と一夏は解釈してとりあえずはそのままにする。

食後のスイートポテトに手を付け始めたヨンファと同時に、箒と一夏も食事を始めた。周りの女子の視線は気にしていたらきりがないので無視することにする。ヨンファと久秋のおかげで席が埋まっていた助かった、と思う。そうでもなければあの内の何人かが一夏を取り囲んでいたはずだ。昨夜、部屋に何人もの女子が詰めかけてきたことから確信できる。

どこか安心したようにぽけーっと食事する一夏と対照的に、箒の顔は段々と陰しくなっている。スイートポテトを完食し二度目のごちそう様を迎えたヨンファは、偶然その顔を見た。

「ねえしの、なんで怒ってるの？」

「怒ってなど……っ、いや、そうだな……」

箒は勿論というべきかなんというべきか、やはり怒っていた。その怒りの根底にあるのはほとんど恥ずかしさだ。裸やブラジャー、それに喧嘩を他人に見られたこと。一夏にとっても不可抗力だ、それは理解している。しかし理性だけで全てが解決すればおまわりさんもないのだ。

「こんな軟弱な男と同じ部屋になって、私は心底迷惑している！」

響き渡る大声。しんと静まり返る食堂。

心にもない言葉だった。『一夏なんて』と怒り続ける心と、『訂正しなければ嫌われる』という理性がせめぎ合う。それは両者とも一夏を恋愛対象として慕うからこそそのもの。乙女心は複雑怪奇なのである。

このままじゃ取り返しがつかなくなる、箒は混乱する頭でそれだけを理解した。凍りついた世界の中で何を喋るかも決めずに口を開こうとする。が、それよりも早く

「そんなに迷惑？ 私、天鞍と同じベッドで寝たけど窮屈じゃなかったよ？」

沈黙が沈黙に塗りつぶされた。それはまったく質の違う沈黙であった。だって次の瞬間には食堂が黄色い声に包まれたのだから。久秋は真っ赤な顔をさらに赤くして噴き出していた。

『え、なにに！？ まだ一日目でもう！？』 『しかも、寮内で！？』 『出会った瞬間ドキメいて！？』 『ラヴラヴランデヴーでドキエンゲージ！？』

意味が分からない言葉が飛び交う。きっと言った本人たちも意味分かってない。

「そ、そんなおまつ、お前……は、破廉恥な！」

「でも、天鞍が（手を）離してくれなかったんだもん！」

広がる誤解、爆発する歓声。一夏は状況についてこれずに、久秋は現実逃避したくて思考停止する。この平常心を保っているのはヨンファのみである。箒は箒で顔真っ赤だし。

「そもそも！ そもそもだ！ 寮でそういう事をするというのはどうあっても……」

「確かに。（鼻血の勢いが）激しくて、（鼻血で）シートが汚れち

やったよ。難しいね」

女子生徒の音が超音波の域に達した。箒は顔を真つ赤にして脱力したように椅子に座り込んだ。なんというか、地獄絵図である。

そんな中、一人の女生徒が集団の中から駆け出すのを一夏は見た。ポニーテールだが、隣に座る箒とはまるで印象が違う、ただ活発そうな少女。

「オッルウアラアアアアアア！」

その少女が、久秋に飛び蹴りをかました。

「久秋！ この……っ、てめっ、久秋イイイイイ！ あんたが不祥事起こすと私も、ああもう！ もうなにこれえええええ！」

「ちょ、誰だかしらんが落ち着け！ そいつ首があらぬ方向に……！」

「（慣れない環境だったから）ちょつと寝不足かなあ」

「妹さんだ！ 天鞍の妹の方だ！」 「え、もしかして……嫉妬？」

「きやー！ 生まれた時から愛してました！？」 「タブーを乗り越え愛の語らい！？」

一夏はずっと思考停止していた。なにこれ。

結局、この騒ぎは寮長、織斑 千冬が登場して全員を肅正するまで続いた。

四話：惨劇のお部屋（後書き）

やっと真の主人公織斑　一夏さん登場。

実は二次創作で原作キャラ登場させたの投稿するの初めてなので怖いです。ひっそり投稿せずにやったり、キャラ貸し借りする企画はやったりした事あるんですがなんか感覚が違う……！

一夏はあんまりボケません。原作での「心の中でボケる　ヒロインが心読む」という流れを三人称でやるのは実にやりにくい。この小説で一人称視点を持つのは妹のみです。多分。

あと、やっとタイトルの意味出せた。かつてここまで鼻の血管の弱いオリ主が居ただろうか

五話：真・惨劇のお部屋（前書き）

・あらすじ

着 や せ っ ぱ い

五話：真・惨劇のお部屋

そこは織斑　一夏の部屋だった。

無愛想で人付き合いが得意でない箒だが、あの食堂での一軒が功を奏したのかヨンファとは仲がいいらしく今日も二人でいるようだ。ヨンファが一方的に懐いている部分もあるのだが、心の機微が鈍^{なまくら}な一夏さんには大親友にしか見えないのである。

「頼む、織斑」

そして今、一夏はベッドに座っていて目の前の男　久秋を見下ろす形となっている。

まず見えたのは頭頂部。彼は緩やかに体を前に倒した。そのまま、重々しく掌を設置。体を支え、ぐぐつと首を垂れるその姿はまさにDOG（以下略）。二度ネタにしては文字数が多すぎる、天井は勢いが肝心だ。

「エロ本を……貸してくれ！」

「は？」

「でね、ヨンファと天鞍が戦う事になったの」

「ああ……そちらでもそんな事になっているのか」

箒は今、学園側に自由時間のIS貸し出しの許可を得ようと受け付けに向かっていた。一緒にいるヨンファはなんか勝手についてき

た。

そもそも箒が何故ISの貸し出しを試みているかというと、一夏の訓練のためである。さらに何故一夏に訓練の必要性があるかというと、二組と同じで一組でもクラス代表を決めるために決闘が組まれているのだ。

一夏の対戦相手はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で専用機持ち。まったくISの経験がない一夏では勝負になるはずもない。

まあ、それでも一夏なら……

と、買い被ってしまうのが恋する乙女だったりするのだが。

その後も色々あった挙句一夏をコーチする事になった箒だが、ここ三日はずっと剣道しかしていなかった。自分より強くカッコよかったはずの一夏が鈍っていて箒の怒りが爆発したことが原因である。恋する乙女的には許せなかったのだ。もう恋する乙女が免罪符になっ

てきているが。

とりあえず、このままだと剣道漬けの日々になるところを止めたのが久秋だった。先ほど部屋にやってきて『ISの訓練もたまにはやるべきだろうさあ篠ノ之貸し出しの許可にでも行ってきたらどうだ大丈夫だ織斑は俺が見張っている』などと早口で捲し立ててきた言ってる事は正論なので従ったが、やはりよく分からない男である。

「しののの、こっちだよこっち」

「あ……っと、すまん。考え事をしていた」

考え事をしている内に受付に着いていた。とりあえず、まずはこちらを済ましてしまおう、と箒は頭を切り替える。

「駄目だったね」

「まあ……よく考えてみれば、当たり前のことではあるよな」

下された答えは不許可。理由は『まだ授業で実技を扱っていない時期から自習は認められない』との事である。それはそうだが、基本も知らない生徒に怪我でもされたらコトである。いや、怪我だけならまだいいがISは仮にも軍事兵器にすら使えるもの、搭乗者を傷つけないシステムがあるからと言って易々と扱っていいものではない。

「ISなんて簡単なのにね。ズバンでドカンでババーってやればいいだけだし」

「うむ、そういうものだよな。やはりまずは基本的な動きを見直すためにも剣道を続けるべきか……」

……実際、かなり教えるのに向いてない二人がISに乗って教えたところで成長したかは非常に疑問であるので、一夏的にはまだこの方がよかったのかもしれない。

（しかし……天鞍は何故あんなにも焦っていたのだろうか？）

天鞍 久秋は女性に慣れていない。この数日でそれを再認識してしまった。

久秋は例外的に寮ではなく近所に住んでいるのだが、妹の近春に

荷物を届けたりすることもある。その時に薄着の女子を見ては鼻血が噴き出しそうになるので目線を下げてやり過ごすしかない。

授業中にたまたま体が触れたりしても大変だ。ビクウっと大げさすぎる反応をしてしまう。

これからもし間違えて着替えを見てしまうようなことがあれば命に関わりかねない。わりとマジで。

「だからエロ本を借りたいのだ……！ 女に慣れたいのだ……！」

「お、おう。なんか大変なんだな……」

現在、土下座は解除しているが正座中の久秋である。自分の不甲斐なさに唇をかみしめている。わりとマジで。ギャグシーンで命を落としたら死んでも死にきれない。

「でもなあ、俺千冬姉え　　って、織斑先生の事だけど、まあ姉弟なんだけどさ　　で慣れて、大抵は大丈夫だぜ？　お前も妹いるだろ？」

「は？　何を仰る、妹のあられもない姿など見る機会がないだろう。まさか風呂上りに出くわすわけでもあるまいし」

家がクソ広くて生活スペースがそれぞれ馬鹿でかいお金持ち様の意見だった。一夏はイラつとした。

しかし一夏としても、何とかしてやりたいという気持ちはある。かたや唯一の男操縦者、かたや無理矢理入った金持ち野郎と境遇はかなり違うとはいえ、このIS学園にたった二人しかいない男だという事に代わりはない。仲良くはしたいと思う。だが……

「そもそも、エロ本なんて持ってきてないぞ」

そう、一夏は一時帰宅もせずにいきなりこの部屋に割り振られ、その荷物は姉である千冬が運んだものである。私物は着替えくらいのものだ。そもそも、何故か幼馴染の筈と同じ部屋を割り当てられているのだ。今でも気まずい思いをする事が多いというのに、そんな迂闊な本を持ち込める訳がない。そう、この部屋には物理的にも精神的にもエロ本などあるはずがないのである。

「ん？　だが、そのベッドの下の何かオーラを放っている段ボール箱はなんだ？」

「うおおおう！？」

ありました。

外枠の段ボール箱だけで分かるわけがないではないか、などと思うかもしれない……だが否、そのいかにも怪しく童貞臭いオーラはそれがエロ本であろう事を如実に示している。ならば答えは一つ、それは織斑　千冬がこの部屋に持ち込んだもの　！

「ち、千冬姉え……」

流石の鈍感男織斑　一夏も赤面である。一方久秋は『織斑先生』の人柄も知らず、彼女がサムズアップしている光景を想像した。現実の千冬はそんな事しないが。

「よ、よし……開けてみるか、織斑」

「ッ！？　待て天鞍！　これは千冬姉えの罠だ！」

「だが俺達にはこれを開くしか道は残されていないだろう！？　お

前だって、実はわりと切羽詰っているのではないか!？」

「ぐ……っ!？」

そう、一夏も男の子である。主に朝とか隣で寝ている筈に気を遣う事が多い。それ以外にもまったくアレしていないとアレな事になりそうで一夏として大変気を揉んでいるのだ。女の中に男が一人、というのはそういう心配もあるのだ。久秋が学園の外で暮らせるのは『ISに乗れない一般人』であるからで、一夏は保護の観点から見てほしいと外で寝泊まりする訳にもいかない。

だが……っだがこれさえあれば素早くトイレでイタす事が出来る……っ!

下品ではあるが生理現象なのだから仕方ない。女だって月一のアレがあるのだ。男だって同じだ。このままでは取り返しのつかない悲惨な事になって学園内に居場所がないとかそういう事にもなり得る、危険なのは久秋だけではない、一夏もギリギリの所にいるのだ。政府とか、教師とか、そこら辺にも気を遣ってほしいと思う。これが女尊男卑か。

だが姉千冬だけは違った。弟としては死ぬほど気恥ずかしいが、最善ではある。流石千冬姉え、である。

「なあ、悪い話ではないだろう? 俺はこれで女に慣れる。お前は最悪の悲劇を回避する。そう、これこそが助け合い……! 頼む、俺は本屋でそういうコーナーに近づくだけで血圧脈拍が上昇して危ないぐらいなんだ!」

「だ、だけど……」

「迷うな織斑！ 貴様の中の獣が目覚め、篠ノ之に危険が及んだらどうするッ！」

「っ！？」

そうだ、箒 久しぶりに再会した幼馴染。男と同じ部屋だなんて異常な環境でも自分を受け入れ、さらにクラス代表決定戦に向けて協力すらしてくれている。今、このIS学園で最も信頼の置ける人間の一人であり、大切な友人だと一夏は思っている。その彼女の心に深い傷を刻むような真似をしてもいいのか。それで男と言えるのか、織斑 一夏。

男・一夏、決死の表情で拳を握りしめる。

「よし、開けるぞ……！」

「そうだ、それでいい……！」

ゆつくりと、久秋は段ボール箱を引き出した。意外と軽い、中身はせいぜい五冊ぐらいか。慎重な手つきで、二人は箱を挟んで対角に座った。ごくり、と唾をのむ音はどちらのものか。

段ボール箱に手をかけたのは一夏だった。二人顔を見合わせ、同時に頷く。そして開封を

「一夏」

途端、ドアから膨らむ殺気。

見るまでもない、そこに居るのは篠ノ之 箒。羞恥と怒りの壁を越え、今ここに人を超えた剣鬼となった女である。

一夏はおるか、過去何回も誘拐されかけ感覚を磨いた久秋も気付けなかったドアの開閉。あまりに濃密な殺気により、気配などかき

消されている。これが達人を超えた魔人の域　　！

「ちょ、待つ　　」

「問答無用」

ちなみにエロ本は姉×弟モノでした。

（くつくつく……織斑よ、貴様の犠牲は忘れん……ッ！）

久秋は掠め取った一冊を手に、寮の廊下を走っていた。

箒にとつて許せなかったのは、想い人である一夏の破廉恥さと自分ではどうにも処理出来ない謎の感情（ストレートに訳すと「性欲処理は私でしろ」）である。故にもう一人の久秋など視界にも入らなかったのだ、決してチビだからではない。決してチビだからではないのである。

そんな訳でエロ本を手に入れた久秋は走る。一路、自分の家に向かって。

「あら貴方がもう一人の男でして？　貴方とくればあの失礼な殿方よりもってちょちょちょとー！　は、話を聞きなさい！　止まりなさいってばー！」

途中で金髪の女に声をかけられたが気にしない。振り返らぬ男、それが天鞍　久秋。

五話：真・惨劇のお部屋（後書き）

なんか……こう、ごめん

六話：一夏VSセシリア（前編）（前書き）

・あらすじ

一夏……無茶しやがって

六話：一夏VSセシリア（前編）

天鞍 近春とセシリア・オルコットの遭遇は偶然であった。

セシリアは先ほど彼の兄に無視されたところでひどく気が立っていた。元々男と言うだけでも唾棄すべき存在なのにあの入学経緯、あの態度。そもそも男のくせにISの開発に立ち入り、しかも邪道も邪道、まったく美しくない方法で最多のコアを扱っている現状は許せるものではない。

近春は偶然出会った彼女に対してなんら思う事はなかった。そろそろ代表を決定する試合という事で気持ちの高ぶりのまま走り、そして戻ってきたところだ。疲れていたし、金髪なんて多国籍のIS学園では珍しいものでもないし、それがセシリア・オルコットだという事に気付けなかったのだ。なにせ、近春は資料で少し見たぐらいだったのだから。

しかしセシリアは知っていた。IS界の恥部、天鞍社 その社長令嬢の顔ぐらい。

「ちょっと、その貴女」

「ほえ？」

それは八つ当たりだった。セシリアは自分の行動が酷く滑稽だと思いつつも、それを止めようという気すら起こらなかった。天鞍社に対する憤りは確かにあるのだ。

「貴女が天鞍 近春ですわね。セシリア・オルコット……という名をご存知？」

「あ、ああ。貴女がセシリアさんですか。あの、イギリスの代表候

補で、専用機持ちで」

『あの男の子と戦うって言う』と、そう続けようとした時、それより大きいセシリアの声で掻き消される。

「そう！ 貴女と違い、実力で専用機を手に入れた代表候補ですわ！」

「……どういう意味ですか？」

これには曖昧に話を聞いていた近春も眉をしかめた。急に馬鹿にされたのだ、これで怒らない人間はいないだろう。

「貴女のISランクはCでしょう？ 貴女より優秀な人はこの学園にいくらでもありますわ。それなのに貴女には専用機が与えられる、ただ企業の関係者というだけで。何か、反論があたりで？」

それは、事実であった。

ISランクはあくまで初期の格付けだ。それ以降いくらでも技術を高めることが出来る。だが、それでも、彼女より優秀な人材がたくさんいるは確かである。

黙り込んだ近春を見て、鬱憤の全てを吐き出すように、セシリアは続ける。

「大体、何ですの！？ 私達国家が真面目にISを開発し、研究しているというのに横から掠め取るような真似をして！ 今回の貴女の兄にしてもそうですわ！ 本気でISを学びに来ている者への冒瀆です！」

「そこまで言うんだったら！」

我慢の限界だった。近春は他人に遠慮するところがあるが、何も感じないわけではない。

セシリアとしても、少しばかり声を張り上げられたぐらいで引くようなやわい女ではない。ISに関わる者として、誇りを持つ代表候補生として、天鞍社に対する怒りもある。

「クラス対抗戦で勝負です！ 私や兄が劣っていない事をそこで証明しましょう！」

「望むところですね！ まあ、私と当たるまで勝ち抜ければですけどー！」

お互い、頭に血が上り過ぎて自分がまだクラス代表でない事など忘れていたのだった

クラス代表決定戦。奇しくも一組と二組のそれは同じ日程であった。クラス担任同士の公正な話し合いの末、先に試合する事になったのは織斑 一夏とセシリア・オルコットである。

「さあ、踊りなさい。私セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{フルツ}で！」

セシリアはずっとずっと、入学したあの日から怒りが続いていた。ずっとずっと自分は頑張ってきたのに。唯一の男だから？ 金持ちだから？ そんな理由だけで専用機を手にして偉ぶる奴らがいる。

三年前に両親が他界してから、オルコット家の莫大な財産を、名の誇りを守るために駆け抜けてきた。IS適性が高いと知った日か

ら血の滲むような努力を続け、代表候補となりようやく自分で自分のモノを守るようになったのだ。

それを……！

目の前にあるのはただ白く無骨なIS。自らの青と比べ、その貧相さを心の中だけなす。織斑 一夏に重なって見えるのは母に頭の上がらなかった父 擦り寄って来た親戚 いやらしい目で見てくる研究者 そして、あの恥知らずの会社の息子。

男なんて……！

全ての怒りを込めて、セシリア・オルコットは手の内の長大なレザライフル《スターライトMK?》の引き金を引いた。

「善戦しているな、織斑は」

一組の担任であるところの織斑 千冬はその試合を観戦 とうより、職務上監督していた。二組の担任と一組の副担任は他の仕事に追われているらしく、ここに居たのは千冬一人だ。そして現れたのは天鞍 久秋

「教員には敬語を使え」

だったが、無手だった千冬から繰り出されたチョップが頭に当たった。主人公補正と言えど織斑 千冬の洗礼は逃れられぬ。

しばらく痛みに頭を抱える久秋。冗談ではなく本当に痛いのだ、これは。

「……善戦している、と言ったな。そう見えるか？」

アリーナに目を向けると、そこにはただ逃げ回るだけの一夏の彼女の弟の姿がある。傍目から見ればセシリアが圧倒しているようにしか見えない。初めの鬼気迫る表情はどこへやら、セシリアは今や優雅に獲物を追い詰める猛禽の風情だ。

「いや、あれは動きを見ているのだろ……でしょう。ブルー・ティーズは自立起動兵器ビットを搭載しているから、まずクセを読むのは悪くない……と、思います。射撃をしないのは疑問……ですが」

そう、ブルー・ティーズ最大の特徴は六基のビットを扱う所にある、それこそが第三世代である証である。敵を見ればビットに狙われ、ビットを見れば隙が出来る。ISに搭載されているハイパーセンサーは全方位の視界を乗り手にもたらずが、実際の目で視認しなければ反応は遅れる。ならば動きを把握しようとするのは正しい判断だ。

心の底で絶対に言葉にはしない賞賛を弟に送りながら、隣にいる少年の意見に頷く。前半部分は。

「減点だ。おそらくあの機体　織斑つむぎの白式めいしきには射撃武器が備わっていない。よく観察しろ」

「……ほう、ウチが手掛けた訳でもないのに随分とピーキーな機体だなですね」

天鞍社の実質的な後継者、天鞍　久秋。千冬はその存在に少しばかりの有用性を見出していた。

金とコネで入学。彼本人が言ったその言葉は確かに間違っていない

い。間違つてはいないが、致命的に言葉足らずだ。

そもそも彼の入学が認められたのは、織斑 一夏の入学が発端となっている。まず、同じ男として彼の心のケアを務める友人としての役割が一つ。

また、彼を目的に増えるであろうIS学園の代表候補 つまり専用機持ちへの裏の指南役である。本来専用機持ちとは一学年に三人もいればいい方なのだが、今は天鞍社の人間を合わせて六人もので授業時間内に全ての生徒を平等に見なければならぬ教員にとつて、それら専用機それぞれの特性を伸ばそうとするのは難しい。そこで内側から意見の言える者がいればいいという事になったのだ。

彼の後押しをしたのは企業の後継者としてISに触れ続けている事への信頼感と能力、そして天鞍社に協力している国家をはじめとする国からの推薦である。日本政府も既に例外的な一夏の入学を認めている事もあり、効率を重視して久秋の入学を認めた。企業と国家である。^ネ家である。

それを得るだけの能力が、久秋にはあった。

「……織斑先生、どうやら状況が動くようですよ」

「分かっている」

既に戦いが始まってから二十七分が経過しようとしていた。

「私を相手に、よくもった方ですわ」

「……そりゃあ、どうも」

セシリアの心を占めているのは満足感であった。目の前のISは中波しており、シールドエネルギーもそれほど残っていないだろう。競技としてのISバトルは相手のシールドを0にした方の勝ち、つまりセシリアはもう一夏を追い詰めているのだ。

やっぱり、男なんてこんなものですか

それと共に、少しの落胆。女尊男卑のこの時代、セシリアは寄り付く男に屈したことなど一度もなかった。それは正しい選択だったと思う。しかしその度に、何故か心のどこかで落胆する自分がいる。その思いを振り切るように、セシリアは右腕をかざした。

「さあ、^{フィナーレ}閉幕と参りましょうー！」

その動きに連動してビットが一夏を狙う。多角的に移動するビットと、一夏を狙い続けるスターライトMK?の銃口。回避だけは巧いようだが、ブルー・ティアーズにとってそんなものは問題にはならない。二基のビットが同時にレーザーを放ち、狙い通りの場所に誘導。そして次はライフルによる射撃。どうにかかわしたようだが、これ以上の回避は出来ないだろう。

いただきましたわ！

待機させてあったもう一つのビットが装甲を失った部分を狙う。シールドで防ぎきれないダメージにはどんなものでも防げる『絶対防御』が発動するが、それは大きくエネルギーを食うのだ。この状況で発動してしまえば、おそらく一夏のシールドは0になる。セシリアの勝ちだ。

「ッ！ ぜあああああ！」

だが、そうはならなかった。強引な加速　まるで体勢の整わぬまま、一夏は逃げるよりむしろビットに突撃。その手に握られた近接用ブレードを振るう。

「なんつて、無茶苦茶な……！」

ビットは、ブレードに叩き斬られていた。無茶苦茶だ、下手をすれば一夏はやられていた。それだけの大博打をした後だというのに、一夏の振る舞いに大げさなものは感じられない。ただ俯き、手の中で何度かブレードを弄ぶ。

「決めた」

一夏は顔を上げ、セシリアを見た。その表情には疲れが見える。これほど集中する戦闘でしかも初戦なのだ、当たり前的事である。だがその瞳には意志が宿っていた。強い意志。勝利へと向ける執念の心。

「まずはそのビット、全部叩き落とす！」

一瞬見惚れかけたセシリアであるが、力強い言葉に意識を引き戻される。

このような気迫を相手に手を抜くなど失礼な……って、私男を相手に何を……

混乱しかける頭。しかし思考は隅に置く。今は戦う時で、目の前に敵がいるのだ。

「やれるものなら、やってみせなさい！」

セシリアの基本戦術パターンはビットによる多角攻撃と、その隙を狙ったライフルでの射撃である。基本にして最強、相手を寄せ付けない優雅な光の雨。そう、一度強引に攻略されたからと言ってそれを変えることはない。偶然が三度も続くほど世の中は甘くない。

セシリアは右腕をかざし

「一つ、このビットはお前が命令しないと動かない」

その前に一夏のブレードがビットを捉えた。回避する気配すら見せず叩き落とされるビット。

それは凶星であった。セシリアが集中してビットに命令を送った時のみ、ビットはその思考に応じて動く。腕をかざす動作は集中のためだ

しかし、今でもう一つのビットは動きましたわ！

しかも、命令を送っていないもう一つのビットは比較的セシリアに近い位置にある。これならば一夏も警戒して近づけまい。

「二つ」

甘かった。

一夏はライフルの射線に入る事を恐れず、おそらく最高速度で突っ込んでくる。セシリアまで目と鼻の先という所まで近づき、無抵抗のままのビットを斬る。

「制御には意識を集中させなきゃいけないから、その時お前は攻撃できない！」

これもまた凶星である。ライフルとビットによる多角攻撃の唯一の欠点。

まだ……まだ焦る事はありません！

一夏はビットを二基撃墜したが、それと引き換えにセシリアは最高の位置取りを得た。ライフルを撃つには近すぎる。だが彼の背後には四基のうち、最後に残った一基のビットが迫っていた。

「三つ、このビットは俺の反応が一番遅い位置を狙う」

一夏は振り向き、ブレードを放り投げた。そこには丁度ビットがあり　今、四基すべてが撃墜された。

なんですって!?

セシリアにとって信じられない事態だった。確かに彼女は反応が遅い位置を狙う。ISの360度視界とて人間の感覚では限界があり、そこを狙えるだけの技量がセシリアにはあった。しかし逆にそこを突いてくる人間など一夏が初めてである。

「ですが……おあいにく様！」

四基が全て撃墜されたと言ったが、ブルー・ティアーズのビットは『六基』ある。

腰部のスカート状アーマーと同化しているビット　しかも奥の手、レーザーではなくミサイルを発射する　が素手のまま、心に油断が生まれた一夏を狙う。流石にこれは予想していなかったのか　一夏の顔が歪む、それとは逆にセシリアは好戦的に微笑み　発射。

爆発と光が周囲を包む。

織斑　一夏の白式が吹き飛ばされていくのがおぼろげに見える。

セシリア・オルコットは勝利を確信した。

「……!？」

しかし、いつまで経っても勝者を告げる声は上がらない。おかしい、シールドエネルギーが0になれば教員の方で確認が取れるはず。ならば答えは一つ、一夏と白式はまだ敗れていない。

煙の向こうに、白い光が爆ぜるのが見えた。

まさか

ゆつくりと一夏は態勢を整え、ゆつくりと先ほど投げたブレードを握る。

まさか……!

「貴方ッ！　今まで初期設定だけで戦っていましたの!？」

専用機を真に持ち主専用に合わせてには二つの行程が必要となる。フォーマット フッティング 初期化と最適化である。これを終えていなければISはその力を十全に発揮できず　というより、そもそも、そんな初期設定を置き去りにして戦う馬鹿が今までいただろうか。少なくともセシリアは初めて見た。

煙が晴れ、現れたのは白の威容。どこか無骨であった凹凸から滑

らかでシャープな印象へと全体が変化しており、背に二基備えられたウイングスラストアが翼のように見える。その姿は騎士か天使か、神々しい何かに見えた。

握り締めたブレードも光に分解され再構築。急速な変化を遂げる。先ほどのブレードも日本で言うカタナというものに近く異質な感じがしたが、より反りのあるその武器は 太刀は、ISに関わる者なら誰もが知るそれに酷似していた。

ユキヒラ……！

IS世界大会『モンド・グロッソ』の初代覇者、現IS学園一年一組担任織斑 千冬の武器である雪片。いくら姉弟と言えど、この符号は一体

「セシリア・オルコット」

まっすぐに、ただまっすぐにこちらを見据える瞳。

「俺は準備できたぜ」

その瞳を見て、セシリアはある種の心地よさと共に悟った。

ああ、今はそんなことどうだっていい

ここに居るのは織斑 一夏とセシリア・オルコットという二人であり、向かい合い戦っているのだ。

ビットは既に四基落とされ、奥の手の二基も既にばれている。バズに残っているのは扱いが苦手な近接用武器インターセプターのみ。だがそれがどうした。今のセシリアには慢心も落胆もなく、これ以上ないコンディションだ。むしろ、これ以上の状況がどこにあ

るというのだ。

「ええ、私も準備は整いましてよ、一夏さん」

今ここに二人はお互いを敵と認め合い　そして、動き出した。

六話：一夏VSセシリア（前編）（後書き）

原作とは展開違いますが、理由はまあ後々。

七話：「夏VSセシリア」(後編) (前書き)

・あらすじ

ちよろくないちよろリアさん

七話：一夏VSセシリア（後編）

その試合が始まった時、私はセシリア・オルコットの分析のみを目的にしていた。だって、この私が言うのもなんだけど、稼働時間がそれほどでもない織斑　一夏って人が代表候補生のセシリアに勝てるなんて思わない。男だからとかじゃなくて、そもそも彼にはISの知識自体乏しいのだ。兄が何度か教えに行っているのを見たが、所詮は付け焼刃だろう。

そう思っていたのに。すぐやらなければいいなあって思っただけなのに。

「かつこいい……」

兄から届けられた専用機を初期化・最適化、一次移行させる傍ら、ハイパーセンサーの試運転がてらその試合を見ていたのだが　予想外にも、今二人の実力は拮抗しているようだった。

その織斑さんは、なんというか、その、凄くカッコよかった。顔がカッコいいのは知っているし、同じ男でも兄とは雲泥の差の人気を誇っているのも知っていた。そりゃ女子校暮らしが多いIS学園の生徒なら騒いじゃうのも仕方ないだろう。私は普通に共学だったので、そこまでの興味はなかった。

でも、今の織斑さんは素敵だと思う。規格外な兄を見て育ったせいだろうか、普通にどこまでもまっすぐなその眼差しには憧れすらする。

ああ、そんな事を思っている場合じゃない。ええい、ちゃんと終わらせとかないと。ああでも、これって戦ってる途中で一次移行したら織斑さんみたいでかつこいいかなあ……？

「しのの！　しのの！　織斑、すごいね！」

「……ふん、当たり前だ。この私がずっと稽古を見てやったのだ」

ヨンファの嬉しそうな声に、箒は慚然とした声で返す。その口元が緩んでいる事に本人は気付いていない。

ヨンファもこの後に試合があるのだが、どうも一組代表が誰になるのか興味があるらしく観客席で箒と待ち合わせしていたのだ。曰く、『しののも織斑迎えにピット行くタイミング計るよね？　私も同じタイミングで反対行けば、時間ぴったり忘れずに済むね！』とのこと。結局面倒を見てしまう箒は優しいんだか流されやすいんだか。

「一夏……」

一夏の動きにISを上手く扱うコツなど織り込まれていない。箒は剣道を叩き込んだだけだ。あの頃の強い一夏を少しでも思い出させるために。結果、彼の心構え、刀の扱いは格段によくなっている、はずだ、と思う。自信はないが。

今の一夏は力強い。あのISの白さは彼の心構えそのもののようなのだ。どこまでも澄み渡りまっすぐな、愚直な男。誰にも左右されず自分の守りたいものを守る刃。ずっと離れていたが、彼の強さだけは変わらない。だからこそ自分は彼に惹かれていたのだ。

うんうん、と惚気ている箒には、隣にいるヨンファの不穏な言葉は聞こえなかった。

「やっぱり織斑かな……私の、獲物……」

「ふん、機体に救われたか。馬鹿者が」

「運も才能の内という奴でだよですよ」

千冬と久秋はリアルタイムモニターで様子を観戦、お互い表情も変えずにその様を評価した。

「天鞍、織斑に入れ知恵したな？」

「それが本来の目的でもあるので……しかし、よく分かったなですね」

「あの馬鹿が『まず周りを潰す』などと回りくどい真似をするはずがないだろう。ビットを潰すにしてもそれは接近の為に成っていただろうな　そら、はじまるぞ、よく見ておけ。それがお前の仕事なのだからな」

『いいか、俺自身はISに乗った事がないのだからそれについては教えられん。他人から聞いた経験に基づいて話す事もできるが、ISがない状態ではもつと他に勝利の為に役立つ話がある』

毎回第との剣道を早く切り上げ、一夏は久秋にISの講義を受けていた。その多くは基本知識に関する事で実際の操縦のノウハウはないと言っていたが、最終日に彼はこう前置きして続けたのだ。

『まずはよく観察しろ。その時はもう逃げ回るぐらいで丁度いい』
『弱点を突け。そこを狙うためなら多少の博打は仕方ない。それぐ

らの技量の開きはある』

『よく分からないものを使う時は、それ自体が博打だと思え。リスクに対するメリットがなければ使わない』

それはISの操縦ではなく、戦術・戦略と言える分野の事であった。しかしそれは確かに一夏の糧となり、ビット四基の撃墜という結果に結びつけた。

集中。静かに息を吐き、自然な体勢でその武器を正眼に構える。

近接特化ブレード・雪片式型

知っている。これは千冬の武器だった。一夏の姉の武器と同じ、あの一夏が守ってやれないほど高みにいる女性と同じ武器。

だが、今の一夏にはそれすらもどうでもよかった。ただあるのは勝つための知識と、目の前にいるセシリア・オルコットへの戦意のみ。

千冬姉えを守るとか、そんな遠い目標今はなしだ！ 真剣に向かい合ってくれる奴がいるんなら、真剣に戦うしかないだろ！

体が軽い。ISの機能には驚くばかりだったが、一次移行を終えた今となつては先ほどまでの自分が鈍くすら感じられる。今この時より、白式はようやく一夏と一体になった。

『零落白夜』OFF

そのままならば起動していたであろうよく分からない機能を閉じる。使うのは使わざるを得なくなった時、だ。

「……さて」

現在、一夏とセシリアは向かい合い睨み合っていた。お互い、間合いは十分ではない。太刀を振るうにはあまりにも遠く、ライフルを撃つのにあまりにも近い距離。

残り二基のビットは腰にマウントされている。既に装填されているとみていいだろう。迂闊に近づけば同じ失敗を繰り返すことになる。逆にセシリアとしても、既にクセを読まれているのに安易な多角攻撃は出来ないだろう。

偶然の一次移行に助けられたが、あと一撃でも受けると危ない一夏。

まだ余力は十分だが、接近を許すと一方的な展開になりかねないセシリア。

なら！

動いたのは一夏だった。何か考えがあるわけではない。ただ、どの方向にも逃げられるセシリアに対し、一夏はセシリアの方向に突撃するという一手しか選べない。ならば後手に回るのは愚策。時間を置けば不利になっていくのは一夏の方だった。

それに、今はこの白式の性能を信じられる。

「おおおおおおおつ！」

「ッ！」

スラスターから光を吐き出しながら、白式は、一夏は全速で駆ける。対して、セシリアは冷静にビットを一つ放った。

そのビットは先ほどまでのレーザービットより速い。威力も段違いだ。唯一の救いは一度装填しないと次が来ない事だが、この状況ならば一撃あれば十分だろう。

だが、一夏には見えていた。

動きが速いと言えど、基本的な動きは先ほどのビットと同じ。ならば条件は同じ。どこるか、有利ですらある。センサーは良好、腕は軽やかに動き、刃はなお鋭く。負ける要素はない。

キイン

先ほどまではあくまで止まっているビットを打ち落とすのがせいぜいだった。だが今、一夏は突撃の速度を緩めず背後を狙うビットを斬ったのだ。

背後で爆散するビットを確認しながら、一夏は踏み込む。近づけばもう一基のビットからのミサイルで落とされる。だから一夏が狙うのは一撃離脱。セシリアのシールドを切り裂き、その上でミサイルより速く斬り抜ける。今の白式なら、出来る。根拠もなく信じられた。

いける！

刃を構え、セシリアを見据えた一夏だが、そこで異変を感じた。ビットに命令を下したセシリアの腕が胸元に移動し、光り輝いている。一夏にも覚えがある、これは自分のブレードを展開した時と同じ

「インターセプター！」

セシリアの手元に近接戦用の武器が現れた。それは、一夏に戦術の変更を決断させざるを得ない状況。

いくらISの扱いに慣れていると言っても、セシリアの戦闘スタイルからして本分は間違いなく射撃。接近戦で劣っているつもりは

ないが、競り合う一瞬　その一瞬さえあればミサイルでの追撃が出来るのだ。

さっきのビットは、展開までの罠かよ！

随分と大きな罠だが、セシリアは一撃さえ入れれば勝つのだ。その一撃を狡猾に狙ってくる。

結局、一夏は打ち合う事を回避した。太刀を合わせずにその脇を駆け抜ける。その直後に転回　といきたいところだが、ここで経験の差が出た。

一夏はまだISをきちんと動かせない。全速で動けるのは前進のみ、細かい動きは出来ていない。回避に徹するならば大まかな動きでも何とかなっていたが、このような複雑な動作を即座に出来るほど腕はなかった。

「今度こそ　いただきましたわ！」

360度モニターに捉えたセシリアは、インターセプターを投げ捨てライフルを構えたところだった。一夏の腕前では振り向く事がせいぜいだろう。この状態からなら回避をしようとセシリアはその先を予測してくる。ここまで追い詰められた経験から、一夏はそう判断した。

ならば、今こそ博打の時。

零落白夜

振り向きながら、機能を開放。向かい合うセシリアのライフルに光が灯ると同時、雪片式型もその輝きを増す。刀身全体が輝きに包まれた時、一夏は何の根拠もなく、ただ白式を信じるままに刃を構えた。

発射。ライフルから迸る光の筋に怯むことなく、ただ一夏は刃を合わせた。

「セシリア・オルコット　俺の、勝ちだ！」

そして光は切り裂かれる。

観客席からはざわめきが。セシリアの顔には驚きが。ただ確信した笑みを漏らすのは一夏と、ピットの千冬のみ。エネルギー兵器は物理ではない、切り裂くなどあり得ない。だが今ここに不可能は成された。

「なっ、なっ、なんて、常識外れな……」

「うおおおおおおおおお！」

呆然とするセシリアに向かって、一夏はまたもやただ全速で前進する。まっすぐにレーザーを切り裂きながら。それはなんだか彼の生き様を見ているようで、敗北の瞬間だというのにセシリアは微笑んでしまった。

『試合終了。勝者、織斑　一夏』

「たまさかの一次移行と、奇襲のような単一仕様能力の発動。型にはまったオルコットの戦術にしか通用しない戦い方。お前の勝利は偶然の産物だ。自惚れるな」

ピットに舞い戻り、白式を待機状態　右腕のガントレット

にした一夏は早速お叱りを受けていた。

「ちょ、俺ほぼ初めての戦いだっただんぜ!? 千冬姉え厳しすぎ」

「織斑先生、だ。これに慢心せず励め」

また叩かれた。一夏は頭を押さえながら去っていく千冬を見送る。

あれ? 今、ちょっとだけ褒められた……のか?

厳しい姉の褒める基準がよく分からないなりに、とりあえず自分の中で満足しておく。

「い、一夏」

そして千冬と入れ替わりに現れたのは箒であった。どこか迷うように視線をさまよわせ、足をとんとん鳴らして落ち着かないご様子。

なんだ? なんでここまできて迷ってるんだ? ま、まさか箒も何か言おうとして流石にそれは酷いかと迷っているとか? う、うわ、ひでえ

勝手に自己完結している一夏にまっすぐと向かい合い、顔を赤らめながら箒は言葉を紡いだ。

「その、な。お、おめで「織斑さああん!」

言い切れませんでした。

一夏は見た、箒の後ろから走ってくる少し小柄な女子を。箒とは

全く印象の違うあのポニーテールは、一度見掛けた久秋の妹、近春であつた。

「あ、あの、凄いカッコよかったです！　なんか、勇気出ました！　凄いです！　おめでとーございます！」

捲し立てる勢いに負けるようにのけぞる一夏。近春は気にせず押せ押せの構え。

「あ、次私の試合なんですけど、よければ見ていってくださいね！　私も一次移行終わったばかりで、ちょっと不安なんですけど…　なんか、いけそうな気がしてきました！」

「お、おう。そりゃ良かった　いででで！　引つ張るなよ篤！」

「う、うるさい！　帰るぞ！　とつと帰るぞ！」

「い、いや一応次の試合も見てって痛いっておい篤いいから離してくれよ！」

ずりずり引きずられていく一夏を見送り、近春は右手を空に掲げた。その人差し指には先ほどまでなかった指輪が嵌まっている。淡い銀に赤い装飾が施されたリングが、陽光を照り返して輝いた。

「行こう、遊影！」
ゆうえい

セシリアは負けたにも関わらず妙な満足感と高揚感を得ていた。男なんてこの時代、ロクな奴がいない。そう思っていた彼女の前

に現れたのは強い瞳の男。織斑 一夏。

「ふふ……」

全力で戦い、そしてセシリアと一夏はお互いを認め合った。男だとか女だとかを超えたライバルの存在は、セシリアの中の印象を壊すほどの衝撃を与えた。男にだっていい奴はいる。一夏はその筆頭だ。そう思うとなんだか嬉しくなってくる。

そしてふと、こちらに歩いてくる人の姿を見つけた。東洋人にしては背は高い方で、スタイルも悪くない。しかしその細い目はどこか獣のようでまったく愛嬌がなかった。

あら、この方……

そこでセシリアはふと気づく。度々一年一組の教室に篠ノ之 箒を誘いに来ていた女子だ、これは。確か朴・瑛華と言ったか。しかしまったく印象が違う。理知的な外見のわりに騒がしいというのがセシリアの印象だったが、今はただ怖いぐらいに敵意を放っている一体、どういう生き方をすればこんな人間になるのだろう。どうしてこのような二つの人格を使い分けるような事になっているのだろう。

いえ、詮索はよくありませんわね

自分は顔を知っている程度だ、いくらなんでもいきなりそのような事を思うのは失礼だろう。ただ、彼女の戦いを見極めようという気にはなった。何か危うげなものすら感じる。

通り過ぎ、セシリアは観客席に向かいながらヨンファの声を聴いた。

「カンハダ・コミ、展開」

七話：一夏VSセシリア（後編）（後書き）

次回から二話はオリキャラ同士の戦い。需要なんて、知らない。

あと、原作を読んでいる読者様に先に言っておきます。次回、というか11話くらいまでISは四巻までしか読んでませんでした。近頃ようやく五巻読みました。で、「どうすんだこれ……」って個所が見つかりました。

書き溜めを無駄にするのは嫌だから、設定練り直すしかねえ！

八話・近春VSヨソファ（前編）（前書き）

・あらすじ

韓国語はネットで調べた（キリッ

八話：近春VSヨンファ（前編）

先ほどの試合の興奮冷めやらぬまま、次の試合が始まった。先ほどの試合は唯一の男が出ているという事で観客席は満員だったが、今は少し減っている。とはいえ代表を決める大事な戦い、二組はもちろん全員来ているし、注目している人も多い。

アリーナに対極に存在する白と黄。それは対照的な印象を見る者に与える。

『企業所属：天鞍 近春 IS：遊影』

それは白式と同じく白を基調とする機体であった。しかしその赤い縁取りのラインによりまた違った印象を見る者に与える。何より異質なのはそのシンプルなデザインだった。ISは飛行を前提とし、また基本的にあまり重さに左右されない事から腰部ユニットや背部ユニットが巨大になる傾向がある。しかしこの機体は細々としたパーツが付いているだけである。非固定浮遊部位アンロックユニットが付くことが多い肩部にも通常の装甲が付いている。

『代表候補生：朴・瑛華 IS：カンハダ・コミ』

薄暗い黄色の機体は、向かい合う白とは逆に典型的なISの形をしていた。これはこれで異質なのだが。腰部には二つの巨大なスラスタと装甲、胸元にも一部装甲と基本に忠実なデザイン。そこまではいいとして、目につくのはあまりにも大きな背のアンロックユニットである。中央の円形部分は少女の華奢な背を覆い尽くす程度なのだが、その両脇にあるパーツは巨大の一言。おそらくスラスタであろうそれは2mほどである。角度を変えなければ地上に降りる事もままならないだろうそのためのアンロックユニットなのか

もしないが。

『試合開始』

そして、戦いが始まる。

相変わらず千冬と久秋が並んで試合の様子を見ていると

「お、織斑せんせー！ とりあえずは終わりましたので、書類にサインお願いしまーす！」

ばたばたと慌ただしく走ってきたのは一年一組副担任、山田 真耶である。泣きそうになっているが仕方ない、異常な数の専用機持ちと二人の男、扱いの難しい専用機などでててこ舞いなのだ。教職以前の忙しさである。

「ここの監督は代わりますので、職員室をお願いします！ ああこっうしている間にも書類の提出期限があー！」

「……ふう、分かった。まったく、今年は大変だな」

千冬も疲れたような溜息を吐きながらこの場を離れる。残ったのは真耶と久秋だった。

「どうも、山田先生。今はウチの妹とウチの社の者が戦っているので少しの解説なら出来るぞです」

「は、はあ……。あ、やっぱり天鞍社のは珍しいですね。白い方が

小回りを重視してて、黄色い方が機動力特化かな？」

「どうやら真耶は天鞍社への偏見が少ないようだった。というか、基本的に天鞍社に対して反感を持つのは子供やISに関わらない人々だ。確かにやり口自体は強引だが結果は残している。『必要悪』である。」

「いや、どちらもそれだけじゃないぞです。まあ、特性を発揮してから説明させてもらうとして……山田先生から見て、あいつらの動きはどうですか？」

「あ、はい。やっぱり朴さんは代表候補だけあって動きは良いですね。基本が来ています。でも、天鞍さんは少し……」

真耶の目に映る光景は、近接武器を回避されている近春の姿だ。どう見ても戦闘が得意です、と胸を張って言えそうな光景ではない。

「それはそうでしょう。あいつの戦闘稼働時間は5時間足らずですから」

「ええ!？」

企業所属というからには、幼い頃からISに触れることもあったのだろうと思っていたが　と、そこで真耶は言葉の不自然さに気付く。

「あ、わざわざ戦闘と付けるという事は、戦闘以外の事はよくやっていた、と……?」

「ああ。全てを計っていたわけじゃないが、記録している範囲でも

稼働時間は700時間を超えます」

「ちょ、ええ!？」

「ただ触れていた時間ならさらに長い。おそらくあいつは、ただ触れていた時間を比べるならばこの世の15歳の誰よりも長いでしょう」

真耶の驚きも無理はなかった。通常、代表候補生であればその稼働時間の目安は300時間と言われる。なにせまだ15歳の少女だ。代表候補生となるからには他にも様々な訓練や勉強が必要になるので、この数字もそれはそれで驚異的ではある。青春を捧げる覚悟がなければ出来ない事だ。

だが、700時間 それは一体、どれほどの事だろう。真耶とて過去は代表候補生であったが、あの時点でそこまで稼働していた自信はない。というか、していたらまともな生活が出来なかっただろう。

「まあ、驚きももつともですが、実際はそれほど大変な事ではないですよ。」

当初、天鞍社に渡ったコアは二つだった。その二つはISのコア・ネットワークなどの解析を目的としたコミュニケーション特化の実験機『遊景』^{ゆうけい}『遊色』^{ゆうしき}の姉妹機となった。そのうち、遊色に関しては通常の運用を前提されていましたが、ここだけの話、遊景は近春チ力の遊び道具だったんだです」

「遊び……道具？」

世界にたった467機しかないISが子供のおもちゃとは、随分と豪儀な事だ。だが、子供のころから触れていたというのならあの

稼働時間の話も分かる。戦闘をしていないというのも、流石に子供にそういう事をさせる訳にはいかないからだろう。

「あの遊影はね、名前こそ変わっているがその中身は遊景なんだです。チカの成長に合わせて改造を施してきた遊景を正統発展型として戦闘用にしただけ。初期化も非常に限定的で、あれはほとんど遊景そのものと言っても過言はないです。そう、これでチカは特別になった。あいつはおそらく、この世界で一番『一つのISに触れ続けた期間が長い人間』だ」

ただ、それを確かめるためだけに天鞍は一つのコアを子供に与えたのか。真耶は久秋の笑みにぞっとするものを感じた。おそらく、この実験の目的はあれの解明だ。

『ISコアには最早人工知能というレベルではない“意思”がある』

ほとんど眉唾の話でしかない。しかしコア・ネットワークで繋がり自己進化していくISには独自の意思があるのではないかと、それだけの話。その方面からのアプローチは能動的に研究する事は不可能だった。不可能なはずだった。しかし何年もの時を経て、今ここにいる近春こそが実験成果なのだ。これからの近春がどうなっていくかと、それが全てレポートになるのだ。

「貴方は。妹を実験に……？」

「勘違いしないでほしいのは、チカもそれを知っていて協力している事です。ただ、女の子のお気に入りぬいぐるみが空飛ぶ兵器だったというだけの話……ですよ」

久秋、そして天鞍社。常にIS開発で先を行き続ける会社のおか

しさを改めて感じた真耶である。確かに有用ではあるかもしれないが、この男が専用機持ちに関わり続けると思うと恐ろしい気もするのであった。

さつきからずっと避けられ続けている。やっぱり私はまだ戦いには慣れていない。

特殊仕様短剣『打風』うちかぜ × 2

それが遊影に初期装備された武装の全てだった。角度にして70度ぐらい開いているV字型という妙な形をしたナイフが二つ、それを両手に持っている。

「やあああああ！」

遊影の特殊な構造は、全身がスラスターである事が原因の一つである。大出力のものが無い分速度ではほとんどのISに劣るものの、どのスラスターを使うかで他にはない無秩序な軌道をもたらす。のだが……遊影の時はもうちょっとシンプルだったのだ、これ。ちょっとまだ完全には使いこなせない。

右への軌道のフェイントを入れて、逆手で振り下ろす……が、朴さんには軽く避けられる。向こうはまだ素手のままだ。

「くっそー！　ねえあんた、馬鹿にしてんの！？」

「別に。ヨンファは観察してるだけ」

その瞳は、酷く冷たかった。

韓国代表候補生の彼女ではあるが、半分ぐらいは天鞍社所属のよ
うなもの。その経歴は知っている。

戸籍のない、盗みを働き生き延びていた子供。IS適性テスト
でAを出し、恩赦を受ける代わりISの実験に従事する事になる。
愛想良く振る舞いはするもののそれは相手を油断させるために染み
付いた動作であり、彼女の心を開かせる職員はいなかった。カウ
ンセリングが必要との声も出たが、彼女の訓練に向ける実直さを見れ
ば職務上何も問題はないと放置。

そうして、ここまで凝り固まってしまった。多分他の事なんて知
りもしないんだろう。女の子らしい事なんてわかりもしないんだろ
う。でもその分、強い。本当に全てを生きる糧に費やしてきたんだ
から、私よりISの扱いが上手いのかも知れない。質と量、だ。

でも、負けたくない。初めはこんな勝負なんかどうでもよかった。
でも今は勝ちたいと思う。織斑さんのように、そして天鞍の名前が
ただのコネじゃないと証明するために。私にだって、意地も誇りも
あるんだから。

『アクセライト』ON

だからもう出し惜しみはなしだ。ちょっと怖いシステムだけれど、
使うしかない。

緑色の光だ。肩のパーツやその他スリットから緑の燐光がアリー
ナを満たしていく。すぐに空気の溶けて消えるが、これはそういう
ものだ。場は整った。

「朴さん、今からちょっとまじめにやるからね」

「ん、楽しみにする」

朴さんの無表情に向かつて、左手のナイフ『打風』を投げる。

「わはっ、やっぱりブーメラン？」

少しは喜色を滲ませた声音で、軽く避けるが……ここからだ。スラスターを噴かせて急接近。今度は左側上に回り込んで振り下ろす。

「だから無駄だつて……ひゃ!？」

驚いた声は当然。何せ背後から攻撃されるとは思ってもいなかっただろう。

「ブーメランだから、戻ってくるのは当たり前だよな」

そう、彼女を背後から打ち据えたのは打風だ。自在に動いて翻弄し、回転して私の目の前に滞空する打風。

「それって、さっきのあの人の……」

「あ、油断しない方がいいよ。もう一個も投げたから」

言った瞬間、右手にあった打風が右足の装甲狙ってぶつかつた。威力はそう大したことないだろう。だけどこれはきつと……うん、結構イライラすると思う。やってる自分で言うのもなんだけど。

「あ、あれ! あれってセシリアのビットと同じじゃねえか？」

「いえ、どうでしょう。似ている気はしますがあそこまで滑らかな動きというのは……」

箒は不機嫌であった。

あのよく分からない女に祝福の言葉を邪魔されて、しかもその女の試合を観戦すると言い出す一夏。まあそれでも二人つきりならいいかと了承したのだが……

「ど、どうしてお前がいるのだ……！」

そこには、先ほどまで一夏と敵対していたはずのセシリアがいた。セシリアは男を見下し、一夏はその態度が気に入らない。そういう関係だったはずだ。

「なんでって言っても、なあ？」

「ええ、偶然会ったのですから。ねえ？」

なんだか息が合っていた。それも他意もなく。それはおよそ恋し過ぎる乙女、箒には成せぬ芸当である。認め合ったライバルマジ羨ましい。

「まあ、今はそんな事より。違うってのはどういう事だ、セシリア？」

「ええ。私のブルー・ティアーズは極度の集中を必要とし、自在に動かしていくものです。しかし彼女の遠隔操作兵器はどこか動きに無駄がありながら本人は余裕というか……私とは操作の方式が違うようですわね」

「そつか。聞いてる限りは一長一短って感じだな」

なんだか戦いに関して凄く通じ合っているし。箒は悶々と怒りがたまっていくのを感じ、しかし何もできないのであった。

アクセライトは、周りに『場』を形成する機能。これによって遊影の機能は完全に解放される。

天鞍社のコミュニケーション特化型と言われるISは、周りと通じ合う機能を持っている。元々はIS同士の繋がりを調べるためだったが、戦闘用として遊影は独自の能力を得ていた。

それは、機械を操る事

自由自在とはいかないが、ある程度ならば干渉が可能なのだ。

アクセライトは辺りの環境を整え、この能力を十全に発揮できるようにするためのもの。近春も正しく理解できているわけではないが、インターネット回線のようなものだ と解釈している。『機械を操る能力』という光を、『アクセライト』という管に通すのだ。

打風はその内部に、勿論ISコアほどではないが自己進化するAIが組み込んである。手に持って使うナイフの型、AIにより判断しまた要所で命令を送るブーメラン型と二通りの戦い方で遠近を補う。

「どーよ！」

自慢げに右手で打風を捕る近春。

そしてヨンファは、獣のように目を細めた。獲物を狙う凶暴な目つき。

「やっと、戦うんなら……ヨンファも出しちゃおっかな」

その言葉とともに、背中のアンロックユニットが 展開する。誰もがスラスタ―か何かだと思っていた巨大な二つの部分がゆっくりと開き、そして二つの節を持つ物体として蠢く。それを見た女生徒達は、多少の嫌悪と共にこう思った。

あれは蜘蛛の脚だ

そう、その二つのパーツは紛れもなく蜘蛛の脚を模していた。アンロックユニットが背中から後頭部までせり上がり、両脚が交差し、ヨンファを守るような形となる。

「『万能の手』、機動。勝ったなんて思ってないよね？ むしろ、これから始まりなんだから」

八話：近春VSヨンファ（前編）（後書き）

韓国語は雰囲気出し程度。辞書買って勉強するほどの気力はなかった。

そして「アクセライト（笑）」とか言わないでマジで名前考えなきゃいけないと投稿の数時間前まで仮名のままでこの名前ってアクセスとかアクセラレーターとかかけてるんだぜうわああああああ（恥

ちなみに近春の方のISはエウレカセブンのニルヴァーシュが元だなんてこれもまた恥ずかしい。大分機能とか色々違いますけど、緑色の光とかブーメランナイフとかそっから取ってます。ヨンファの方はガンダムアシユタロンなのかもしれない。

という訳で、五巻を読むとアレとコレが似ている気がします（一応ネタバレ配慮）。

まあいいや、設定なんて書きながら考えるもの。今回ので初心に帰れたよ>>二次創作感謝

という訳で次回で決着つきます。オリキャラばっかだからって見捨てないでくれると嬉しいです

九話・近春VSヨソファ（後編）（前書き）

・あらすじ

戦闘回なのに説明の方が長いつてどういふことなの

九話：近春VSヨンファ（後編）

「あれは……」

「特殊兵装『万能の手』。主に天鞍が手掛けたのはあの辺りですね」

思わずと言った真耶の言葉に、久秋が答える。

「あの巨大さは異様ですが見た目からして……ビットのように動かせるアームですかね。あれがあの機体のイメージ・インターフェースを利用した武装ですか」

「まあ、そうなんだが……それだけじゃないです。あれは机上の空論である第四世代への足掛かりを目指して作られたマルチアームドユニット。まあ、ようはあれひとつでなんでもやってやろうというコンセプトなんです」

第四世代　それは現行のISが持つ多様性の源、後付武装やパッケージによる状況への対応を必要としない、つまりそのまま一つで万能というコンセプトの機体だ。射撃特化の機体と渡り合いながら接近戦も同等、速くて強くて何でも出来ると現状からすれば夢のようなもの。まだ各国で第三世代の実験が始まったばかりという事で、コンセプトは思いついてもまだ技術が追い付かない代物。

「まあ、あれは未完成もいい所だな。結局、あれを普通に使うぐらいならそれぞれ別の近接武装、射撃武装、スラスタ、盾を用意した方がいい。普通に使うなら、だがですね」

朴さんのIS、カンハダ・コミ。これもまた私の機体と同じ実験機……だつてのは知ってたけど、実際に見ると怖すぎる。なんかわさわさしてるもん、わさわさ。

「あは、来ないの？ うん、今までこれ広げて相手から攻められたことないの」

ぎちぎちと『万能の手』 もう脚でいいや が開き、先端がこちらを向く形になる。そして朴さんの手元に光って、棒状の武器を展開完了。棒術とあの脚、どちらも間合いが長い。迂闊に受ければこちらが危ないだろう。なにせこちらには腕が二つしかないが、あちらは両手持ちと考えても三つあるのだ。

滞空していた打風を手元に、二刀とも逆手に構える。刃は相手向きと自分向きと左右それぞれ。これが基本スタイルだ。

「行くよ」

朴さんが動いた瞬間 その腕が伸びたのかと錯覚した。棒術の間合いは長い、頭では理解していても体の認識が追いつかない。

「んぐっ！」

なんとか身を捻って避け たと思ったら、後頭部に衝撃。シールドで直接体に影響はないが、そのまま吹き飛ばされる。

飛ばされながらもエネルギー確認してみると、普通に近接武器で攻撃された程度には減っていた。あの太さは見かけ倒しじゃないって事だ。

「ああもう、打か　！」

間合いが離れたからこちらも遠距離攻撃を　と、やはりこちらが行動する前に向こうの準備は整っていたようだ。

背中のアンロックユニットが、こちらに向けている右手の甲まで移動している。そして脚の第一節に当たる部分が開いて

「ぜえ！」

なんとか左手の方を投げたところで、そこからミサイルがつてな　んとおー！？　セシリアさんのほど大型ではないが、数が多い。全　て当たったらシールドエネルギーを削り切られてしまうだろう。向　こつもそうだろうが、元々実験機として色々機能を載せている天鞍　社のISは防御力が乏しい傾向にある。

しかし誘導兵器を振り切る事にかけてはこの遊影、かなり得意で　あると言える。多数のフェイントを織り交ぜる無秩序軌道はクセさ　え解析されない限り上等な回避手段と言えるし、ビットなどならま　だしもこの程度ならそれほど高性能な誘導もないだろう。打風によ　り相手の動きは制限されているので、接近する時より集中して移動　できるし。

そう思い回避を続け、最後のミサイルを急停止でかわした時ち　らと朴さんを見ると、胸元に移動させた脚で打風を防いでいたとい　うか、いなしていた。

「万能すぎだよ……」

こちらがミサイルに強いというのなら、向こうは近接兵器に強い　のだろう。このままじゃ状況が硬直する　そう、このままでは。　このままで、済むわけがない。

防いだ形のまま、脚のアンロックユニットがこちらを向く。そし

て第二関節が輝き、レーザーが放たれる。回避姿勢になったままだ
や、かわせない　　！

「　っ！」

直撃。目の前が真っ白になり、シールドエネルギーがこつそり持
つていかれる。

「どう？　ヨンファの方が強いでしょ」

どこことなく冷たい声音。アンロックユニットが後頭部に戻り、初
めの防御姿勢を取る。万能にして隙は無し。普通あいう装備は普
段の体にはない部分を動かさなければいけない分、即座に動かすこ
とが出来ない筈なんだけど……それを補う技能があるんだろうなあ。
兄の集めた人材だし。

打風を手元に返す。また基本姿勢に戻って、距離を測る。

ああもう、やっぱり奥の手を出すしかない

別に出し惜しみしていたわけじゃない。自信がなかったただけだ。
使いこなせなければ、きっとその時点で落とされる。でも博打
そう、博打だ。兄はいつも言っている、格上に挑むには博打の打ち
所を間違えるなど。織斑さんは先ほど成功した、あの大博打を成功
させた。なら、私の今からする事ぐらい、きっとなんてことない。

『アクセライト』ON

そして、辺りは緑の光に包まれる。

「がんばれー！ 天鞍さん！」「やれー！」「よく見てー！ 当たらないでー！」「二組が応援してるよー！」

箒の不機嫌は加速していた。

天鞍社の悪名は箒も知っている。そして名が売れる事の厄介さもまた、箒は知っていた。

篠ノ之束。ISの開発者にして、現在絶賛行方不明中の箒の姉。連絡しようと思えばできるが、とてもこちらから連絡しようという気にはなれなかった。あの姉のせいで家族ぐるみで日本中を転々とする事になったのだ。

友達は出来なかった。剣道を続けるしか心の支えがなかった。だってそれは、一夏に通じているから。

「はあ……」

そして今また、このIS学園では篠ノ之という名のせいで特殊な扱いを受けかけていたのだ。そうならなかったのは一夏のインパクトが大きすぎたせいだろうが、今はそんな事よりも 急に手のひらを返す周りの生徒が恨めしかった。

ヨンファのISの見た目はいつそ禍々しいとすらいえる風情だ。まさに敵と断ずるに相応しいようなデザイン。本人の性格も相まって、悪役としての役割を演じてしまっているような気がする。それに追い込まれながらも頑張って戦う天鞍さんかっこいいー……という事だ。

きっと周りがかうも雰囲気になされているのが腹が立つのだ。そうに違いない。箒はもやもやした気持ちをとりあえず片付け横を見てみると

「やはりあの『万能の手』とやらは私のブルー・ティアーズと似た

ような性質を持つようですわね。しかしそれにしてはやはり動きが自在すぎますわ。一つの台を軸に二つを動かす簡略化された形とはいえ、武相の数は相当なものなのですから……」

「ああ、俺から見てもセシリアより扱いが上手いように見えるな。形が違うから自信はねえけど。でも……」

「ええ。ISの動き自体は平々凡々ですわね。となると、彼女は一度に複数の思考に慣れているとか、そういうISに寄らない特技で……？」

ずっとこういう話題に花を咲かせているのだった。ISにさほど詳しくない篤では立ち入れない領域だ。というか、知識があつたところで入り込む余地はないように思える。甘い雰囲気はまったくないが、二人だけの世界である。

これもこれで、すごく腹が立つ。

せ、折角お前が見るのに付き合っただけでやっているのだ。少しは私を構え……！

口の中だけでブツブツ呟き、苛立ち紛れに地団太を踏み鳴らす。近くの生徒はびくつとしていたが、当の一夏とセシリアは聞いちゃいない。

はあ、と深くため息をつき　どうでもいいと思っていた試合を見る。ヨンファが終始押している展開なのだ、少しは見てやろうと思っ

いやまあ、流石に他人よりは近しいからな。うん

そしてアリーナに目を向けると、そこにはナイフの攻撃に至近距

離から当たりのけ反るヨンファがいた。

「ど、どういう事だ……!？」

呆然と呟く箒に、ようやくセシリアが気付いたように振り向いた。

「あら、見ていませんでしたの？ それがどういうわけか、先ほどから朴さんの攻撃が全体的外れな位置を射抜いているのです。その間を掻い潜り、天鞍さんが懐に入り攻撃、離脱のヒットアンドアウェイで一方的な展開ですわ」

予想もしなかった展開、大逆転劇だった。

「きゃー！ 天鞍さんかつこいー！」 「あの子も初戦よね？ なんか織斑君といい期待できちゃうなあ」 「押せ押せ！」 「勝てるよー！ 頑張れー！」

周りも歓声に沸いている。その声が耳に障る。箒は拳を膝の上で握りしめ、訳も分からないまま俯いた。本当にイライラする。どうしたんだろう自分は、と思いながらも心は止まらない。

「箒」

一夏の声がした。やっと構ってくれたというのに、今は喜びよりも心を占める苛立ちの方が強い。

「なんだ、一夏。オルコットとの話が好きならずっとそうしていればいいではないか」

「ぐ、何をそんなに怒ってるんだよ……ま、いいや。応援しようぜ」

訳が分からなかった。

ヨンファにとって勝利は当たり前だった。ずっと勝ち続けてきた。それがルーチンワーク、それが日常。盗みを続けて生き繋いできた時と同じ、勝つ事により生きているのだ

なのに

目の前には近春の遊影がある。見逃さない、フェイントも読み切った。大丈夫。今度こそ。最早願いにも近い意思を込め、『万能の手』は遊影を刺し貫いた　はずだった。

「なんでなんだよお!？」

癪癪を起こした子供のような声音。だがそれも仕方ない、確実に攻撃したはずの遊影がすぐ目の前にいるのだから。

「教え……ないッ!」

言葉とともに一閃、またシールドエネルギーが削られる。離れていく相手を見ながら考える、おそらくあと二回も攻撃を受ければ負けるだろう　負ける?　負けるとは、なんだったか。

負け?

負けるとは、死だ。ずっとずっと奪ってきた、だから生き残れた。同じなはずだ。だから負けるなんてありえなくて。ありえないはずで。

歓声が聞こえる。ヨンファに負けろという歓声が突き刺さり続ける。皆が皆、近春の勝利を願っている。

ああ、皆ヨンファに死ねって言ってるんだ。昔と同じだ

勿論そんなはずはなかった。ただ純粹に近春の勝利を願っているだけの声。しかしヨンファは歪んでいる。歪んだ価値観にはそのようにしか聞こえない。

もう、いつかなあ

だからヨンファは諦めた。今だからこそ思う、疲れていたのだ。勝たなければ終わるというのが当たり前になり過ぎたその心は、疲れ切っていた。誰にも直してもらえなかった幼児のような素直さが摩耗していた。

だから、もう

「おい朴、頑張れ」

何の気負いもない声は、男のものだった。

一瞬、何を言われたのか分からなかった。肉声が聞こえるという事はアリーナの端までいつの間にか追い詰められていたのだろう。警戒を忘れて振り向くと、そこには織斑 一夏がいた。

「そうですねよ、朴さん。一夏さんを倒したいのならここで勝たなければいけませんわ」

セシリア・オルコットが居た。

「おい、ヨンファ!」

そして、篠ノ之 篁がいた。どこかすっきりしたような顔で叫ぶその姿が目には焼き付く。

「勝てとは言わん!　だが、そんな所で突っ立って諦めるな!　まだ、やれるだろう!」

何かが、ヨンファの中で変わった。

勝ちたい

勝たなければいけないでも、勝つのが当たり前でもなく。

期待に、応えたい

そこまで形になった想いではない。まだ漠然とした感情だった。しかしヨンファの今の気持ちは、それだった。

「うん!」

頷き、ヨンファは近づく近春に向けてミサイルを放つ。これは仮説の証明、たった今本気で戦おうとした時に思いついたトリックの種。

果たして、近春はミサイルを回避するために後退し　その像がぶれた。近春は掻き消え、少し離れた場所に近春が現れる。

「やっぱり!　ヨンファの目になんかしてたね!」

「こ、ここでバレるかなあ普通!?　こっちだってギリギリの技術

なのに！」

ヨンファの声に明るいものが混じっている事はもうお互い気にしていなかった。言葉を交わしながらもお互いの動きの読み合いに必死なのだ。

遊影の回避のトリックは、ハイパーセンサーへの干渉だった。Iスコアには流石に干渉できないが周りのパーツは篠ノ之束のブラックボックスではなく会社で開発されたものである。アクセライトの濃度が濃い一瞬ならば複雑な機能も騙すことが出来るのだ。あくまで一瞬なので、突入時には相応の技量が必要だが。

「でも、分かったぐらいで！」

近春は戦法を変えなかった。ヨンファには種はばれても見切られてはいないという確信。それは正しかった。

ミサイルのような面の攻撃ならば捉える事は出来るが、その全ては回避されてしまう。実を言うと、ミサイルとレーザーの併用にはまだまだ腕が足りない。ミサイルを撃ち続けるだけでは結局じり貧だ。ならばどうするか？

ヨンファの答えは、アンロックユニットを初期の状態に格納し背中に戻す事だった。

「訳わかんないけど、真っ向勝負つばいね！」

「うん、そうだね！ ヨンファが勝つよ！」

近春はヨンファの手を考えながらも突撃をやめない。ここで引くなどという選択肢はなかった。強力な能力であるハイパーセンサーへの干渉だが、アクセライトに使う光にも上限量はあるのだ。既に散布している今、ここで退けば素で戦わなければいけない可能性が

高くなる。そうなると近春の勝利する確率はかなり低くなる。

棒立ちのままでいるヨンファに一撃　これを放った時点で違和感があった。今まではのけ反るなりなんなりしていたヨンファが、今度は両足を踏ん張り近春の姿を見つめているのだ。

「肉を切らして骨を断つ、って言うんだっけ。お肉が切れたら骨を食べたらいいじゃない、とも言えないんだね」

軽口をたたくほどの精神的余裕　そしてヨンファは空を蹴った。アンロックユニットを背負うこの型は、スラスターを十全に発揮するための型なのだ。そう、初速で負けぬための型である。

自慢の移動能力でそのまま背後に退こうとする遊影を、カンハダ・コミの最高速形態が追従する。その速度はほぼ同じ。

「もらい！」

ヨンファは勝利を確信した。自分の手にはリーチのある棒がある。対して、近春が持つのは手元のものしか攻撃できないナイフ一つなのだ。

ひと、つ？

ヨンファは気付いた。読み切ったと言わんばかりの近春の笑みと、懐に入っているブーメラン型の打風。

お互いがお互い、相手の動きを確信しながらも自分が確実に勝てる手などは考えなかった　否、これこそがどちらにとっても『確実に勝てる』なのだ。ようは、自分が上回ればいいという話なのだから。

「あつたれえええ！」

「やあああああ！」

二人の声のアリーナに響き渡る。ほぼ同時に放たれた攻撃、お互いシールドエネルギーは極僅か。先ほどとは一転、痛いほどの沈黙がこの場にいる全生徒を包んだ。そして

『試合終了。両者　引き分け』

九話・近春VSヨンファ（後編）（後書き）

ヨンファは箒と仲良しです。これが手間かけボ、新たなるハーレム落としての妙技であった（嘘）

次回で第一章エピソード。次はおおとりすずねさんの登場だーと言いたい所ですが、これからオリジナル挟みます。流石に物語のメイソンである二組の状況を「代表、あたしに譲ってっってお願いしようと思っ」の一言で動かすわけにはいかねえ。

十話：そして……（前書き）

・あらすじ

長かった戦いよ、さらば！

十話：そして……

「代表はチカだ。文句はないな？」

二年二組の教室、久秋が教卓に立っていた。ちなみに朝のSHRで先生が追いやられていたりするのだが、誰も気にしていない。先生は「だ、大丈夫よね！？ 普通にちゃんと進行してるよね？ ね！？」と死ぬほど不安そうだった。彼女の胃に祝福を。

「えー、別にチカでもいいけどさー」「んー、文句はないんだけど」「ねー」

教室中からあがう不満げな声。彼女らの視線は、なんだかここにこしていたヨンファに集まった。

「ほえ？」

ヨンファは首をかしげるが、皆は思っていた。何故ヨンファが無条件で選ばれないと決まるのかと。

昨日の試合、一夏達の声援から空気が変わったのだ。「両方頑張れ」と、段々その健闘を称える流れになっていった。もう皆の間に近春への偏見も、ヨンファのISに感じた嫌悪感もほとんどなかった。女子高生、テンションが大事である。

しかし久秋に関しては何か劇的な事があったわけではない。しばらく一緒に授業を受けて少しずつわだかまりは消えているのだが、それでも少しは思ってしまう。「もしかして、妹を贖してるんじゃないか」と。

「それなら理由は簡単だ」

だからその自信満々の様子に、皆は反感を抱いたのだが

「ヨンファ！ 12×6は！？」

「え、あえ、あう！？ えつと、あのね、あの……あ、92！」

次の瞬間、ポカーンとした。

「分かったか皆、ヨンファはな……馬鹿なんだ」

「馬鹿じゃないよ！ 九九出来るもん！ 七の段出来るもん！」

小学生レベルであつた。

皆知る由もないが、これはヨンファがまともな義務教育を受けていないからであつたりする。保護された時からISの訓練の合間に勉強もしていたのだが、いかんせん他の人よりも遅れているので高校生レベルというのは難しい所がある。しかもIS学園に入学するためにISの知識を優先的に学習し、しかも母国語すら覚束ないというか学習速度が早い方である。

だが、それでもやっぱりきちんと知識のある近春に軍配が上がるのは当然であろう。

「IS学園とはいえ、普通の試験はあるからな。毎回補修のクラス代表なんて嫌だろう？」

「嫌です！」「」

「酷お！？」

このようなやり取りも冗談っぽく。初めのうちは想像もできなかったような和気藹々さである。

「チカ」

「うー……しーがない」

久秋が目を向けると、近春は頭をかきながら立ち上がった。全員の注目が集まる中、近春は手を上げ冗談っぽく宣言する。

「天鞍 近春、クラス代表を務めさせて頂きます」

「とまあ、そんな訳だ」

「そっか、やっぱり結局天鞍……ってややこしいな。ま、お前の妹って事だな」

放課後、久秋と一夏は話しながら歩いていた。特に待ち合わせをしていただけでもないが、たまたま出会ったので一緒に食堂に行くという事になったのだ。久秋は学園の外に気軽に出来るので夕食を食堂で取る必要はないのだが、この件に関しては一夏と情報交換しておきたかったというもある。

「ああ、俺の事は久秋でいいし、あいつの事は近春でもチカでも好きなように呼んでやってくれ。双子でややこしいからな、慣れてる」

「ん？ 確か、中学は男子校とか言ってたか？」

「一応家族だからな。二人でいる機会くらいあるさ」

肩をすくめる久秋に一夏は曖昧に頷いた。一夏にとって近春の印象といえば飛び蹴りと詰め寄りだけである。バイオレンス。

「そっちはどうだ？ クラス代表になっただろう？」

「んー、まだあんま実感ないな。とりあえずセシリアとは再戦の約束はしたけどなー……あ、またISの事教えてくれよ。専用機がなきゃ教えることが少ないと言ってたけど、俺ももう専用機持つてんだからな」

「ああ、分かったよ。基本動作以外なら任せろ」

「基本動作以外？ なんでそれは駄目なんだよ」

「俺はISを動かせないから、そういうコツは使える奴同士でやってくれ。俺は戦い方やらなんやらと一緒に考えるだけだよ……そうだな、オルコットなんかは国家代表候補だからな、上手いんじゃないか？」

「セシリアか……んー、でもな、また戦うんだからその本人にならうのもどうかと……あー、誰かIS教えてくれる奴いないかなー！」

一夏にとっては些細な言葉だったのだろう。ただ問題があったとすれば、それはちょうど学食にたどり着いた瞬間だったという事で、学食に居た生徒全員の視線が入口に注がれる。たじろぐ一夏、曖昧に笑う久秋。

負けられない

女子の心が同じ方向に向かった。そのまま一つになればよかったのだがそうもいかない。

織斑君とドキドキ 秘密特訓をするのは私！

視線でけん制し合う女子。それは最早物理を超えた威力となり、踏み越える事あたわず状態。誰も前に進めない、しかし自分以外の誰かを進ませてなるものか。女子の醜さ爆裂である。

だが、それを踏み越える者が二人。

その一人は篠ノ之 篁

刃のような鋭さを持って凶悪な視線を断ち切るように肩で風切り進むその姿はまさにSAMURAI。普通なら「ちよっと」、抜け駆けしないでしょう」と女子グループによる数の暴力制裁を行われるのが常だが、今の彼女は触れがたき拔身の刃であった。

その一人は天鞍 近春

集まる烏合の視線など弱者の戯言よとばかりに支配者的傲慢さで踏み潰し進み行く。抜け駆け？ 否、貴様ら弱者が群れる事しか知らぬのが敗北の理由。我は覇道を往く そんな歩き方だった。どんなだよって言われても、そんなだよって言うしかない。

「ぬ」

「む」

そんな訳で女子の視線を潜り抜けた二人だが、ここでもう一人に気付く。そう、これこそがラスボス。今までののはあくまで前座。これを取り越えれば彼女らに「一夏とにやんにやん」の権利はない。

「一夏あ！」

「織斑さんッ！」

二人が選んだのは直接対決ではなく一夏へと判断を委ねる事だった。

ふ、私は幼馴染だぞ。お前のようなぼつと出の女よりも一夏は私との近しい関係を選ぶはずだ

私は天鞍社社長令嬢…… ISの知識に関しては相当期待されるはず！ そう、こんな一般生徒なんかより！

お互い勝利を疑っていない。意外と負けず嫌いで自信家な二人である。

そして、一夏が下した答えとは

「え、二人とも教えてくれるのか？ いや、悪いな。放課後の時間潰れちまうけど、いいのか？」

まさに一夏。キングオブ朴念仁のトーヘンボク。そういう機微に關してはとんと駄目な男である。

二人は揃ってため息 だが、気を取り直して一夏を両側からホールド。火花をぶつけ合う。

「え、あれ？ ナニコレ？ え、あれー？」

「はっはっは、織斑。妹を頼むぞー」

「ええ！？　ちよつ、なんか二人ともってか皆怖いぞ！？　な、なんだよおお！？」

織斑　一夏。そう、奴だ。偶然だが、奴こそが一番重要だ

研究、実証、実験。俺が専用機に戦法を教えるためだけにここにきているとも思ってたか、IS学園

時間は少ない。早くこの腐りかけた世界を何とかしなければ

世界征服だ

「鈴音さん、きちんと荷物はまとめた？　本当に向こうまで一人で大丈夫？」

「大丈夫だつて。私、少し前まで日本に住んでたんだから。むしろ向こうの方が慣れてるくらいよ」

「そう、じゃあいつてらっしやい。何かあれば軍や政府の方に連絡してね。自己判断は出来るだけ慎むこと、貴女は中国を背負って学園に行くんだから」

「分かってるつて。じゃ、ちよつといってくるわ」

そう、想い人のいる国まで。
後日、鳳 鈴音来襲……もとい、来日。

十話：そして……（後書き）

セシリアがハーレム入りしなかった代わりにオリキャラがハーレム入り。これは決してセシリアを主人公のハーレム要員にしたいわけではなく、纂さん空気化を防ぐと共にこれから先の展開に繋ぐためでありでも僕セシリア好きだわ

……この二次創作では原作キャラたちの原作とはまた違った一面をお楽しみください！ お楽しみください！

というわけで一章終わったのでこっから章タイトル付けてみます。あとそろそろストック切れそう。ストック切れたら更新速度が絶望的になります。

十一話：修行編という奴（前書き）

・あらすじ

セシリア「一夏さん、今度の私は別にオリキャラに見せ場もフラグも持っていないかもしれませんでしたわ」

一夏「いいや、奴はとんでもないものを盗んでいきやがった。……
あなたの『ちよろい』です」

長ったらしい説明話となっております

十一話：修行編という奴

クラス代表決定から少し後の放課後、第三アリーナ

「もらい　ですわっ！」

「ひゃああああ！？」

そこにはセシリアに圧倒されているヨンファの姿があつた。見れば、近くにはそれぞれの専用機を展開した一夏や近春の姿もある。

「それまで　やはりオルコットの勝ちだな」

合図をしたのは久秋だ。彼にはISのシールドがないので、観客席から通信機でISの通信に語りかけている。チャネルアリーナに入っているのはISを装着したものだけだ。

この日は久秋による専用機持ちへの助言兼お互いの実力確認の日なのだ。全員の予定が空いている日を選び久秋が招集した。

「オルコットは戦況に対応するパターンの使い分けが様になってきているな、これからパターンを増やしていけば面白い。ヨンファに関しては、相変わらず並列行動は得意でも次に繋がっていく動きをイメージできていない。複数パターンを常に思考しろ、足を止めるな」

「当然ですわ！」

「うっ……」

余裕の笑みと拗ねたような顔と両極端の表情で着陸する二人。

久秋は専用機の特性を戦闘で見極め、それぞれに基本的な訓練以外に現在磨くべきことを指示していた。

まずセシリアにはビットによる攻撃パターンの確立。代表候補生とはいえまだ実験段階であるビットは扱い慣れていない。なのでビットに慣れながら少しずつ動かしやすい型を共に構築している。

ヨンファにはアンロックユニットに集中し過ぎない事。彼女の技術は泥棒という行為の延長線上にあるもので、一瞬の集中力はあっても次に何をするかとなると間が空くことがある。攻めに回れば強いが、守りに入るとこれ以上なく弱いのだ。

一夏にはエネルギー無効攻撃・零落白夜の使い所と行動全般。彼に関しては久秋に教えられることは少ない、なにせ近接ブレード一本で戦うというシンプルすぎる戦闘スタイルなのだ。一夏は久秋よりも周りに頼る事の方が多かった。

近春に至っては教える事がない。これまで散々一緒だったのだ、言えることは言ってきた。今は個人的に無秩序軌道を磨くことと一夏へのコーチングを主な目的としてここにいる。

「で、まあ……お前ら、見事に相性があるな」

ヨンファはセシリアに弱い。理由は簡単、ビーム兵器は脚でいなせないし、射撃相手では後手に回る事も多い。畳み掛けなければ弱いのだ、ヨンファは。

セシリアは一夏に弱い。これまた理由はシンプルで、零落白夜に無効化される兵器が主だからだ。一夏はシールドを無効化し絶対防御を発動させる事よりもレーザーを切り裂く事に零落白夜を使う事が多くなっている気がする。

一夏は近春に弱い。接近戦ではアクセライトによる目眩ましを使えば同等、そして遠距離では一方的に攻撃され一夏の技量では無秩序軌道にはついていくだけで精一杯だ。

近春はヨンファに弱い。クラス代表決定戦では勝ったが、実体兵器に強いヨンファからすれば基本的に力モである。アクセライトもタネが割れた以上それほど有効でもなくなっていたりする。脚を使えば実は対応できたのだ、間抜けな事に。

「こつも偏つていると、特に初心者の織斑がなあ……チ力、ちよつと接近戦オンリーでやってみないか？」

「流石に一方的にボコられるよ!？」

「お、おう。流石に俺もそれは気が引ける」

攪乱するからこそ勝っているのだ、近春は。そりゃ渋る。

久秋は腕を組んだまま数秒唸り　そして、ポンと手をたたいた。

「いいこと思いついた、織斑、お前週末ウチに來い」

篠ノ之　箒はピットで一人、一夏の帰りを待っていた。量産機の貸し出し許可が下りなかったのだ。数に限りがあるのでそう毎回許可が下りる訳じゃない。分かっているけど、理不尽だという感情が心にある。

まあ、剣道では二人つきりになれるのだが……

一夏の戦闘スタイルにも合っているという事で、剣道は続けた。試合だけでなく握りやらなんやら一夏が忘れていた部分、型が崩れている部分もあるので、その修正の為に嬉し恥ずかし接触事故があったりもする。しかし防具付き。微妙である。

箒は危機感を持っていた。自分では割り込めない専用機持ち同士の繋がりに。

まずはセシリアである。本人に他意はないようだが、一夏を認めてから妙に距離が近い。一夏の方もそれは同じで、今すぐどうという訳ではないが妙に転ぶとすぐくつきそうでもある。

それにヨンファ。一応彼女とは友達付き合いをしてはいるが、それ故にわかる。あの女、致命的なまでに空気を読まない。あと、箒の恋心を全く理解していない。あまりにもダークホース過ぎるが、一緒に過ごすうちに何かないとも限らない。

そして何より近春である、分かる、露骨すぎるほどに分かる。あれは一夏に惚れている。それだけなら他の有象無象と同じなのだが、何より専用機持ちで一夏との接触時間が長く、二組の女子グループの頂点として「抜け駆けするな」が適用されていないという問題がある。そう、大問題である。今の所、一番怖いのが彼女だ。

あのトーヘンボク一夏の事だ、自分からどうにかという事はないだろうが告白でもされてみたらどうなるか分からない。

「う、ぬ……」

そう、告白。それが手っ取り早い。

久しぶりに再会した幼馴染で気安く接し、同室になり色々と共有してきた。お互い良い部分も嫌な部分も知っている。一夏に憎からず思われている自信はある。好かれているかどうかとなると微妙だが。

そして……と、自分の胸元に視線を落とす。大きな胸はコンプレックスでもあるが、男なら胸が大きい方がいいんだろうという事は知っている。剣道で鍛えているので全体のプロポーションも悪くはない、はずだ。容姿もまあ十人並ではあるうと思っっている（実際他人から見れば美人に属するが、自己評価だ）。

嫌われている部分はないはずだ、と箒は結論付けた。たまに自分

が暴走する事はとりあえず脇に置いて。乙女ってなんだ、振り向かない事さ。

だが、こ、こ告白するとなると……

シミュレーションしよう。乙女頭脳全開だ。さてまず二人つきりで話せるとなるとやはり自室である。自室での告白……

『あー、疲れたなあ箒。とりあえず風呂入ってこいよ。俺もうクツタクタでさあ、俺も早く風呂入りてえよ』

『うむ……だが、その前に話がある。一夏……好きだ。付き合ってくれ!』

『え、ええ!? それは男女の好きって意味で、LIKEではなくLOVEなのかい!? 嬉しいよ箒!』

待て。誰だ。

致命的であつた。告白されてそれに反応する一夏が想像できないのである。一夏の方から告白されちゃうパターンは乙女頭脳に刻まれまくっているが、現実感のある自分から告白というシチュエーションが思い浮かばない。

そもそも、理想としては一夏の方から告白してくれる事なのだが……

それも、強く凜々しい一夏に。

箒の理想としては、剣で自分を圧倒できるほどに強くなった一夏が昔から好きだったとか言い出してくれるパターンだが、流石にそれほど虫のいい話はないだろう。妥協を覚え、乙女はまた一つ女へ

の階段を昇った。

とすると自分から告白して振り向かせるのはやはり確定として、気軽に部屋で……というパターンは消えた。同室というのは他の女子に対してアドバンテージではあるが、そこで全てを賄おうとしてはならない。努力だ、一夏を手に入れるためには努力しかない。

服やアクセサリを揃えてみるのは……どうだろう。やはり一夏にはなあ……

お洒落に気付いてそれを褒めてくれる事はあるが（そしてそのさりげなさがまた乙女的に嬉しいのだが）、彼自身特に拘ってはいないような気がする。気がするが……果たしてどうだろう。

箒も女の子、勿論体の手入れや清潔さはこれ以上ないほどきちんとしている。スポーツだっけとしているのだから女子的には当然だ。しかし服装や化粧に関してはすこしずれているのかもしれない。寝間着は浴衣という古風な女なのである。洋服なんかより着物の方に目が行くので、実は若者らしい服はそれほど数がない。

ハッ！ これだ！

そう、自分にファッションに対する関心が薄いのなら……逆にそれを利用するッ！ 具体的には一夏の好みを知り、それに染まるッ！ そう、そしてそれに必要なのは服を選んでもらう事……つまり、デートである。

こ、今度の週末などどうだろう。うん、そうだ。それがいい。

長い間の葛藤から晴れると、丁度こちらに向かってくる一夏と久秋がいた。出来れば二人きりの時に誘いたいという気もするが、あの久秋はあれで中々空気が読める上に一夏の恋愛に関してはあくま

でも中立のようだ。妹鼻屑がない。案外氣を利かせてくれたりするかもしれない。

「だから、やはりお前の動きは地に足をつけている事を前提にしすぎているんだ。剣道もいいのだが、ISの戦い方とうまく融合させなければ意味がないぞ」

「頭では分かっているんだけどな……まあ、そう簡単に出来たら苦労はしないだろうけど」

男二人で歩きながら会話にふけているが、しばらくすると箒に気付いたようで一夏は片手をあげて挨拶する。箒はそれに返す余裕もなく、真っ赤になり俯いていた。告白ほどではないが、自分の方から何かに誘うのはそういえば初めてだ。

な、なんと言えがいいのだろうか！？

大いに混乱する箒。そう、いつも無愛想な自分を引っ張ってくれていたのは一夏なのだ。その一夏に向けていったいどう言えばいいというのだ。

「しゅ、しゅしゅーまいじゃなくて、しゅ、週末、に……」

あたふたなんとか週末まで告げる箒。怪訝そうにしていた一夏だが、ここで衝撃の告白。

「週末？　なんだか知らないけど、俺、週末は久秋と予定あるぞ？　えっと、来週でも大丈夫か？」

なんとという予想外。氣を利かせてくれるかと思っていた暫定味方

が敵だったとは。

この時、色々考えがぐるぐる回って色々溜まっていた箒は爆発した。理不尽である。理不尽だと分かっているが、体は止まらない。心にはあらがえぬ生き物が人間である。

「キツサマアアアア！」

「こつちだとお!？」

だが久秋に矛先が向くというのはあまりにも理不尽ではなからうか。否、人は心にはあらがえぬ。つまりいつも叩きに叩いている一夏よりこつちの方を懲らしめたいと思う箒は間違っていない。多分襟首掴まれ持ち上げられる久秋。久しぶりに言うがチビなのである。箒は女子の平均身長しかないが十分持ち上げられる。そのままガクガクと揺さぶられ、そして不幸な事故が起きた。

久秋の手が揺れのまま、箒のたわわな胸にパイタッチしちゃったのである。

「あ」

「あ」

「あ」

三人は同じ声を上げた。次の瞬間、久秋は鼻血を噴いた。

十二話：大体鼻血のせい（前書き）

・あらすじ

恋する乙女は思考が長すぎて葛藤だけで話の半分を消化しちゃうの

十二話：大体鼻血のせい

一夏と箒の部屋で、久秋は懔然として座っていた。鼻にティッシュを詰めて。

「お、お前まだそれ直ってなかったんだな……」

「簡単に直れば苦労はしない……」

エロ本を手に入れて耐性を得たかと思われた久秋だったが、実は表紙をよく見ただけでかなりやばい状態になって1ページ捲ればもう意識を失っていた。最近は漫画雑誌を買いグラビアページでなんとか正気を保とうと努力を重ねている。

「な、なんというか釈然としないが……すまん」

「いや、こちらの体質はあまりにも失礼だ。二重ですまん」

謝り合う箒と久秋である。普通ならば経緯はどうあれ胸を触られた上に拒絶された箒が被害者なのだが。あそこまで盛大に倒れられては謝るしかない。

しばらくして、沈黙。気まずい。

「あ、えっと……俺、お茶入れるな！」

何とか空気を変えようと明るい声を上げて立ち上がった一夏だが、久秋と箒の間には微妙な空気が立ち込めていた。

久秋は職務上専用機持ちには積極的に関わるがそれ以外では他のクラスの間など知ったこっちゃなかったりする。箒としても唯一

の男、一夏の友人として顔ぐらひは覚えていたが直接話す事はほとんどない。お互い距離を測りあぐねていた。久秋としては篠ノ之という姓に興味を持たないわけでもないのだが、あまり深い仲でもないのにソレに触れるのは危険すぎる。

「そ、そういうえ。週末にはなにをするのだ？」

結局箒は一夏に逃げた。仕方ない。

「ん？ あー、なんか三組のクラス代表も久秋ん所の奴らしくてさ、普段は練習しないけど今週末には天鞍の施設で色々やるんだとさ。で、それが俺の参考になるかも……って」

「あいつは接近戦タイプで、さらに生身で扱う武術をISに転化している共通点も多いからな。織斑も戦い方を見直すいい機会となるはずだ」

一夏の言葉に久秋が続ける。しかしその言葉も箒の耳にはほとんど入っていなかった。思う事はただ一つ。

「ISで強くなる事が、そんなに大事なのか……？ そ、その、私と、……いや、何でも、ない。だが、剣道すらやめていたお前が、何故今さらになって力を求めるんだ、一夏」

箒の心にあるのは苛立ちと疑問。そもそもセシリアや近春と近いのだからISの訓練に精を出しているからだ。そりゃ専用機持ちになったのだから多少は訓練が必要だという事も分かる。だが一夏はもつともつと上を見据えている気がした。あの中でも一番強くなるうとしている。箒との絆であった剣道すら捨てていた一夏が。

箒の言葉の真剣さを感じ取ったか、しばらく無言だった一夏は全

員分の茶を用意してベッドに座る。

「守りたいからだよ」

どこか照れたように、茶を冷ましながら一夏は呟いた。

「女尊男卑こんなせかいになつてさ、いや、こうなる前からかもしれないけど……
……やっぱさ、ただ力じゃ解決できない問題もあるって思つて……剣
道、ちよつとどうでもいいって思う事もあつたんだよな。で、『守
る』って何なのか考えてみると少しは千冬姉への助けになる事なの
かもと思つて、剣道やめてバイトしてさ」

今思えば中学生の稼ぎでES学園教師の収入に敵う訳ないよな
と苦笑する一夏。

だが、少しすると表情を引き締め右腕を掲げた。そこには白く輝
くガントレット。

「でも、今は白式こいつがある。力だけじゃない。力と、それを振るえる
環境がある。世界でたった一人の男つて奴だし……ちよつと臭いけ
ど、これが運命つて奴なのかもな、って思つたりもして」

一夏にとつて、『守る』というのはそれだけ意味のある行為であ
る。彼の根本の信念と言つてもいい。

一夏は両親の事を覚えていない。そんな彼を守り支えてきたのは
千冬だった。誰よりも強い彼女は一夏の憧れであり、目標だ。もう
これ以上姉に頼りたくない、自分が頼られたいという想い。もう何
も喪失せずに生きていきたいという想い。それが『守る』。

「だから、俺は俺に関わる全ての人を守るようになりたい。もち
ろん、箒もな」

「一夏……」

そんな訳で、イケメンスマイルの一夏と乙女顔染めの箒は、久秋が「こんな無駄にいい雰囲気空間にいられるか」と逃げ出したことには気付かなかった。気付いても続けていた恐れはあるが。

「セーシーリーアー！ そーいえば思ったんだけどおっぱいが絶妙だね！」

「レディが大声ではしたない事を叫ぶものではありませんわ！」

隣から石鹼が飛んできてヨンファの頭に当たった。痛い。

現在、セシリアとヨンファ、近春の三人は部屋棟のシャワールームを使っている。近春が陸上部所属なので、先輩の善意により使用の許可を貰っているのだ。基本的に近春は走り込み等の後に利用するのだが。ロードワークが半分趣味の変わった女子高生なのである。

「でもヨンファ、あんまりそういう事は分らないんだけど、セシリアは綺麗だと思うな……チ力は……うん」

「まあ、褒めて頂けるといふのならそれは嬉しい事ですが……近春さんは……うん」

「お前ら唐突に喧嘩売ってんの！？ 買うよ、もう一戦やる！？」

こんな感じに仲良く喧嘩できる仲間となった三人であった。実際、セシリアはモデル体型という奴だ。絶妙と評された胸はそ

の通り自己主張しながらも体のラインを崩さない程度であり、完璧なスタイルを誇っている。本人の並々ならぬ努力もあるのだろうが、天性の美しさである。

ヨンファも東洋人にしては背が高く胸もある。流石にセシリアより脚は短く若干筋肉質ではあるが、スタイルとしては悪くない。肌の手入れや髪質について怠っているところはあるので磨けば光る、という所だろう。

対し、近春は……平均的であった。何よりも平均的であった。決して悪くはないがいいともいえない。そんな感じ。

ちなみにここにはいないもう一人、箒も巨乳である。「乳がインフレしている」とは近春の言葉。

「大丈夫ですわ、近春さん。白人圏に行けば東洋人の女性は可愛らしいと需要がある事もありますのよ？」

「私の元居た所じゃ清潔だったらモテるしね！」

「何その限定条件！？　ってかもうヨンファは軽々しくそういう事言わない！」

はぁ、と溜め息をついたのは近春。容姿だの体型だので弄るのは女としてどーかと思う、との意味を込めて。

「で、二人はどうするの？　週末、織斑さんが行くのについていくの？」

「あ、話題逸らしたー」

「逸らしましたわね」

「うつさいよ!？」

そもそも篝含む三人が異常なのだ。近春とて中学時代は体育館裏に呼び出されたり下駄箱に手紙が入っていた剛の者、女性としての魅力がないわけではない。しかしこの三人はスタイルからして違う、女の園IS学園には他にも美人は多いが、何より

セシリアさん……！ 色々と反則過ぎでしょ、それは！

篝と同じく、近春もセシリアには危機感を抱いていた。それも篝の方は近春をライバル認定していたのに対し、近春はセシリアをラスポス認定している。

まず金髪白人というだけでポイントは高い、日本の男は伝統的に外人さんに弱いものだ（偏見）。さらに前述のように外見はほぼ完璧、性格の方も口うるさく少し高慢な所はあるが、それも納得できるほど本人もしっかりしており努力家でもある。そう、一夏は媚びる女など求めていないだろう。彼に似合うのは、並び立とうとする意思のある者だけだ。その点、セシリアこそが最もと近い位置にいるとすらいえる。

近春自身も努力とかスポ根とかは嫌いではないが、セシリアは呼吸するように高みを目指す女だ。流石貴族。

「とりあえず、ヨンファは行くよ。社長に来ていいって言われてるし」

ヨンファの声で、近春は考えから覚めた。ちなみに社長とは久秋の事である。クラスメイトと打ち解けるにつれこんなあだ名がついた。正確にはまだ社長ではないのだが。

ちなみにクラスメイト以外には浸透していないので、二組が会社とか言われたりする。ノって役職を名乗る二組の子もいるが。

「ねっねっ、セシリアはどうするの？ 行くんでしょ？」

まったくもって自分の言葉を疑っていない元気な声音のヨンファ。最近はこの明るさもポーズではなく彼女本来のものとなってきた。つまり本当に能天気な声をかけたのだが、返すセシリアの声音は渋かった。

「天鞍社、ですか…… 実を言うと、少し迷う所がありました」

その言葉は近春にとっても意外だった。セシリアは向上心があり、また久秋の指示を今までの確にこなしていたからだ。初めのうちは不信感もあったようだが、久秋があくまで提案とし押し付けがなかったこと、また自らの能力が向上していくのを鑑みて「天鞍社自体は好きではないが、代表候補生として得るものがあるならば従う」という態度をとっていた。

こうして考えると、天鞍社が嫌いなのに自分と一定の付き合いが出来るなんて割り切ってるなあ、と近春は感心した。また、それは彼女の育ちによるものでもあるんだろうとなんとなく納得する。過去に勧誘の経験があるのか、天鞍社には彼女の記録も少しあった。

セシリア・オルコット。数々の事業で成功した名家の母と婿入りした父を持つが、三年前の鉄道事故で両親は他界。その後、IS適性テストでA+と好成績を叩き出し、様々な条件と共に国家と契約する。

その条件のほとんどがオルコット家の遺産を守るためのものだったという。それを決めた時の彼女の心境はどういうものだっただろうか。少なくとも、贅沢な生活を失いたくないというだけではなかったはずだ。

必然、打算的な付き合いも多くなつたはずだ。ヨンファとはまた違った意味で、彼女も少女らしい生活を送つてはいない。少なくとも三年前のその日から。

「私も頑張らないとなあ……」

対し、近春はやはりあくまでも普通だった。幼い頃から、それこそ十年前からISに触れてはいるもののそれだけだ。才能があるわけでもなし、驚くほど努力をしたわけでもなし、特殊な技能を持っているわけでもなし。兄は「触れ続けたという事が大事なんだ」と言われてはいるが、今までそれを実感した事はない。唯一、他のISとは動かし方がかなり違う遊影を扱えるようになった事だけが成果だが、これも元々ISに触れていない人間ならば習得の難度は同じだろう。

「うっし、私も鍛え直そ！　遊影に頼りっぱなしじゃいけないよね」

決意するように呟いた時　その遊影から感じる信号。こんな時でも律儀に付けていた指輪は何者かからのプライベート・チャネルの呼び掛けを示していた。特に意識もせずに通話を繋げてから、ふと思ひ至る。

「これ、規則違反じゃん！　怒られる！」

『なあに、気にするなチ力。俺が話を通しておくさ』

相手は久秋だった。遊影（正しくはその前身となる遊景）の研究成果である通信端末からこちらに声を届けている。いつも通り可愛らしいのに自信満々のム力つく声だった。

『急な話だが、中国の代表候補生がこちらに転入してくるらしい。それで、それだけならいいんだが……どうも、飛行機の影響でこちらに着くのが日曜になるらしくてな。学校の機能も縮小しているだろうし、迎えに出てやってくれないか？』

「はあ！？ 私、日曜ついてくつもりだったんだけど！ てか、なんで私がやらなきゃいけないんですよ！？」

『……手駒が増えるよやったねヒサちゃん！』

「やっぱりお前の都合じゃねえかー！」

兄妹で会話するといつもこんな感じである。

『まあ、そう逸るな。どういうわけかそいつは織斑の中学時代の友人らしい。話を聞いてみるのもいいと思うが？』

「織斑さんの！」

そして暴力さえなければいつも丸め込まれる近春である。

そう、ISを教えるという役目を兄に盗られた今、近春には周りとはベアドバンテージがない。筈と同等に戦うためには一夏の情報と一夏に繋がる人脈が欲しい所。そう、つまり中学時代の友人など格好の的……！

近春の判断は早かった。一日一緒にいるだけよりここは地盤固めに徹するべし、と。

「了解、まっかせて超仲良くなっちゃうよ！」

「あら、近春さん。誰かとお話ししてらっしゃいますの？」「え、

ヨンファ達以外に誰かいた？」

そういえば大声で会話し過ぎていたと顔を青くする近春。二人に見つかる先生に伝わる可能性もある。織斑先生のお叱りは怖いけど、担任のめそめそ私の教育が悪かったのかしらもそれはそれで嫌だ。

「ちょ、ごめつ久秋！ 今お風呂場だから切るね！」

『えっ、な、うお、って、ちょ！？ ふ、ふふ、風呂場から、つ、通信、を……ッ！』

こうして近春は事無きを得た。セシリアは結局天鞍の施設へと出掛ける事にしたらしい。

ちなみに校舎の隅で血の池に倒れ伏す久秋が見つかったりしたのだが、三人は知る由もない。

十二話：大体鼻血のせい（後書き）

書き溜め終わったア！ 書き掛けがあともう一つ、明日の更新時間までもってくれよこの体……！（主人公フェイスで

十三話：天鞍の真実（前書き）

・あらすじ

もうやめて！ 久秋のライフは0よ！

十三話：天鞍の真実

後日、一夏とセシリア、ヨンファは私服でIS学園の校門前に居た。

セシリアは明るい色のワンピースに青いジャケットを合わせていて、一夏も春らしい格好をしていた。問題はヨンファである。無地のワイシャツにジーンズ。思いつきり作業場で働く男スタイルであった。

「ヨンファさん……他に服はなかったのですか……」

頭痛をこらえるように片手で頭を押さえるセシリアに、その脇で苦笑する一夏。その様子を見てヨンファは首をかしげた。

「他にもあるよー？ 青いのと赤いの持ってる」

シャツ三段活用であった。

その様子にセシリアの堪忍袋の緒が切れた、いや別に怒る必要はないのだが女子的にやらなければいけない気がした。そんなセシリアの怒りの理由を一夏は分らない。

「服がそれだけとは一体どういう事ですか！ 年頃の……いえ、そもそも女性として、いえ人としてそれはどうかと思いますわ！ しかもよく見れば化粧の一つもしていないご様子、そんな事でどうするのですか！」

「え、えう……？ で、でも荷物これだけの方が便利だし……」

「それだけ……？ まさか！」

セシリアはいきなりヨンファの胸を正面から掴んだ。咄嗟に一夏は顔を逸らした。が、ぐにやりと形を変えた瞬間のそれが網膜に焼き付きつい顔が赤くなる。

「やつぱり！ ブラすら着けてませんの！？ 将来どころか、今すぐにも垂れてきますわよ！」

「そ、そうなの？ で、でも垂れても何か減る訳じゃ……」

「減りますわ！ 女の尊厳が減りますわ！」

「うええ！？」

一夏がなんとか先ほどの光景を脳内から消し去ろうと戦闘訓練の反復を脳内で行う中、現実世界ではセシリアオンステージであった。

「そもそも貴女という人はまったく無頓着過ぎて……いいですか！ 大きい胸は武器となりますがその分手入れが大切なのです！ その他も同じ！ そんなようじゃ、必ず五年後十年後に後悔する事になりますわよ！ まったく、同室の人は何をしているのかしら……」

「あ、同室の人はなんか仲のいい子の部屋に泊まりに行くことが多いくて……」

「はあ……誰か、ヨンファさんの生活態度を改善する方が必要ですわね。とりあえず、来週の日曜はお買い物ですわよ。一日でどこまで出来るか分かりませんが……貴女も代表候補生なんだからお金はあるでしょう？」

「あ、社長が言ってたよ。私の国はIS開発が難しかったぐらいだから他の人と比べて代表候補生の優遇は少ないぞ、そこら辺はそういう話になった時に説明しておけって」

「……はあ、足りない分は私が出しますわよ、もう」

「えうつ！？ ヨンファ、もう人のもの盗っちゃダメって……」

「ええいもう！ 友達の貸しぐらい受けなさい！」

なんだか心温まる感じの光景が繰り広げられていた。

なんとかやわつぱいの光景を消し去った一夏は二人の様子を聴きながら道路を見つめる。しばらくすると、白いキャンプカーが三人の前に停まる。

「少し遅くなったな、行くぞ」

助手席から、似合わないスーツ姿の久秋が三人に声をかける。

キャンプカーを運転するのはまだ年若い女性だった。癖毛の小柄な美人だ。で、それと並んでもまったく大きく見えない久秋がえらく高級そうなスーツに身を包んでいた。

後部座席に一夏を挟んで座った三人は、皆一様に下を向いて肩を震わせていた。

「……言いたい事があつたら言えばどうだ」

久秋の冷やかな言葉 まず毅然と顔を上げたのはセシリアだっ

た。

「い、いえ、まったく何の問題もありまブハア！」

途中で嘔いた。英国淑女にも耐え切れぬものはある。

「似合ってない……似合ってないよ社長……」

「ど、どんなオーダーメイドだよお前……」

後部座席総崩れであった。笑い転げるメンツに対し、久秋は面倒そうに息をついた。

「お前らにとつては一応休日だろうが、天鞍の施設に顔を出すのだから俺としては仕事なんだぞ？ ラフな格好でどうする」

「い、いや、それはそうかもしれないけどそういう事じゃなくて……」

「こ、子供社長ですわ……！」

「可愛い……ッ！ 可愛い……ッ！」

さらに笑い転げる一同に、久秋はもう一度溜息を吐く。それは諦めであった。

そして数十分後、その頃にはもう笑いも収まっており、全員適度に気を抜いて話しながら適度に気を張っている理想的な状態となっている。ここには訓練をしに来たのだ、決して遊びに来たわけではない。

「さて、では俺は少し準備をしてくる。お前らはここで待っていてくれ」

天鞍の訓練施設は一件何の変哲もない陸上競技場のようなところだった。実際、観客席から見下ろす限りでは陸上のレーンもあり、普段はそうのように使われているようだ。一夏たちは一通り建物の外観を回ってから自動販売機とベンチのある区画に通され、待つように指示された。

「あー……三組の代表ってどんな奴かな」

ベンチにもたれかかりながら白式を見つめ、なんとなく一夏は呟いた。その言葉に、セシリアの表情は硬くなる。

「一応、日本人ではないという話は聞いていますが……天鞍の、という事はまた何かしら特殊な人なのでしょうね。ヨンファさんは何かご存じで？」

「んーにや、天鞍の人でも横のつながりは基本的にないし。あ、でも社長が代表候補じゃなくて企業に直接所属してるって言うてた」

三人そろってうーんと首を捻る。あともう少しで対面するとはいえ、気にならないわけではない。次のクラス対抗戦が別クラス同士が絡む初めの行事になるので、クラス単位での情報すらまだ入っていないのだ。

「どーん！」

と三人が物思いにふけっていると、いきなり全員の背中に衝撃。ベンチから転げ落ち振り向くと、そこにはにこにこ笑いながら両腕

を広げた先ほどの運転手の姿があった。癖毛で小柄な女の人。

もしかして、この人が？

全員がそう思った時、女性は一瞬さらに口角を吊り上げ、そして宣言した。

「お母さんだよ！」

全員、意味が分からず硬直した。

「32歳の母なのさ、若いとか言わないでね！ もう、あの人が強引に迫るからあゝん。あ、君君、君！ 君が世界で唯一ISを動かせる織斑君だね！ いやもう面倒臭いな一夏君だね！ いやあもう、君のお姉さんには随分と世話になってさあ、あ、ライバル的な意味でね？ いつかりベンジしてやろうと思ってたけど、寄る年波には勝てなくてねえ、ヨヨヨ」

くねくねしだしたと思ったら一夏の手を取り、笑い出したと思ったらいきなりガッツポーズで、最期には泣き崩れた。意味わかんない。

確かに近くによると、どう見ても16歳とは言えない顔つきだった。その顔を見て、セシリアははっと思いついた顔になる。

「……そういえば、天鞍の前社長夫人は代表候補の一人だったと……」

「ザッツライ、君はイギリスのセシリアちゃんだね？ いや、一回モントゲロッシンも世界大会の出てないから知名度は激低なんだけどさー、これでも昔はブイブイ言わせてた系のすっげえオバチャンなんよ私？ あ、

なんでそんな凄そうな人が車の運転なんかしてるんだよオラーって顔だね？ いや実は引退後は家庭入ってたから暇でさー、こうして子供の友達の顔見に来た次第って訳さ」

一を話せば十が返ってくるようなテンションの高い女。どうもあの双子の親には思えなかったが、よくよく見れば似ている所もある。髪質は二人共通に受け継がれているようだし、この独善的な喋りはテンションの違いこそあれ久秋を思い出させる。活発さは妹の近春の方が。顔立ちと声の可愛らしさはどちらかというと久秋であった、そこは女の子にあげてほしい。

圧倒されっぱなしの三人にとりあえずベンチに座る事を促し、オレンジジュースを買って三人に手渡す女性。その後にくりと微笑み「頑張れ」と告げた。

「ま、おばちゃんはさよならするね。あんまり長いこと居ても精神統一の邪魔かもしれないし……あ、レベツカちゃんはかなり強いから気を付けてね！ なんとって、昔から世界を飛び回ってたあの人とアキちゃんが見つけた最高傑作って奴なんだから！」

バイビー、なんて軽い挨拶と共に、天鞍夫人は嵐のように去っていく。

ポカーンとする一夏とヨンファ。その中で、セシリアだけが強く拳を握りしめていた。その表情は苦悩。

「……あまり、話す事ではないと思っていました。しかし、やっぱり今のでまたわからなく……いえ、そんな言い訳より……聞いて、くれますか？」

柄にもなく弱々しい響きのセシリアの言葉に、一夏は曖昧に頷いた。ヨンファもそれを見てから慌てて頷く。二人は訳が分からない

ながらも、セシリアの話を聞くべきだと、そう思った。
セシリアは少し頭を下げ無言で礼をし、語り始めた。自らの過去について。

「私が天鞍を嫌う理由についてお話ししましょう。……いえ、恐怖を嫌悪で塗りつぶしていると言った方が正しいでしょうか。私と、あの久秋さんは……ずっと昔に、一度会っています」

その頃のセシリアはまだ幸せだった。父に対する偏見はあったが、強く尊敬できる母がまだ健在であつたし、セシリアは子供らしくも高貴な振る舞いをしようと習い事に勉強にと励んでいた。今も付き合いのある友人と遊んだり、給仕の真似事をして皆に微笑まじたり、セシリアの人生で最も穏やかだったのはあの時期であらう。

そんなある日、日本へのミサイル攻撃とそれを迎撃した謎の兵器インフィニット・ストラトスの情報が世界を揺るがした。母が忙しそうに駆け回り、そこからセシリアの日常は揺らぎ出した。
そして、その男が訪ねてくる。

「やあ、レディ。私はアマクラという者だ。今話題の日本の企業の、ね」

天鞍社社長、その人だった。

後ろについていた自分と同一年頃の子供が男の会話を食い入るように聞いていたことが印象に残っている。セシリアが母に向ける感情と同じものを感じた。そのせいだろうか、その男の異様な感じはいつまでも心の底にこびりついているのに容姿はまったく思い出せない。

「セシリア、君には素晴らしい才能があるんだよ。そう、まだ君自身も知らない才能がね。私についてこないかい？ 君のその才能、私が花開かせよう」

世間では、天鞍社はパワードスーツの研究からISの開発を有利に進めたと言われている。白騎士事件で驚いたと言われている。自社にコアが回らない事を嘆き諦めたと言われている。

しかし、今のセシリアは思う。あの男にとって、その状況は全て織り込み済みだったのではないかと。

不気味な確信に満ちた目を思い出す。その才能とはISの事だと今なら嫌でも分かってしまう。ISが一般化するなんてまだ誰も思っていない時期から、あの男は当然のようにセシリアを勧誘してきた。

「今納得しないのなら仕方ない。私は、天鞍は君の事をいつまでも待っているよ」

結局、その男はセシリアの母に追い出された。そんな怪しい事にウチの娘を任せられるか、と。

セシリアは泣き叫び、ずっと母のスカートに縋りついていて、それを見ていた子供の 久秋の冷やかな視線がまた一層恐ろしかった。

そして セシリアは強くある為、男性を恐怖の対象から憎悪の対象に変えた。しかし素直になれた今だからこそ思う。あれが自分のトラウマだ。きっとあれが男性嫌いの根本なのだ、と。

そう、天鞍社長は誰も知らない事を知っていた。

誰も持たない特殊な技術でIS開発を牽引してきた。

普通なら得る事のないコネで一代で世界に名を馳せる企業を作り上げた。

あり得ないほどISについて優秀な嫁を取り、唯一の男と同年の子供を作った。

彼は未来を知っていた。そう、書籍という形によって。未来は彼の手の中にこそあった。

彼こそ、この世界で初めての転生者。

十三話：天鞍の真実（後書き）

そんな訳で、一夏VSセシリアが原作沿いにならなかった訳は

1、一夏は久秋に戦術を仕込まれていた

2、セシリアは原作なら「情けない男が嫌い」だが、この二次ではトラウマ持ち

なのです。な訳でフラグブレイク。天鞍社長パネエ伝説はこれから続きます。なんたって遊影のシステムとか原作基準だとありえなさそうだけど、転生者が作ったなら「技術系チートSUGEEEE E！」ですし。

そんな訳でストック切れしました。そんな時に言うのもなんですけどこの章終わったらアンケートでもしようかと思えます。あと二話ぐらいでちよつと強引だけど原作一卷後半部分突入、燃え上がれ俺。

十四話・乙女心ジエノサイド（前書き）

・あらすじ

「お父さんは転生者だったんだよ！」

> ナ、ナンダッテー

前の話の直接続きじゃございません

十四話：乙女心ジエノサイド

「ぬ」

「む」

箒は寮の裏での剣道の自主練習を終えた所。近春は朝の走り込みを終えた所。お互いがこの部室棟のシャワールーム前で出会うのは必然とすら言えた。

「あああら、専用機を持っていなくて卑しく織斑さんについていく欲望が果たされなかった箒さんじゃあないですかあ」

「そういうそちらは、一夏の過去を探りたいという気色の悪い理由で居残りを決めた近春じゃないか」

漫画的表現をするならお互い頭に怒りマークがついていた、三つぐらい。この二人、一夏を奪い合う恋敵だからというのもあるが犬猿の仲である。集団の頂点に立つ俗物的な近春と、古風で自らを貫く気質の箒、合う性格とは言い難かった。

「ってか、なんで箒がその事知ってんの。何、盗聴でもしてんの？怖っ」

敬語猫かぶりモードを脱ぎ捨て（ちなみに一夏の前だと標準装備）、わざとらしく眉にしわ寄せ身を震わす近春。箒は鼻を鳴らして応えた。

「自意識過剰だ馬鹿め。一夏経由でお前の兄から聞いたただだ、用

がないのなら私にも頼む、とな」

「はぁ？ 箒も来んの？」

「文句があるならお前は来なくともいいのだぞ」

お互い、視線に火花散らして睨み合う。そのまま数秒、しかし最後には同じタイミングでぶいと顔をそむけて二人でシャワールームに進んでいった。

近春の目的とは一夏の過去の話を聞いて話題を増やしたりまあ色々としたいとそんな感じである。だが、それは箒にとっても同じだった。幼馴染とはいえ小学生の頃を共に過ごしただけ、中学生の時期になると家庭の都合で引越しを繰り返していたので空白期なのである。そこを埋める話題があるのならば、是非とも得たい所。

女の戦いは情報戦の時代なのだ。少なくとも今は。

近春は最近、迷っていた。自分の髪型についてである。

髪を伸ばした方が女らしいし、自分としてもそちらの方が好きだ。しかし活発に動くほうではあるし、ISでの空中戦では慣性制御能力・PICで髪なんかナビかないしハイパーセンサーで前髪ぐらい掻い潜るのだからそれでも鬱陶しく感じるのは確か。近春としてはセシリアが信じられない、ISだってスポーツ以上動くのに。というか、もしかしてセシリアはスポーツの時でも髪を結ばないのだろうか。それならさらに信じられない。

閑話休題、だからポニーテールという髪型を選択していた近春だが、どうもこれは箒と被る。だから迷っているのだ。変えるべきか、貫くべきか。向こうはそんな事なんか気にしていないが近春は気にする。スタイルが違うのだし、髪型が同じって事でそこを比較され

てはたまらない。情けないが、素の外見ならば箒には敵わない。

そんな訳で迷った挙句、シャワーを浴びた後はツインテールを選択してみた。子供っぽい髪型は、周りに比べて貧相な自分の体つきを強調するみたいで好きではないのだが、逆にこれはこれでいいかもしれない。可愛い系、そう今日の私は可愛い系だ。そう言い聞かせて制服を身にまとう。

結論から言うと失策であった

鳳・鈴音。^{ふあん りんいん} 中国代表候補者というぐらいしか知らなかったが、ボストンバッグ一つだけで改造制服を着たその少女は ツインテールだった。

鋭角的な瞳はヨンファと似ているかもしれないが、彼女が猛禽ならばこちらはネコ科。気性の激しさと共にどこか愛嬌や親しみやすさを感じる。背も胸も近春よりも小さいぐらいだが、近春自身はそれが女子的アドバンテージになっているとは微塵も考えられなかった。その身長にしては長い脚に、胸なんてむしろない方がステキでぐらいに均整の取れた体、美しく艶のある黒髪。全体の印象は艶やかにしてしなやか。まさに猫。

ツインテールの美人キター！

学園の正門前で、近春はがっくりを頂垂れた。結んだツインテールも連動してがっくりと垂れ下がる。衝動に任せて引きちぎりたくなかった。

前門の転校生、後門の箒。誤用もいい所だがハイスペックに囲まれた一夏の状況を嘆くばかりである。

「えっと……あんたたちが学園の案内してくれるんだ、よね？」

自信なさげなのはやはり近春の様子を見たからであろつ。ちなみに箒は隣で何を落ち込んでいるんだこいつと首を傾げていた。まったく乙女心を介さない女であるとか心の中だけで罵倒する近春。

とりあえずそんな訳で、学校案内が始まつた。

そして学校案内は終わった。シーンぶつとばし安定。

とりあえず引き千切らずゴム紐を解いて髪型を戻し結んでいた故の乱れに悲鳴を上げお化粧室でお色直しをした近春は、その後見事に務めを果たした。ついてきていた箒だが、彼女の社交性レベルはぶつちやけ低い。初対面の相手と親しくなる事にかけては近春の方が上だつた。

そして時折箒を交えての和やかな談笑の中（間に誰かを置けばとりあえず近春は柔らかくなるので、売り言葉に買い言葉な箒も必然的に喉が取れる）、一通りの案内が終わつて昼食時となる。食堂が空いていないので外のファミレスでも行こうかという話になつたのだが

「私の家、昔は中華料理屋だつたのよ」

という鈴音の一声により何故か自ら調理することと相成つた。なんとなく盛り上がったのだから仕方ない。

そして今、三人は近春の部屋に集まつていた。そこには備え付けのキッチンよりも少しばかり立派なものが供えられており、冷蔵庫もジュースを冷やしたりするようなものではなく本格的な一台が。

「同室のイオリちゃんが料理趣味でね、食材も揃えてあるんだ。遠慮なく使つていいかね」

そんな訳で三人は適当に三人で並んで調理を始めている。とはいえ、間に合わせの食材である。何を作ろうと材料を決めて買ったわけでもないのでチンジャオロース……の筍抜き・もやし入り、つまり野菜炒めである。独身男性みたいだが仕方ない。

「ってか、オイスターソースはあるのね。一般的にはあんまり使わないんじゃないの？」

「んー、イオリちゃん和洋中何でも作るから。ありゃホント趣味じゃないと出来ないね。あ、折角だからこれ炒飯にも入れよ。いやあ、万能万能」

「男臭い料理になっちゃったわねえ」

「まー、こっから彩りで挽回よー」

二人は手慣れた様子でピーマンの種とワタを取りながら談笑する。鈴音はとある理由から料理修行をしていたし、近春も暇そうな母から料理を教わった事がある。これぐらいなら朝飯前である。

問題は箸であつた。

「……………」

ピーマンが、無残な姿に解体されていた。ざつくざくと身まで切り込んでしまった包丁が投げ捨てられ、箸自身は両手で頭を抱えてわなわなしている。

「……箸」

「……炒飯に入れられるから、ね？」

「ええい！ 同情はいらん！」

二人の憐みの視線を振り払うように手をぶんぶん振る箒。普段の凜とした姿からは想像できないほどの醜態である。ていうか涙目である。

「りよ、料理をするのは……その、初めてなのだ……」

そう、箒は姉・束のせいで各地を転々とする生活を送っていた。それは少女にとってはかなりの負担、友達も出来ない生活だ。その不安定な心を支えたのが幼馴染の一夏との唯一の繋がり、剣道である。剣道に没頭し続けた箒が一夏を想い続けたのは必然、そして他の事に身が入らなかったのも必然であつた。箒も箒で、少女らしい青春が足りていない。

そんな事情は知らない二人だが、今その心は一つになった。箒に料理を教えてやりたい、と。

鈴音は他人の心の機微に聡く、それ故につい世話を焼いてしまう事がある。初対面であろうとも、今はそれが発動してしまった。

近春はリーダー気質なので世話を焼きたがるのは当然ですらある。相手が恋敵だろうがなんだろうが関係ない、いやむしろ敵だからこそ駄目な所を見ると「もう、しょうがないなあ」って感じになっちゃうのである。

「……よし、炒飯は任せたわよ、箒！」

「私らがちゃんと手順教えるから、やってみて！」

「え、ええ？ そ、そんないきなり言われたって……！」

調理中

「はいはいはい、ピーマンそのままじゃ使えないからもっと小さく！ お肉も！」

「卵溶くの弱いよ！ もっと激しくやってもこぼれないから！」

「はい、元栓そっちね！ そうそう！ あ、サラダ油サラダ油！ これ忘れると大惨事になるから！」

「炒めるのは肉からだよ！ 火が通りにくいものから先に！」

調理終了

少女達は燃え尽きていた。

「はあはあ……もう教える事はないー、免許皆伝ー」

三人分の皿に炒飯を盛り付けながら近春。

「な、なんであんな無駄な教え方しちゃったんだろ、私……」

疲れ果てベッドに寝転がり鈴音。

「やった……できた……これが料理か」

感慨深げにうんうん頷く筈。

兎にも角にも、出来たのである。炒飯はこんがり狐色、美味しそ

うだ。引っ張り出した折り畳みテーブルの上に三人分の皿とスプーンを混ぜて、三人一緒に両手を合わせていただきますの構え。

「あ」

それを口に入れた三人は、一様に同じ声を上げた。

「味がない……」

調味料入れ忘れであつた。

「しょ、所詮私はこの程度なのだ……料理など……料理など……！」

「指示忘れた私らが悪かったから！　ね！？」

「う、うん、そうよ！　箸は何にも悪くない！　悪くないから！」

ずがーんと落ち込む箸を両サイドから慰める近春と鈴音。本気で醜態である。

今にも涙がこぼれんばかりの箸。自分より大きな彼女の肩を、近春が抱く。

「大丈夫、初めはこんなもんだよ。ちよつとずつ教えるから、ね？」

その背中をぽんぽんと優しく叩く鈴音。

「うん、私も中華なら得意だから、ね。仲良くしましょ、箸」

「二人とも……！」

今ここに国境国籍所得を超えた美しい三人の友情が完成した。嗚呼素晴らしきかな乙女の絆。三人はテーブルを中心に、誓い合うように手を差し出しあった。

「私の事は鈴って呼んで。親しい友達は皆そう呼ぶわ」

「あ、私はチカって呼ばれる。箒も、改めてよろしくね」

「む、私にはそう言ったあだ名の類はないな……ま、まあ、うん。よろしく頼む」

女三人寄れば姦しい。三人はこの後、紅茶などを嗜みつつ学園の話題から鈴の事、先生はどうだの規則はどうだのという話をした。話題など些細な事でいい、乙女の談笑にくべる薪など小さいぐらいが丁度いいのだ。些細な事から些細な事へ、話題はくるくると移り変わり、そして気づけば一時間の時が経っていた。

だからふと箒が言い放ったその言葉は　あまりにも恐ろしい言葉だった。乙女の話題など些細な事でいい、そうだからいつの間にやら話題は料理についてのものになっていた。この時、箒がその言葉を呟かなければこの場はもっと穏便に済んでいただろう。この場だけ、かもしれないが。

「そういえば……私の料理が上達すれば、一夏は食べてくれるだろうか……」

箒は、ある意味迂闊な女である。というか、基本的に乙女全開である。それ故に一夏への好意を隠せようはずもない。夢見るように中空を舞う視線は、朗らかに笑う彼の顔をそこに見ていた。

こおんの女……ッ！　優しくしていれば付け上がりおって……！

当然、それに反応してギリギリ歯ぎしりしだす近春。乙女の恋はジエノサイド。

しかし、彼女よりもはるかに衝撃を受けた女がそこに居た。

「ちょ、ちょっと待ってちょっと待って……？　ね、ねえ、篝。あ、あんたって一夏を知ってるの？　あ、いや、そりゃIS学園唯一の男なんだから知ってるだろうけど、でもその、なんていうか、ご飯を食べさせるような仲……なの……？」

狼狽した様子の鈴音。それだけの理由が彼女にはある。

鈴音にとって一夏は中国へ帰国する前、中学時代の最も親しい友人にして　片思いの相手なのだ。いや、もう片思いとは言えないかもしれない。遠回しながら告白まがいの事をして受け入れられたのだ。もしかするともう両思い　？　みたいな、そんな甘ったるい事を脳内で考える間柄なのである。

それがどうだ、目の前の二人。表情で察することが出来た。ああ、これは敵だ。

「……あ、そーいえば鈴って中学の頃、織斑さんとト・モ・ダ・チ……だったんだっけ？」

急に声が冷たくフラットになる近春、ちなみにジト目。殊更友達部分を強調。

「ああ……そういえば私たちは話が聞きたいんだっとな。そうだな、じっくりと」

瞳に刃の鋭さを滲ませる筈。人を超えた鬼、エロ本回ぶりに再誕。

「あー、なんていうか……私も、あんた達と一夏のカンケイ、気になっちゃったあ。ISアリーナで、お話しましょ？」

近春は右手の指輪を、鈴音は右手の黒いブレスレットを、正面から軽く打ちつけ合う。二人の様子を、筈は敵意を持って見つめていた。

教訓：女の友情は男が絡むと脆い。

十四話・乙女心ジエノサイド（後書き）

なんていうか酷い話。この後の時間軸については前話ともども次の章で解決という事で、次回章エピソード。

更新時間、平均でこんな感じになると思われやす

十五話：クラス対抗戦に向けて（前書き）

・あらすじ

章タイトル詐欺（転校生ほとんど出ないという意味で

ないわけではない、むしろ代表候補生にすら引けを取らない素晴らしい能力を持っている。が、持って生まれた物だけはどうにもならない。ああ無情。

「仕方ない！ 社長はヨンファに任せて！」

「おまつ、ちょっと待て色々忘れてるだろこの鳥あた　　ブハッ
！」

さつとヨンファが久秋を抱き上げた。背中を押しつぶされるおっぱいにより鼻血。一夏とセシリアは見ないふりを決め込んだ。廊下の掃除誰がするんだろうなとか思いながら。

そんな訳で一組に駆け込んだ一夏とセシリアは千冬による出席簿アタックを食らった。二組に駆け込んだヨンファ with 久秋は担任に驚き泣かれた。

一通り千冬の洗礼を受け痛む頭を擦りながら、一夏は日曜の戦いについて回想する。

天鞍社所属の赤毛のアメリカ人女性、レベッカ・ライトと専用機シリー・スターゲイザー。

強かった、とてつもなく強かった。三人がかりでもギリギリ負けるほどだ。同じ一年生であそこまで差があるとは思わなかった。

（ま……やっぱり変な奴だったけど。今度幕に会わせてやったら喜ぶかな、あいつ）

レベッカの様子を思い出し、苦笑。天鞍の人間は誰もかれも癖のある人間だと思うが、彼女が最高潮におかしな性格をしていた。そ

れと同時に、久秋との息も合っていた。彼女はこの学園において天鞍兄妹の護衛も受け持っているというから、当然と言えば当然なのだ。

新しい経験。充実した施設。昨日の一件は確実に一夏を成長させていた。完成間近だったとある技術も、そこで完全に身につける事が出来た。接近戦しか出来ない一夏にとって、その技術はとても大きな意味を持つ。

（よし、次のクラス代表戦、頑張ってみるか！）

対し、セシリアは昨日の事よりも篤が気になっていた。席の関係で今は顔が見えないが、教室に入る瞬間に見たその顔は一夏を見て何とも微妙な表情を浮かべていたからだ。

（昨日一日で何やら関係が壊れていなければいいのですけど……）

男性を遠ざけていたがゆえに恋愛に疎いセシリアは、一夏を好く二人のようすを思い溜息を吐く。

セシリアとて一夏の事は好きではある。初めて認めた男性なのだ、女性心理として気にならない筈がない。しかしあの二人を初め一夏の事を好きだという女性は無数にいるではないか。だからセシリアは有象無象になるより、たった一人のセシリア・オルコットという友人、ライバルでいる事に決めたのだ。一夏の事を男性として魅力的だと思うが、決して手に入れようとは思わない。そもそも他の女子と争うにも、経験値で負けているのだし。

さらに言うならば、セシリアの旦那という事はオルコット家を継ぐものだ。一夏では多少心もとないと思わなくもない。その場合、向こうからならともかくこちらからアプローチしておいて「貴方は

私の夫にふさわしくありません！」とは言えないだろう、普通。

（それに一夏さんと二人並ぶより、一夏さんの隣にいる人を見てみたい気持ちもありますし、ね）

五年後か十年後か、自分も素敵な旦那を見つけ、そして一夏の嫁だか恋人だかに学生時代の一夏の話をする。そして四人でお酒でも飲んで一夏をからかったりなどするのだ。それは少し幸せな未来想像図。いつかそんな日が来るというのなら、ちよつとした失恋ぐらいしてやろうという大人な気分である。

ただ、気にかかるのは筭と近春の問題である。どちらが一夏を射止めるのだろうか、あの二人以外はない気がするのだが、果たしてどうだろう。まったく、恋というものは恐ろしい。どちらも友人なのでどちらに肩入れするかも迷ってしまう。

（私に出来る事ってあるんでしょうか……）

セシリアは知らない、その転校生の存在を。

「こらっ、駄目じゃんヨンファ！ そんなんじゃいつか社長死ぬよ！？」

「い、ごめん……」

「面倒くさいよねえ、社長。この前、洗濯かごぶちまけちゃってさあ、鼻血を落とすために手洗いだよね？」

「ま、でも本人も克服しようとしてるんだし。おい、社長ー！

だいじょーぶー？」

声が聞こえる。しかし意識は微睡んでいる。久秋の意識は夢の表層を漂っていた。

「ありや、やつぱ駄目だ。んじゃ、いつものお願い」

「はいはい、私にお任せえい」

そしていきなり頭蓋の衝撃。無意識にごろごろ転がりながら、涙目になって覚醒する。

すると、目の前には竹刀を振り下ろした状態の女生徒がいた。

「ぬ、ぐう……痛い、けど助かった。いつもすまん、宝塚」

「いーえいえ、私、秘書ですんで」

「ずーるーいー。秘書って先言ったのは私だよ？ 乱暴だしさあ」

「ふ、安心せい伊織。峰打ちじゃー」

宝塚（剣道部所属）と伊織（近春と同室、料理部所属）の言い争いを適当に聞き流しながら、久秋は立ち上がる。そして見慣れないもの　　というか、人を見つけた。

目の前に、自分よりも少し大きいぐらいの背の女がいる。しかも、不敵な笑みで。

「あー、やっと目え覚めたみたいね。あんたがチカの兄さん？」

「ん……ああ、お前は中国の……」

「知っててもらって光栄光栄。ま、そーいう訳で次のクラス対抗戦は私が出るから」

ちよつと待て。

そんな感じに固まっているのは久秋だけだ。ヨンファも近春も不機嫌そうにそつぽを向いている。

「チカ！ 説明しろ！」

「べつつにー。わ・た・し・が鍛えた織斑さんと戦って身の程を知ってもらおうかと思って」

口を尖らせる近春。彼女がここまで人を敵視するのは珍しいとい
うか、久秋に心当たりは一つしかなかった。逆効果だ、一夏を狙っ
て争ってやがる。

「はーん？ 結局あんた、私に勝てなかったじゃん？ ま、一発目
を避けた手品は褒めてあげるけどさ」

「うつさいよ！ 機体相性頼りで何いい気になってんの！？」

「てーいーうーかー、なんでチカは負けてるのー？ これでヨンフ
ア一番弱いじゃーん！」

専用機持ち同士の喧嘩が始まった。こうなると止めるのが面倒臭
い、男だ女だ関係なしに他人の喧嘩に首を突っ込むと面倒だ。

「先生、もっとしっかりしてください……」

「えっう！？　で、でもね、色々見極めるためにね、クラス代表がちょっと変わるぐらい、ね？　あ、あの、うん、ね？　大丈夫よね！？」

やはりこのクラスは自分がないとだめだ。決意を新たにする久秋であった。

クラス対抗戦、迫る　　！

十五話：クラス対抗戦に向けて（後書き）

モブに名前あるのは原作リスペクトって事で。あ、あとユーザー登録してない人も感想書けるようにします、一応。今まで気づいてなかった。

そんな訳でアンケートさせていただきます。ズバリ今後の展開について。プロット（筋書きみたいなもの）考え直す内にちよつと二つに分かれたので。

一卷終了後の展開を「コメディ寄りプロット」にするか「シリアス寄りプロット」にするか、というのがアンケート内容です。それぞれの特徴を上げると

「コメディ」

- ・主人公が原作キャラを攻略しちゃう、一応
- ・ラウラとシャルが残念で愉快的事になる
- ・ハチャメチャ学園スポーツな感じ……なのかもしれない

「シリアス」

- ・展開重視でキャラ薄れるかも
- ・ラウラとシャルが酷くてイカした事になる
- ・シリアスロボットバトル……になるかもしれない

締め切りは三章終了までって事で。あ、あとラウラとシャルが嫌いな訳では、決してございません。ただこつから原作乖離が顕著になるだけです。

アンケへの投票は基本メッセージをお願いします。「あいつポイント稼ぎたいからって足掻いてるよ（クスクス）」とか言われたら恥ずかしくなっちゃう。他に感想があつてそのついでに、という場合以

外はこれで。

票数集まればいいなあと思いながら、次回から三章です。

番外：ヨンファ日常編（前書き）

・あらすじ

次から三章と言ったな？　　ありゃあ嘘だ

すいません、いつ入れようか迷ってた話をここに入れます。ちなみに前半に出てくる人物はやりたいからやっただけなのであんまり物語には絡みません

番外：ヨンファ日常編

国家代表 それはその国家で最強のIS乗りの称号であり、この時代では国家元首などにも匹敵する『国の顔』である。その主な仕事は代表候補達と変わらずISの開発発展に携わる事、そして有事の際は防衛戦力として国のために命を懸けること。それ以外にも国によって様々な特色があったりもする。

そしてここ韓国の国家代表である林・智賢^{イム ジヒョン}は 女優をしていた。

「ジヒョン、撮影まであと40分。移動を考えるとあと数分で出ないといけないわ」

「はいはい、了解。んじゃ皆、片付けは任せたねー」

芸能マネージャー兼整備班である相棒の言葉に従い、彼女はISの整備場を出て車へと向かった。

韓国は昔から芸能関係には力を入れている国だ。元々が国家代表や代表候補はアイドルやモデルのように雑誌に載る事があるので、この扱いは当然と言えた。たとえば彼女の美しさが作りものであったとしても。

年齢27を超えた彼女だが、まだ水着のモデルも出来るほど体のラインは完璧だ。その顔もまた万人が美しいと感じるほど。悪く言えば作法的に 整っている。勿論本人の努力によるものもあるが、整形技術によるところが大きい。様々な人の手を借りて、莫大な金をかけて彼女は自分を『改造』した。もう体の中で手の入ってない部分は少ないくらいだ。

そんな彼女だが、意外ともいえるほど非難は少なかった。その理由の一つは、事実の全てはマスコミによって明かされたものではなく本人が大々的に発表したものだという事だ。

『確かに私の顔は作りものだし、胸にもシリコン入れてるよ？ 映像も画像も加工してるし、上手く引き立ててもらってる部分もあるかな。で、だから何？ 紛い物（笑）に劣る本格派（笑）の皆さんが激怒でもするの？』

彼女の発言は韓国国内に収まらずインターネットを介し世界中で激論が交わされた。今まで散々ひた隠しにされてきたアイドルの裏側　それが全て本人の手で晒されたのだ。しかも、まったく悪い事ではないという風に。

そして非難の少ないもう一つの理由、それは彼女が演技派でありトークも優秀、つまり外見に伴うかそれ以上の実力を持っていたことだ。

『私はエンターテイナー、皆を楽しませるのがお仕事だもの。綺麗な方が見てて気分いいでしょ？ ISに乗った花形の方がカッコいいでしょ？ ぜえんぶ、手段であって目的じゃないもの。で、皆私の出てる映画やドラマ、そんなにつまらないかな？』

その問いに自信を持って「つまらない」と返せるものは少数だった。今では整形をカミングアウトする芸能人も割合多く、彼女の存在は芸能界の生きた革命として今も特別視されている。

そんな彼女も、移動中の車の中となればプライベート。運転を相棒に任せ、後部座席で優雅に寝転んでいる。

「あと二十分で到着よ。メイクは向こうでするけど、今のうちに髪ぐらい整えておきなさいな」

「んー、べつつにー？ カメラ回ってないでしょ？」

そんなカリスマ女優ジヒョンは生粋のエンターテイナー……であると共に、エンターテイナーじゃない場所ではすんごく駄目な人だった。こりゃドッキリ番組でも来たら終わりだな、と相棒の女性は溜息を吐く。

と、だらけきっていたジヒョンがピクリと反応する。そのままブローチになっているISのヘッドギアだけを展開　こうしなくても出来るのだろうが、通話が繋がった事を相棒に示すためにもジヒョンはそうしている　した。

「はあ！？」

そして怒号。相棒の彼女にとっては慣れた事である。

「未だに私の助けがいるの！？　あのね、忙しいって言うてんでしょが！　つか、友達出来たとか言ってたじゃん、友達！　機密？　知るか、触れない範囲で教えてもらいなさいよ！　ガキの頃は許してやったけどね、いつまでもアホのままがかわいいとか勘違いしてんじゃないわよ！」

ジヒョンの叫びは日本語だった。日本語でISを介して呼びかけるという事は、母国語の方が不慣れな彼女の後輩、ヨンファに違いなかった。

韓国はIS開発は進んでいない。女尊男卑の受け入れ方等々の思惑が絡んだ末の事なのだが、とりあえずIS関連施設が少なければサポートスタッフも多くはない。そして国土の小ささも相まって二人は同じ施設でISについての訓練をしていたのだ。

「あんまりゴチャゴチャ言うなら……次の夏休み、帰ってきたらミツチリ稽古付けてあげるわ。絶対防御で安心できない、人体の痛めつけ方ってのを身を持って教えてあげようかしらあ？」

音声すら聞こえないはずなのに、日本のベッドの上で縮こまるヨンファの姿を幻視した相棒の女性。心の中で冥福を祈る。

ちなみにジヒヨンの専用機パルダ・サマグイは日本製量産機である打鉄の改造機であると同時にヨンファのカンハダ・コミの前身となる機体であり、両腕に備えられたエッジアームが特徴の機体だ。中距離格闘戦仕様と言われるそれはジヒヨンの技量と相まって間合いに入れば鬼のような連続攻撃が待っている。というか、間合い内で対戦を始めたらヨンファは二分で落とされた。

「ハッ！ 分かったらとつとやる！ こっちは忙しいのよ！」

怒鳴り、ISの通信を切ったジヒヨンをバックミラー越しに見ながら、相棒の女性は苦笑した。

（ホント、演技派ねこかぶりよねえ、カメラの前では）

カリスマ女優の本当の姿は、なんかキレイやすいドSだった。

ところ変わってここは日本、整備室の内一室で空間投影型のディスプレイとキーボードを展開して、なんか涙目になっているヨンファが居た。

（先生え……やっぱり厳しすぎるよお……）

同じ施設の先輩でありISについて様々な事の先生であつた女性 日本に来てから気づいたが、彼女はやたらこちらの都合を考えないスパルタだ。だからこそヨンファもストイックに強くなれたの

だが。

とりあえず、今は報告書である。代表候補はここにデータ集めに来ているという側面もあるのだ。当然、様々な事を報告する義務も伴う。

「どしたの、ヨンファちゃん？ 駄目だったの？」

「あ、うん。駄目みたいです……」

カンハダ・コミの調整を手伝ってもらっていた上級生の整備科二年生からは科が分かれる 先輩の心配そうな声。そりゃ涙目になってるんだから心配もする。

専用機というのは整備科にとつて弄りがいのあるモノらしく、あのクラス代表を決めるバトルの際に観戦していた先輩がすぐに担当してくれることに決まった。場合によっては一年の友人に手伝ってもらったり増員はするが、今日は調整程度なので二人きりなのだ。ちなみに近春は天鞍社関連の生徒が付いていて完全な調整がされるらしい。なんていうか、凄い。

「私も、流石に代表候補の報告書の書き方なんか知らないにゃー。お友達に聞いてみたら？ 代表候補いるんでしょー？」

「いますけど……」

報告書は、勿論韓国語である。日本語なら良かった、誰にでも聞くことが出来る。英語ならかうじて良かった、セシリアに聞くことが出来る。しかしハングルを読める専用機持ちがこの学園に居るだろうか？

そう考えた時、ヨンファの頭に閃きが。そうだ、ちょっと嫌だけどあの人ならば……

「で、私の所に来たわけ？ あのね、中国は公用語違うつて分かるよね？ 分かる？ …… いやまあ、隣の国だしついでに習ってるんだけどさ」

そんな訳で、ヨンファは鈴音に頼み込んだ。なんとなく国が近いからという理由だったのだが、そんな頭の弱い理由が通用したのはもう奇跡的だ。

「教科書文法しか無理だけど、それでもいいならまあ、手伝ってもいいわよ。クラスメイトだしね」

「お、お願い！ します！」

そんな訳で、ヨンファとしては微妙な気持ちではあるものの教えてもらう事となった。ちなみにヨンファの不機嫌さの元とは「近春とは同レベルでクラス代表を譲ったのにいつの間にか不戦勝のように鈴音がクラス代表になっているのが気に入らない」という事である。鈴音の人格などは特に嫌いではない。というか、ヨンファにとってはまだ「嫌いな人」というのがよく分からない。

再びディスプレイを展開し、しばらく黙々と作業。横から鈴音の指示もあり、報告書自体も複雑な内容でなかったので30分ほどで終わった。

「わりと簡単に済んだわね。でもやっぱり、同じ第三世代でも天鞍が絡んでると色々報告書の仕様が違ってたわ」

「そーなの？」

「ぶつちやけ、隠す所と隠さない所の分け方とか色々あつてめんどくさい」

天鞍製のISは、普通の国家所属専用機とは違い天鞍への説明・報告責任がある。とはいえ、天鞍は他の企業よりも技術をオープンにしているので全部出してしまうては他の国に戦力の全てを晒すようなものだ。そんな訳で、天鞍が担当している特殊部分　カンハダ・コミなら『万能の手』　に関する稼動データのみを天鞍社に渡すことになっている。

「それに、機体の仕様もね……」

ふうむ、と顎に手をかけ考え込むその姿は、彼女もISに携わる代表候補生だという事を十分に感じさせる。ヨンファも機密となる部分は見せていないが、整備科に見せる程度のデータは明かしてしまった。

「鈴音のはシンプルなんだよね？　チカに聞いたんだけど」

「ん、まあ私のは燃費重視だしね。そりゃあんたのに比べたら扱いやすい……というか、天鞍のなんてほとんどがじゃじゃ馬じゃない」

お互いにISのデータの当たり障りのない部分を見せ合いながら、二人は議論を深めていく。

クラス代表決定戦以降、篤などの友人を得たヨンファは極端だった精神面を成長させていった。それは少女らしくなっていくという事なのだが、だからといってISの方を疎かにする気はなかった。むしろ、まだ彼女の根幹は「強くなる」という事に支えられている所が大きい。セシリアや一夏との関わりもISを通してのものが多いくらいだ。

負けを許容できるようになった事は、即ち弱くなるという事ではない。敗北から学ぶ心をコンファは手に入れた。

（だからいつか一番強くなるんだ。鈴音にも勝って、セシリアにも勝って、それで先生にも勝って　　）

そして、それから。それからどうするかなんてまだ決めてはいないが、IS学園に三年間通う目的は見つけた。

（それに、鈴音もいい人そうだし。トモダチ沢山できるかなあ）

彼女の心はまだ歩み出したばかり。友人達が振り回されている愛や恋には、まだ少し早い。

番外：ヨンファ日常編（後書き）

次から正真正銘、三章が始まります。

折角だから後書きであんまり書く事ない時はメカニック紹介的な何かやっときます。こういうのかっこいいすよね、うん。

IS名：遊影^{ゆうえい}

基本武装：打風^{うちかぜ}×2

拡張領域：現在後付装備無し。かなり少ない部類。

概要：天鞍社が持つ二つのコアを使った研究用の姉妹機「遊景」「遊色」の内、「遊景」を戦闘型として組み直した機体。コアはほぼそのまま使われている。

最大の特徴としてISの関連機器を操る特殊能力を持つが、特殊な粒子を散布したフィールド内では使う事は出来ず、また持続時間も非常に短い。

唯一の武装である打風は自立行動AIをONにすれば自立行動する打撃兵器となり、戦闘経験を蓄積して遊影と共に成長していく。これも天鞍の考案した兵器であり、転生者の知識による特殊技術が使われている。

相手の機体に干渉する非常に特殊な能力を持つが故その運用は手探りの状態だが、理論上最大稼働のアクセライトを使えば相手の軌道すら操ることが出来ると言われる、チートである。だが今の近春の技量ではセンサーの攪乱が精々だ。

十六話：崩壊の足音（前書き）

・あらすじ

韓国代表はネットによく揶揄される事柄を茶化した悪戯っぽいキャラ設定（キリッ

とりあえずインターネットで韓国について日々激論を交わしている所がありますが、作者は中立です。念の為。

先に謝っておきます、鈴好きな人ごめん

十六話：崩壊の足音

「社長、やっぱそろそろ来るみたいやで。デモンストレーションとして重要といや、やっぱクラス対抗戦の日やるなあ」

「……やはり内部に居るか、Cプランを推し進めようとする者が」

「ま、しゃーないんちゃう？ あたしも気持ちは分かるわあ、って軽々しく言ったら怒られそうやけど。……ま、あたしの目的はAプランの方なんやけどな。社長はBプランで妥協するつもりみたいやけど」

「最も現実的なのがBプランだからな。……どっちにしろ、Cプランが成されれば世界は変わる。どちらのプランもおしゃかだよ。対抗戦に出ないメンツに関しては協力を呼び掛けてみるが……お前はいけそうか？」

「あたしの番やなかったらね。ほな、久々にお嬢の顔も見たいしそっち行くわ。にんにんー」

「よっ、久秋。さっき誰と通話してたんだ？」

「織斑か……ま、ちょっとレベルカとな。お前もこれから夕飯か？」

一夏と久秋は食堂へと向かう廊下で出会った。

現在久秋は携帯電話らしいものを持っていないが、それでも一夏が分かっているように言うのはISへの通信機を使っていたからだ。

天鞍謹製だというそれはISの秘匿通信まで扱える代物なのだが、逆に言えばISのネットワークを介しているので『誰かが何か呼びかけている』事ぐらいなら他のISを持っている人にも伝わるのだ。流石に内容までは分からないが。

「しかし、お前がこつちで食うのも珍しいよな」

「まあ、女子との接触が怖いだけでここの食事は嫌いではないさ」

「情けない台詞をカツコつけて言うなよ……」

まだ久秋の性格を掴みあぐねている一夏であった。とりあえず分かれる理由もないので二人は並んで歩く。すると話題は自然ISの事になった。

というより、と一夏は今更思い返す。自分と久秋は普通の話で話す事があるだろうか。それどころか、久秋は他の誰に対してもIS関係の話をしているような気がする。IS関連の学園だから自然な話題ではあるのだが……なんだか、寂しい気もした。

「次のクラス対抗戦は気を付けろよ。いつも模擬戦しているチ力ではなく鳳が臨時のクラス代表だ。まあお前だけに肩入れするつもりはないが……っと、なんだ、その目は？」

「いや……お前って、いつもISの事はつかだよな」

言われて気付いたようで、久秋は曖昧な調子で「ああ、そういえばそうか」と答えた。どうも自然な感じで話していてこうなったらいい。

「すまん、織斑。どうも普通の友人というのは久しぶりでなあ……」

…」

「おいおい、じゃあ中学はどうしてたんだよ？」

「番長をやっていた」

「はあ！？」

あまりにも意味不明の単語だった。

「あの頃は父親が失踪した頃で俺なりに荒れていてな。一年でアタマ張ってた三年とタイムンして学校をシメて、あの女ゲキマブじゃねとかいう舎弟が補導される姿を見て女尊男卑の厳しさを学び、他の男子校と抗争する日々だった。いやぁ懐かしい」

最早何語だ。

「まあそれ以前となると休日ごとに父親と共に海外に出向いていたから友達も少なくてな。麒麟児だなんだとメディアに言われる事もあるが、まあ時間を削りに削った結果だよ。ふっ、ちなみにこれは自慢だが俺の睡眠時間はナポレオン並だ」

そしてなんか自慢話にシフトしていた。

一応ISの話題から離れた事は離れたが、これはどこかおかしい。なんか一夏の思い描いてた会話と違う。

「……お前って、変な奴だよなあ。チ力はわりと普通なのにさ」

「チ力はまともに育ったからな。俺は父親と母親にみっちりと教育されてきた」

溜息を吐く一夏。からからと笑う久秋。

そうこう話している内に食堂に着いた。女子の視線が一斉にある者は露骨に、ある者は盗み見るように。一夏に集まる。入学して一か月、学校も落ち着き出して男と言う珍しさも日常の一部となったが一夏と食事を共にしたいものは多い。学園のアイドルとかそんな感じた。ちなみに久秋はあんななので男とか以前にイロモノとして愛されている。上級者向けである。

とまあそんな訳で一夏にいつ話しかけると機会を狙う女子だった
が

「あ、一夏じゃん。どう？一緒に食べる？」

専用機持ち、鈴音が声をかけた事により半ば諦めムードになった。彼女も幼馴染というステータスから抜け駆けすんなバリアーを潜り抜けられる人材である。むしろ「え、あたし友達だから一緒に食べるのは当たり前だけど？で、あんたは一夏とどういう関係なのかな？」みたいな牽制バリアーを張れる。

「あ、織斑！こんにちわ、一緒に食べる事になるのかな」

また、続いて現れたのはヨンファ。彼女は食事のリズムが人とは違うというか大食らいなので、基本的に一人で食べる事が多い。誰かと一緒に食堂に居るとするのは珍しい光景だ。

「よつ、鈴とヨンファか。お前ら、仲良かったのか？」

「まあそんな事もなかったんだけどちょっと盛り上がったちゃってね……で、一緒に食べるの？どうなの？」

「お、おう。そんな詰め寄らなくてもここに居るんだしそれぐらい構わんが」

「よし、決定！」

友人らしい気安さで食事をとにもする事決定。この辺り、筈や近春には真似できない技である。

内心盛大にガッツポーズをとりながら、ぎろりと目力で残り二人に『邪魔すんなよ』と命ずる。ヨンファは首を傾げるだけだったが、久秋は意図を察して肩をすくめた。

「さて、俺とヨンファで食事をとってくるからお前らは席を取っておいてくれ。織斑、鳳、何か希望は？」

「お、じゃあ日替わり定食頼んだ」

「あ、じゃああたしは味知っておきたいし中華なら何でも」

了解、と頷いて久秋はヨンファを引っ張ってカウンターへと進んでいく。

「ねー社長、私ら二人なのって意味あるの？」

「さてね。まあ、お前も馬に蹴られる趣味はないだろう」

「んー？ まあ、いたいだろーねえ」

満面の笑みを浮かべる鈴に見送られ、二人は学食を買い求めに進んだ。

「そついえばさ、ここ女の子密集してるけど大丈夫？」

「ふっ、俺を舐めるな。空気だけで倒れた時代は今は昔、成長した俺ならば性的な部分にでも触らない限り鼻血は噴かん」

それでも十分情けなかった。

人波に押されながらも、二人は学食の列に並ぶ。周りの生徒も久秋には配慮して必要以上に近づかないようにしてくれているので安心だ。逆に言うと学年中に噂が広がるほど今まで鼻血を噴いたのだが。

「そついえばヨンファ、後でISの秘匿通信で全員に呼びかけておきたい事がある。午後に合同授業があつたはずだし、機会があればチ力とセシリアに伝えておいてくれ」

「秘匿通信？　ないしょばなし？」

「そ、内緒話さ。お前たちに協力してほしい事があつてな」

アリーナを何時から使う等々、そういう伝達事項を一方的に伝える事はあつても協力してほしいなどと久秋が言うのは初めてだ。さらに言うならば午後の合同授業で伝えろという事は午後からは授業に参加せずに別の用を済ませるのだろう。そっちの方は度々あった首を傾げながらもヨンファは承諾。いつもより真剣な気がするその横顔を眺めながら、順番はまだかとぼうつとする。しばらくして

ドガアアアン！

食堂内に破砕音が響いた。なんだなんだと辺りを見回す生徒だが、誰もが粉塵を巻き上げたそのテーブルこそが音の出所だと悟る。そこに居たのは呆然とした表情の一夏と、右腕にISを部分展開し振り下ろしている鈴音の姿。拳が撃ち付けられたテーブルは、無残にも中央から砕け割れていた。

「あ、あんた……」

その声は震えており、怒りに満ちた目にも端に涙が見える。ISを思わず展開したことから考えても、正気をなくすほど悲しみ怒っている。

誰もがしんと静まり返り、経緯を見守る事しか出来ない食堂の中。一人、人込みを掻き分けて走り抜ける少女がいた。

「最ッ低！」

本当に何も考えられないぐらい怒っているのだろっ、拳が振り上げられその動きに合わせて涙がこぼれる。何が何だかわからないという顔をしている一夏めがけ、少女の体に歪なほどのその右手が振り下ろされた。

阻止したのはカウンター前の列から駆け抜けたヨンファである。両腕にISを部分展開し、交差させた腕で右手を受け止める。一夏を背中であぐらで庇ったまま、いつかのような酷薄な表情で、どこか観察するような目で、ヨンファは鈴音を見る。

「ねえ、どういう事？ ヨンファが止めなきゃ、織斑死んでたよ？ 鈴は、織斑を殺したいの？」

「うっ、あ……」

責めるでもなく、ただ純粹に疑問のような声音。対し、鈴音は混乱の極み。辺りを見回し、ISを解除し、自分の腕を戦慄の表情で見つめる。彼女の心の動きは周囲の人間から分かるはずもない、生徒たちは変わらず沈黙を保っていた。

やがて、鈴音は大粒の涙を流しながら一夏を睨みつけ、食堂から逃げるように去って行った。その進路を阻むものもなく、ただ食堂はどうしていいか分からない異様な雰囲気包まれていた。

「部分展開の練習でもするか、織斑？」

呆然としていた一夏の腰をポンと叩いて、久秋は皮肉っぽく笑う。この状況は彼にとつて好ましいものではない。専用機持ちは、極力軋轢がない方が望ましい。

さてどうするかと考える久秋の視界の隅で、ヨンファが振り返った。その表情からはあの観察するような不気味な雰囲気は消えている。ただ、怒っている。

パン

乾いた音が鳴り響いた。ヨンファが一夏の頬を打ったのだ。

「鈴、泣いてた。もうどうしていいか分かんないって顔してた。織斑のせいなんでしょ？ ヨンファはあれ、なんか酷いと思う」

ヨンファが怒る事は珍しい。というか、誰もが初めて見る光景だった。

「いや……俺は、ただ……」

「ただ？ 何？ あんな事される理由って、何？」

それは、彼女の心が成長しているという事なのだろう。保護者のような周りに恐れ怯えるだけでなく、ただ受け入れるでなく、悪いと思ったものにはきちんとして批判できるようになってきている。だが

「これは……まずいな」

久秋は誰にも聞こえないように呟いた。

このまま鈴音と一夏の亀裂が決定的になってしまえば いや、そうでなくともこのままならしこりが残る。近春は盲目的に一夏を支持するだろう、ヨンファは子供のように鈴音を信じて疑わないだろう。セシリアもその状況を収められるほどの器ではない。誰が悪くてもなく、不仲は決定的なものとなってしまふ。

そして久秋もこの局面を何とかする方法を導き出せないままだった。せめて鈴音と一夏の間にあるものが分かれば手の打ちようもあるのだが、それすらもないまま收拾にかかっても空回りするだけだろう。久秋は頭の回る部類ではあるが、何でも解決できる超人ではないのだ。

「織斑が悪いんだよ。だって鈴は いひゃああ！？」

そして、ビンタの音など比べ物にならないほどの音が食堂を駆け抜けた。それを受けた事のある生徒は、音だけで反射的に身震いする。一夏も久秋も例外なく。

頭を押さえて涙目になっているヨンファの背後から現れたのは、トレイを持った千冬だった。

「何の騒ぎかはわかんが、ISを部分的にでも展開するのは校則、国際条約に違反する。専用機持ちには特権と同じだけの責任がある

事を忘れるな。来い」

有無を言わせぬ力強い響き。よく分からない状況に混乱していた生徒も教師の、それも織斑千冬の登場に安堵する。この人が来れば大丈夫だ、そう思わせる何かがあった。『最強』の名は伊達ではない。

例外は、未だ納得していない様子のヨンファと一夏、不安げな久秋だ。

「で、でも先生！ これは織斑が悪くて！」

「千冬姉え！ とりあえず、状況の整理をさせてくれよ！」

「織斑先生！ 御足労ありがたいが専用機持ちの事ならばこの俺に！」

バシン！ バシン！ バシン！

綺麗に三連発決まった。

「うるさい。まず朴、何があろうと決まり事を破るのは悪、それが集団生活というものだ。織斑、状況は把握している。あとで鳳も呼び出すさ。そして天鞍、いくら何でもこのIS学園の校則を超える影響力はお前にはない」

それはまったくの正論だった。三人は心の中で何を思っているともとりあえず黙るしかない。

ヨンファを連れて千冬は去り、学食にはとりあえずの喧騒が戻った。誰もが先ほどの事を話題にして、ひそひそと先ほどとは違う意味で一夏を盗み見ている。

「……織斑、お前何を言った？」

「わかんねえよ……ただ、昔の約束に行き違いがあったみたいで……ほんと、あんなに鈴が怒る事だったのかなんて、全然……」

容量の得ない答えだったが、仕方ない。一夏にも把握できていないのだ。

久秋は深く、深くため息を吐いた。このままではいけない。もう一つの問題もあるが、こちらも解決しなければいけない。

「織斑、お前は少し頭を冷ましておけ。俺は今から鳳を探してくる」
そして久秋も食堂を飛び出した。この崩壊を食い止めるために。

十六話：崩壊の足音（後書き）

別に鬱展開にしたい訳ではないので、ここから壮絶なる鈴イジメが始まるセカンド幼馴染アンチ小説だぜヒャーハー！というわけではございません。先の話のための布石です。

そして『プラン』とかオリジナル設定混ぜ混ぜ。こっから原作とは離れていきます。

あと夏中完結とか全然無理そうなので近々あらずじ変えます。

十七話：メランコリック・トライアングル（前書き）

・あらすじ

テーブルは犠牲になったのだ……鬱展開の犠牲にな……

この小説での一夏ヒロインズそれぞれの様子

十七話：メランコリック・トライアングル

（鈴…… どうしてあんな事になっちまったんだよ……）

食事も手につかず、一夏は食堂で座り込んでいた。視線が集まっている事には気付いているが自分の部屋に戻る気力もない。ふわふわと、現実感のない気分だった。

それは死にかけたという現実離れた出来事のせいと言うより、知らず鈴を傷つけていたということによるものが大きい。普段は気安く付き合えるが鈴はあれでナイーブな所がある、一夏も地雷には触れないように気を付けているのだが、今回は本当に全く分からなかった。過去のいじめにも関係していないし、胸についても触れていない。

『料理が上達したら、毎日酢豚を』

確か、小学生の終わりぐらいいにかわした約束だ。酢豚を食べさせてもらえるという、他愛ない約束。料理の腕を磨くという決意だと一夏は思っていたのだが……

（それが、違うのか……？ でも、鈴が泣くほどそんな……わ、分からん……）

はあ、と深い溜息を吐く一夏。これからどうしようかと考えていると、テーブルの上にトレイが置かれた、日替わり定食だ。ちなみに割れたテーブルは既に教員が回収し、一夏は別の席に移っている。

「お腹減ってちゃロクな考えが浮かびませんよ。隣、いいですか？」

「あ、ああ……チ力か。つて、これ俺の分か！？　い、いいつて！
そんな女の子に奢らせるみたいな事……」

「私の方が織斑さんより百倍金持ちですし、気にしないでください。
それに、そんなままじゃ格好付きませんよ」

織斑さんは格好良くないと、と微笑む近春に、一夏は黙ってしま
う。大人しくいただきますするしかなかった。

しばらく無言で箸を進める二人。一夏は時折近春の表情をちらと
窺うが、特に何の気負いもないいつも通りの顔だった。もしかする
と、さっきの光景を見ていないのかと思ったところで

「織斑さん、すいません。鈴とあなたの昔の話、ちよつとだけ聞
きました」

前触れなく、そんな言葉が発せられる。はつと顔を上げる一夏だ
が、近春の表情はやはり先ほどと変わらない。

「あのですねえ、ちよつと変則的とはいえ女の子のあーいう台詞を
理解しないなんて、ちよつとないと思いますよ。鈍感です」

「んぐ、いや、俺にそんなつもりは……」

「そついう所が鈍感です！」

びしいつと箸を突きつける近春。お行儀悪い。

「じゃ、じゃあどういう意味なんだよ鈴の言葉！　俺に理解できな
いって言うんなら教えてくれたって……」

「嫌ですよ流石に。あの言葉を他人が解説するとかありえません。マジ勘弁です」

敬語は保っているけど化けの皮がはがれかけている近春である。一夏は苦い顔でその言葉を聞いていた。真剣に鈴の言葉の意味を考えている。

「……冷めないうちに食べてくださいね。私、先に行きますから」

近春の言葉に軽く頷きを返すだけで、一夏は黙考する。その表情はとても真剣だった。多分、ISで誰かに立ち向かう時よりもずっと。

（ホント、誰にでも優しいんだよねえ、ったく。でもこんな中途半端な脱落されても後味悪いしね。あとは鈴次第か）

「すまないな、セシリア。こんな時間まで付き合わせて」

「いえ、私から申し出た事ですし。でもこの時間だとお昼は購買のパンですわね。それに聞きたい事もありましたし」

IS学園のグラウンドの片隅、セシリアと箒はそこに居た。

その経緯は先ほどの合同授業の時まで遡る。模擬戦の際異様に一夏と仲良くしようとする近春に箒がブチ切れ、授業の進行を止めてしまった罰で後片付けを命じられたのだ。直さないうと思いつつも、一夏の事が絡めば暴走してしまう。

はぁ、と溜め息をつき　そして、少し遅れてセシリアの言葉を認識する。

「聞きたい事？ お前が私にか？」

「ええ、日曜日の事です」

日曜日 それは、鈴が来た日のこと。

「箒さん、あの日から何か思いつめてる様子でしたので……私の勘違いならよろしいのですが」

思い詰めていると、その自覚はあった。しかし他人にばれるほどのものだとは思っていなかった。

あの日、近春と鈴、そして箒の三人はISで戦った。結果は箒の惨敗だ。技量も機体性能もまったく敵わなかった。

それ以前にも劣等感があった。いつも固まっている仲間たちの中で自分だけ専用機がないこと。お情けで隅っこに居る感じ。一夏の幼馴染という「だけ」で一緒に訓練しているという居心地の悪さ。

「セシリア、姉や兄は居るか？」

「い、いえ……」

「そうか、実は私と姉はそれほど仲が良くなくてな」

「箒さんの姉と言うと……」

セシリアは急に変わった話題に困惑し、またどうにも居心地が悪そうだった。当たり前だ、こんな話を振られてどんな顔をしろと言うのだ。

箒の姉、篠ノ之 束。ISを発明した天才で、世界中が求めている

るたった一つの才能。しかし箒にとってはまだ理解しがたい姉ではない。彼女のせいで一夏の元を離れなければならなかったことを恨んではいる、しかしそれ以上に、分からないといった感情が先に立つのだ。

一夏と千冬のような関係では、絶対がない。まだ近春と久秋の関係の方がしつくりくる。能力の差、そしてそれ以上に思考の差。千冬は天才的ではあるが常人だ、しかし束は奇矯な性格をしている。

「私は……皆に追いつきたい。姉に、篠ノ之 束に専用機を頼もうかと思っている」

おそらくこの世界中で知っている人間は10に満たないだろう束の連絡先。箒はそれを知っている。そしてあの享樂的で奔放な姉は、箒の願いを聞くだろう。

専用機さえあれば自分も どこか醜い感情だという事を理解している。自分の特異性を、自分が嫌っているものを利用するというのに少なからず罪悪感を感じる。しかし、止まらない。自分が専用機を得て強くなれば一夏と結ばれる事が出来ると、そんな考えを捨てきれない。どちらにしろ、今のままでは対等に並ぶことは出来ない。

言葉にした事で少し気が軽くなった箒は、息を吐いて空を見上げた。自分の心を写したような、曖昧な曇り空だ。

「箒さん、いけませんわ」

真剣なセシリアの声が耳を突いた。驚き見ると、セシリアの方が先ほどの箒よりよっぽど思い詰めた顔をしている。

「お姉様に頼むという事は……何の所属にもならず、未認可のコアを、篠ノ之束という開発者の作った機体で運用する事。しかも連絡

をとれるという事実を引つ提げて。これがどういう事か分かっていますの！？」

「……分かっている、つもりだ」

世界にあるISの数は限られている。ならば少しでも自国に引き込みたいと思うのが当然。未認可のコアを使う事はすなわち「この所属にもならない」という事。今の一夏もそうだが、そんなものが一つ増えるだけで冗談ではなく世界に波紋が生まれる。

そして束と連絡が取れるという事実はそれ以上に大きい。世界規模で指名手配されている彼女は未だ自分の意思以外で現れた事がない。連絡先という少しの手がかりでも、どこの国も喉から手が出るほど求めているだろう。

篠ノ之束の専用機。それは手に入れた瞬間、一切の平穩を喪失する悪魔の誘いだ。

「……イギリスという国としては、今の話は看過できません。ですから、あくまで代表候補としてではなくあなたの友人として忠告差し上げますわ。よくよく、考えてください」

「ああ、すまないな、セシリア」

セシリアはやめろ、とは言わなかった。言えなかった。

彼女の一途さも、その生い立ちも知っている。世界の中心が一夏なのだ、彼を諦めきれはすがないんだ。たとえ、自分のその後の人生を全て賭け金にしたとしても。

雨が、降りそうだった。

空を覆う雲から、ぽたりぽたりと水滴が落ちる。雨が降ってきたかなと顔を上げる内にも雨粒は大きくなっていき、雨宿りする間もなく本降りになった。幸いだったのは今が昼休みの終わりで、ここが高校の女子校だった事だ。移動中に降られた生徒は居ても、わざわざ外で遊ぶ人間は少なかったたので被害は少ない。数少ないその内の何人かが駆けていく姿を、鳳 鈴音は漫然と見つめていた。

彼女だけは動く様子もなく、校舎に背を預けてぼうつとしていた。その姿に目を止める者もいたが、生憎雨の中わざわざ声をかけに行く奇特な人間はいなかったようだ。ツインテールに結んである髪もべつたりと頬に張り付き、肩を出す改造制服で佇む彼女の姿は寒々しい。

「どうした、鳳。早く職員室にいかんと織斑先生にのされるぞ」

いつの間にか、久秋が前に立っていた。鈴音に差し出すでもなく、自分で傘を差している。これはいらつとする。

「うつさい。ほつといてよ」

だからという訳ではないが、鈴音の声音は冷たい。今は人と話せる気分ではない、このように神経を逆撫でする男が相手なら尚更だ。

「そう邪険にしないでほしいな。それでも俺はお前を慰めに来たんだ」

「……あんたねえ、普通そいうの本人に言う？」

幼げな顔に笑みを浮かべる久秋に邪気は見えないが、絶対これはわざとだ。怒りが一回転して脱力した鈴音はそう思った。もう間違いない。

「まあ、そういう訳でだ。悩みがあるなら聞こうじゃないか。これは自慢だが、俺は今まで困った事がないからな。俺を参考にすれば何が起ころうともきつと大丈夫だ」

「それは参考にならないと思う……」

というより、誰にも相談できないしするつもりもない。

鈴音は過去、一夏に告白した。そして受け入れてもらった。そのはずだった。

しかし現実違った。約束は破られる破られない以前に成立すらしていなかった。

昔から一夏は女子に人気があつたが、皆距離を置いていた。ライバルと言えば友人の妹ぐらいのものだった。しかしIS学園に来てみればどうだ、一夏の周りには沢山の女性がいる。その中には恋愛感情を抱いている者もいる。

こんなんじゃ、あたしが敵うはずない

たかが小学生の終わりごろからの短い付き合いが、本当の『幼馴染』に敵う訳がない。

たかが中華料理屋の娘が、名家や富豪の娘たちに敵う訳がない。こんな素直になれない自分じゃ、あの中の誰にも敵う訳がない。

あの約束がないと、あたしが一夏の隣に立てる事なんてない

だって、自分なんて所詮ただの友達なんだから。

ずっとずっと無意識の奥に封じ込めていた想い。その決壊と共に、鈴音は泣き崩れた。

助けてもらって、気にかけてもらって、日本での生活を楽しくさ

せてくれた人。中国に戻ってからの辛い出来事も、いつか彼に会えると思えば乗り越えられた。ずっと友達でもよかったはずなのに。ずっと隣で笑い合っていたいられればそれだけで十分だったはずなのに。鈴音は、この時ほど自分の恋心を後悔した時はなかった。

「……まあ、泣くな。ポジティブシンキング、だ。アホみたいにしておくとまあ色々とお得だぞ」

「うつ、さい……泣いて、ない……っ！ もう、どっかいきな、ざいよお！ はやく！」

本当に鬱陶しかった。何の関係もない人間にこんな場を見られて冷静でいられる人間がいるはずないだろう。また咄嗟にISを展開して殴りかかろうとした時 ふと、雨が遮られた。

傘だ。座り込んだ彼女よりも大きい傘が壁に立てかけられていた。

「その癖はあまり感心しないな。技術に心構えが追い付いていない、精進しろ」

傘を持ち上げ目線を上げると、そこには去っていく小さな背中が見えるだけだった。

「え、あ、いや……いまさら傘渡されても……」

狐につままれるとはこういう事だろうか。感情の矛先が変わり、また冷静になってしまふ。いまさら泣く気にもなれない不思議な感覚だった。

特に意味もなく傘の柄を握りしめ、鈴音は溜息を吐いた。

「あんな事しちゃったし……もう一夏とは、仲直りできないよね…

…」

悲しみに暮れる彼女に手を差し伸べる者はいない。今は、まだ。

十八話・仲直りしたい（前書き）

あらすじ：鈴フラグなんて、立つわけない

遅れてすいません。サボってました。ちなみにギャグ回

十八話：仲直りしたい

「チカー、タオル貸してくれー」

「何やってんの久秋もうチャイム鳴るよってうわあああずぶ濡れええええ！？」

昼休みも終わる頃、皆が教室で教科書などを開いて次の授業の準備をしている時に久秋は現れた。ずぶ濡れで。

騒然となる教室、乱れ飛ぶ悲鳴。濡れたまま教室に入れるなど、十代女子の清潔意識が許さぬ。「絶対入るなよ」の視線に肩をすくめ、久秋は平然とした顔で扉の前に立ち続けた。

「はい、これ！ もー、なにしてんのよー。わっざわざこんな日に出るなんてアホじゃない？」

「すまん、俺よりアホな妹よ」

「学力的な意味じゃぬあーい」

毛が抜けるほどの威力でがしと頭を拭かれながら、久秋は笑っていた。最早お互い慣れたものである。

適当な所でタオルを受け取り、自分で体を拭く久秋。笑いながらも、どこか遠くを見ているような表情だ。別にこういう事は珍しくもなんともないのだが、それでも近春は気になる。

「ってかほんと、どうしたの？ 久秋なら何やってても驚かないけどさ」

「いや、ちょっとな。コミュニケーションというものの難しさを感じ知ってきたところだ」

訳が分からない。投げ返されたタオルを受け取りながら、首を傾げる近春。

それを意に介さず颯爽と歩を進める久秋　の前に立ちはだかる影。

「社長！　ストップ！　これ以上の侵攻は許さない！」

「服が濡れてちゃ焼け石に水よ、そんなの！」

「水だけに！」

「おい今織斑君みたいな事言った奴出ていけ」

盤石の結束力で床を濡らすまいと立ち上がった有志達である。ちなみに盤石かどうかは一人放り出された時点でかなり怪しくなった。その様子にやれやれと肩をすくめながら、久秋はもう一歩進んだ。

「そうは言うが、仕方ないだろう。服の替えは家にいかねばならんし、織斑に替えの制服があったとしてもサイズが合わん。まさか早退しろなどと言うのではあるまいな」

その言葉を聞き、女子たちは不満ながらも引き下がる　そう思っていた。しかし現実、女子たちは待つてましたとばかりに微笑みを交わす。とても、嫌な予感がした。

久秋は無意識に、踏み出していた一歩分後ずさる。数々の修羅場を体験し、自らも財界を駆け抜けてきた男が。曲がりなりにもIS世界最大シェアの会社を継げると評価された男が。女子高生に気圧

されたのである。

それもそのはず、その手に持ったものはそれだけの威力を持っていた。それ単体では何の意味もない、しかしこの先の展開を予測できる者なら戦くしかないようなりーサルウェポンが。

女性制服である。

「隣のクラスの小柄な女子から拝借してまいりました」

「ちょっと待て」

「洗濯してアイロン掛けしてるから気兼ねなく着れるよ、社長！」

「ちょっと待て」

「織斑には劣るけど、社長は特殊な需要方面には人気があるからね。写真五枚で余裕でした」

「もつと待て」

久秋は一般的な青年とは一線を画す精神を持つ。小柄な事は割り切っているし、大抵の罵倒に気を悪くすることはない。その様は精神的に成熟していると言ってもいい。変人ではあるが、そういう所は大人なのだ。

だが、大人であろうとなんであろうとこれは駄目だ。久秋にもギリギリ男の尊厳はある。女尊男卑の子の世の中を偉ぶって渡っているぐらいには。

だから、これは駄目だ。

「さらばだ諸君！ 先生にはよろしく伝えておけ！」

「あぁっ、社長が颯爽と逃げたー！」

素晴らしい反転、素晴らしい初速、素晴らしい加速。久秋は今、一陣の風となった。顔は必至だが。

誰も追いつけない中、角からまた一人女子が立ちふさがる。待ち伏せか小賢しい　と、身を屈めてさらに加速。その脇をすり抜けようとして、ふとその女子のシルエットがおかしい事に気付いた。なんだか腕が四つあるような。

冷静になる。冷静になって考える。結果、どう見ても専用機カンハダ・コミを展開したヨンファであった。

「こうする事が友情に殉じることだって皆が言ってたー！」

「底抜けの阿呆だお前はー！」

ハイパーセンサーにて強化された視力に、四本の腕。どう考えても掻い潜ることは不可能。人の身では越えられぬ難攻不落の鉄壁である。

ふ、面白い！　貴様のISを作ったのどこの社か……どっちが上に立つ者が存分に教育してやろう！

だがしかし、この男こそ人を超えるものかもしれぬ。未だ誰も成し得ぬ所業、生身での対IS戦闘。あらゆる現代兵器を過去にしたISの前に、ただの人など塵芥に等しい。そんな事実など知らぬかのように、男は死地に向かって鼻歌でも歌い出しそんな気軽さで足を踏み出す。

二人の視線が交錯する。どちらも速度を上げ、そして

無理でした。

数十秒後、一年二組にはカンハダ・コミの脚に服の端引っ掛けて連れられている久秋の姿があった。性能の違いが戦力の決定的差だった。

「ご苦労ヨンファ。晩御飯を奢ってあげよう」

「こ、これが友情なんだね……！」

「そう、友情！ 心で繋がったギブアンドテイク！」

なんか騙されているヨンファであった。でも本人は嬉しそう。

「あ、ちょっと敗れた。うわ、この脚って鋭いんだねー」

「いいじゃんいいじゃん、どうせ脱がすんだし」

そして久秋は大変な事になっていた。女子のほとんどは乗り気で妹は見えて見ぬふりの四面楚歌である。ヨンファががんばって手加減した一撃で気絶した久秋に最早救済の道はなかった。

うふふあははと微笑み合い、嬉々として脱がせにかかる女子たち。ちなみに先生はあうあう言っていて授業が進行できない。

「友情って、楽しいね……これが、普通なんだね……」

「普通ならこんな事はしないがな」

声と共に、水を打ったように静かになる教室。ぎぎぎぎと油の切

れたブリキのように振り向くヨンファ。
案の定、そこに居るのは千冬だった。

「普通なら学園内でISを展開すると言った直後に同じ間違いを繰り返さないよなあ、朴」

「ひい!？」

「お前らも、まさか授業を放り出して着せ替えごっこに夢中だなんてなあ」

「ひゃあ!？」

「先生も、これほど無秩序な状態を見逃すのは感心出来ませんね……」

「すすすいません織斑先生ッ!」

全員一気に怒られた。恐怖で震え上がる一同（先生含む）。
がしいつとヨンファの頭が掴まれた時、彼女を助け出そうとする者は誰もいなかったそう。全員合掌。

「は、薄情者おおお!」

少女は友情の尊さを知ると同時に、その崩壊をも知った。痛みと引き換えに人間的成長を果たしたのだった。南無。

時は過ぎ、放課後。一夏の部屋には彼を初めとし久秋とセシリア、

幕が揃っていた。

「さて、次のクラス代表対抗戦についてだが」

「なにナチュラルに始めようとしてんだ変態かお前」

そんな訳で、女性制服で堂々と腕組みする久秋である。ノーウィツグノーメイクだが、ガタイがいい方でもないし元々可愛い寄りの顔立ちなのでなんとなくになっていた。なんとなくっている程度のレベルだが。

「……そういうなら、お前の制服を縮めて貸してくれ」

「……なんか、すまん」

珍しく情けない顔になる久秋に対して、一夏は謝るしかない。なんか妙な空気になった。

「はいはい、そんな事より久秋さんは言いたい事があったのではなくて？」

「ぬ、そうだそうだ」

ぱんぱんと手を叩き、セシリアが場をまとめた。静かになった空間で、久秋がきりつと眉を引き締めた。女子制服で。全員マジで噴き出す五秒前状態である。

「さて織斑、率直に言っぞ。鳳の事についてだ」

その言葉で全員の笑いが収まる。あの事件はその場にいなかった

セシリアと箒にも伝わっていた。どれだけ教師陣が噂の拡散を防ぐうとしても、女子にかかれば半日で学園中に広まってしまう。

「だ、だがどうせ一夏の不用意な言動のせいだろう？　なら一夏が謝れば……」

「そ、そうですね。いくらなんでもそんな大事には……」

その場に居合わせなかった二人が気まずそうに擁護するが、久秋は目線でそれを制する。

「そんな単純な問題じゃないんだ。詳しい事はあまり他言する事ではないがな……」

「……ていうか、全員俺が悪いと思ってるのな。いや、そうらしいんだけど」

複雑そうな一夏に「一夏だからな」「一夏さんですもの」との答えが返る。がくーつと落ち込んだ。

しかし誰もが冗談のように言っているが、これは問題だと久秋は思う。良くも悪くも空気は読めずに気は使える、その性格が女にモテる所以でもあるのだろうが色々と均衡を崩しやすい。だからこそそこを支えなければ自分が思い描く計画は壊れてしまう。

「そこでだ織斑、今日は失敗したが何とか仲が取り持てるようにサポートをだな……」

言い掛けた久秋だが、一夏はそれを片手で制した。

「……どういふつもりだ、織斑。この期に及んで俺が信用できない

か？」

「あー、いや、そうじゃない。お前にはセシリアと戦う前もアドバイスしてもらってるし、それからもずっと一緒に訓練してるし、たまに勉強も見てもらっしよ。なんか世話になりっぱなしだよな」

「だから、これ以上借りを作りたくない？」

「あー、それも違うんだって！　なんかまあ脱線したけどさあ、俺、鈴とは自分で仲直りしたいんだよ。理屈じゃない、ただあいつが許してくれるって言うんじゃないかって二人で納得できるようにちゃんとやりたいんだよ。どれだけ他の事で世話になっても、自分に関わる人たちの問題は自分で解決したい」

それは、久秋には理解できない感覚だった。しかし一夏の瞳を見て、そこに揺るがない気持ちがある事を確認してしまった。見るとセシリアと第も一夏の言葉に頷かんばかりに同意の気配を滲ませている。

これは、俺の求める方向に持っていくのは不利かな

そう判断し、久秋は頭の中で計画を修正。今回ばかりは一夏に譲る事にした。

「仕方ないが、いつまでも喧嘩をしたままと言うのは俺も嫌だからな。クラス対抗戦までに仲直りしてくれ。期限を過ぎればテコ入れするからな」

「げ、脅迫かよ……ま、いいか。それとお願いがあるんだ。これは第とセシリアにも関係あるから、二人を呼んだけどさ」

一夏の発言に、今まで蚊帳の外だった二人が顔を上げる。鈴の事を思う発言に気まずそうだったり嫉妬したりの二人だったが、話は聞いている。

「あんまり専用機持ちで鈴の知り合いの俺達だけで固まると、鈴も余計気が滅入ると思うんだよ。だからさ、二組の久秋とか近春とかには、出来れ鈴と仲直りするまで俺達とつるまずにあいつの傍に居てやってほしいんだ。訓練も上手いかなくなるし、何より俺が言える事じゃないと思うんだけどさ……頼むよ」

その言葉には、切実な響きがこもっていた。

「ふん、一夏め軟弱な……だが、鈴の事は私も心配だ。私からもよろしく頼む」

「ええ、お友達同士助け合える時には助け合うべきですわ」

周りの二人も、それに続いた。

久秋は驚きと共に言葉の意味を吟味 受け入れた場合どうなるかと考える。結果、不確定な事が多すぎてどうにもならないという結論に達した。しかし、これは仕方ない。何故なら

「お前ら三人が訓練しないと云ってるのに、無理矢理に誘えるわけがないだろう。分かったよ、出来るだけ鳳を気に掛ける……」と言っても、あいつらは何も言わなくてもやるだろうがな」

久秋は専用機持ちへの指南役と言う面も確かにあるが、表向きは一生徒でありあの訓練も合意ありきの自主練習だ。この場で強制力はない。仕方がないのだ。

仕方ない、仕方ない。頭の中で繰り返しながら、何故か心地よさを感じている久秋だった。

まったく、織斑は厄介な奴だな。鳳のせいでもあるが、俺の考えていたことが全部引っくり返されてしまった。だが仕方ない、結局こんなものだ。まったく、世の中はうまくいかない事の連続だな。

つらつらと頭の中で悪態をつきながら、久秋は意識せずに微笑んだ。それは無意識だからこそ、心の底からの感情だ。

久秋は過程を気にしない、久秋は予定の元の完全を求める、久秋はあんな漠然と人に物事を頼まない。だからこそか、久秋は表面上はともかく心の中では愉快げだった。

まあ、やるというなら花道は用意してやらんとな。

少しだけ表情を引き締め、久秋はISに通じる通信機を取り出す。ここ久秋の部屋は防犯設備は完璧である、何を間違ってもこの会話が通信相手以外に漏れる事はない。

少し息を吸い、久秋は通話を始めた。

「ああ、起きていたな、チ力、ヨンファ。セシリアは少し無理になったが、場合によっては奴が味方をしてくれる。……ああ、確かな筋から入った情報だ。警戒しておくに越したことはない。教師に？無理だよ、誰が信用するんだ。分かったな、いつでも出れる心構えはしておいてくれ。」

クラス対抗戦のその日、IS学園は襲撃される」

十八話：仲直りしたい（後書き）

なんていうかキャラ崩壊もわりとしてるような。意図的なものもありますけど。

定番の女装ネタ入れてみました。折角シヨタっぱい見た目に設定したのももの。

次回からバトル。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914v/>

IS～社長、鼻血出てます～

2011年9月22日18時03分発行